

# 萩すいき

萩すいき



Y95

サ9

館内



114  
792

萩隨記

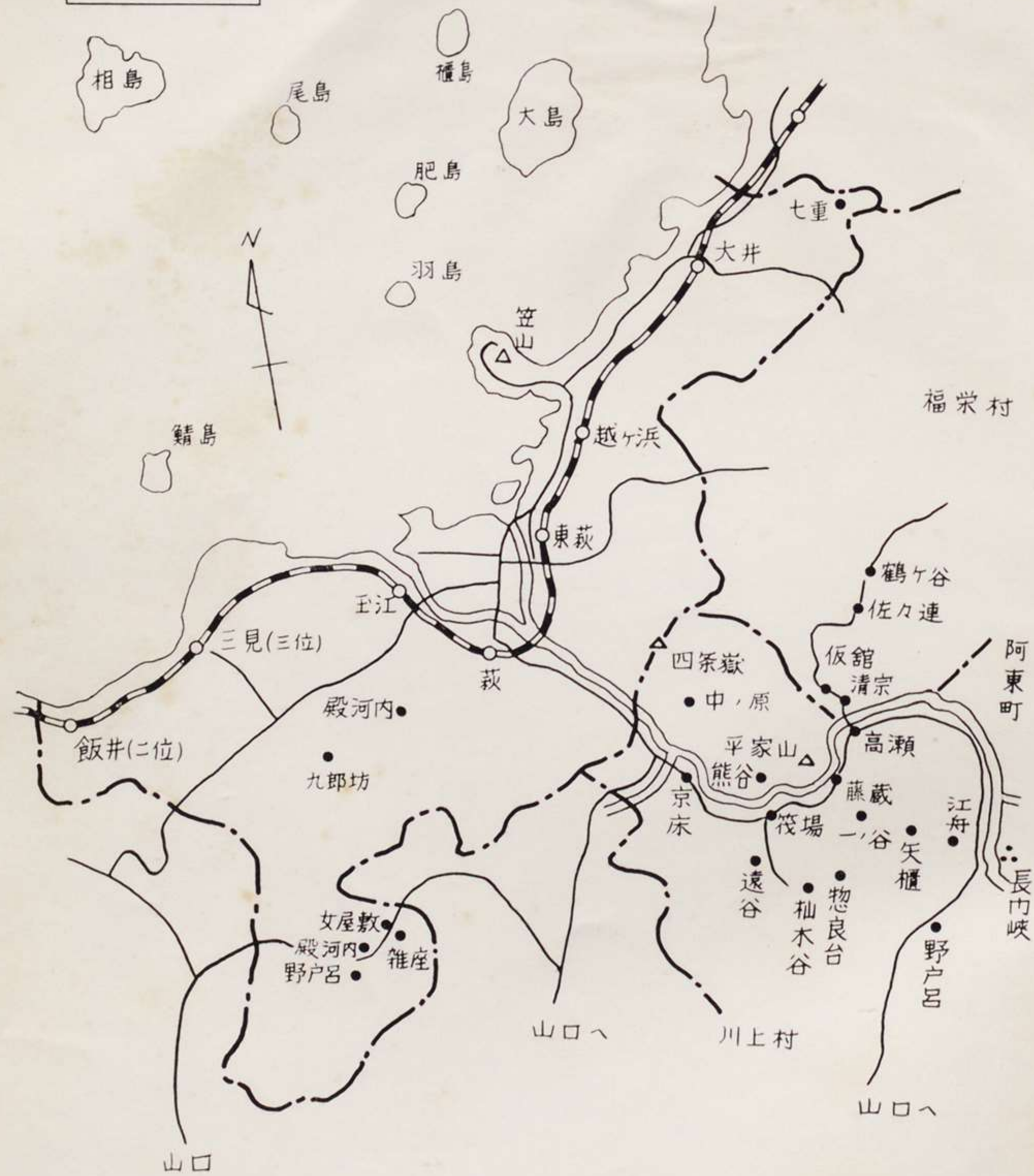
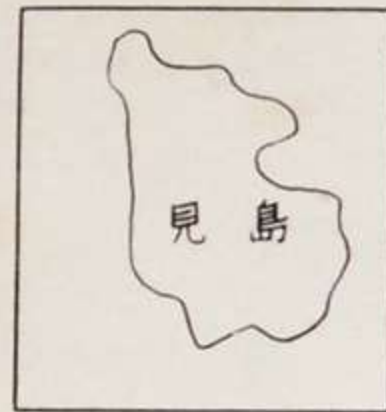


34800

萩市立図書館

Y914

792



目  
次

萩オンナ……………三

「玉の越」に乗る……………一三

「五輪塔様」に足を向けて寝られない……………二一

穴観音……………二七

イヤジャ、イヤジャ……………三三

「アナトの国」……………三七

萩焼は小児マヒである……………四五

人は「マスメ」で勝負する……………六五

「カワラ」に毛がハエた……………六九

徳川家康さんは「萩がお好き」……………八五

「ビスケットを投げなかつた」だけ……………九九

萩のお方は文化人がお好き……………一〇三

萩の「かくされキリシタン」……………一一一

死に「バナ」を咲かせた……………一一九

「税務署」サマサマ……………一三七

人は「アイマイ」なるままでスタートする……………一四一

萩とお城とお家柄……………一四七

「パチンコ屋」のための商店街……………一五三

煙にまかれる……………一五七

港が出来る「オンボウ屋」がもうける……………一六一

機関車？は線路の上だけしか走れない……………一六五

オメデタイ……………一六九

利休さんが「クシャミ」をされる……………一七三

社長さんはお金がお嫌い……………一七七

「男なら」を裸で踊れ……………一八一

あとがき……………一八九

萩年表、その他……………一九四

(メモ)……………二〇二

「萩  
随  
記」

装丁・絵・著者



萩で生れ中学時代まで育ちその後は各地を転々と流れ歩きそのアゲクのはてに職を得て萩に帰り、再び郷土萩を眺める機会を得たのだが、その間遠く近く萩をみつめ色々と思ひ合せて言えることは、これ程までに景色がよく夕暮れ時などはコバルトブルー一色に染る空、澄みきった空気の味などは萩だけで生活している者にとつては到底味わえない真の萩の魅力であるようだ。その上春は古い築地（ドベイ）越しにみえる「みかん」の花、紺碧の夏の海に突き出た指月山の容姿、東光寺は紅葉の秋、ニブイ鉛色の冬の海の景色など、他所では感ずることの出来ない萩だけの肌ざわりのようである。この肌ざわりの中でこそ生れ且つ育つことの出来た明治維新での歴史の数々などを振り返りまた見なおしてみると、改めて萩の真の姿に接するような気持ちともなり、萩の良さがシミシミと身体の奥底深くにまでも伝わってくるような気がしてくる。それだけにこの時代から取残された萩を愛し、萩に生れたことを今更ら乍ら喜び、萩で生活出来ることを楽しみ今までに感じた萩での味を自分なりにカミシメて浅学非才をかえりみず下手なペンを握つて意の向くままに「肥後ズイキ」ならぬ「萩随記」を綴ってみた。若しこの拙文が新しい意味での萩へと産れかわる足がかりにでもなればと願っているものだし、またこの拙文が本当の意味での萩を観て貰うための観光の一助ともなれば、これにこした幸せはないものと思ひます。



## 「萩オンナ」の巻

「山口オトコに萩オンナ」ということばがある。美人が萩のおみやげ品のように聞こえるほどに、萩美人の代名詞があるが、一体その出どころは、どんなところにあるのだろうか。

第一に考えられることは、先ずは萩の地理的環境からいえそうな気がして来る。即ちこの近辺で美人と言う字のつく地域を挙げてみると、この萩を除いては、なんとと言っても、先ずは中国地方では、出雲美人が第一であろう。それから四国地方に渡っては宇和島美人、九州地方では、天草美人、平戸美人、そして博多美人、といった具合に、美人が御土産品のように聞える程美人なるものの特産地がかなりある。

そこで考えられることは、それらの美人特産地なるものが、一体地理的にみて、また歴史的に考えて、どんな立場にあるかと言うことだ。

萩　それらの地域は、四国の宇和島を除いては、今のハヤリことばで言えば、密貿易の盛んであつ

た地域ばかりであるからオモシロイ。もちろん貿易なんてことばが通用しなかった、昔々の大昔の頃のことだから、よくは分らないにしても、今を時めく南鮮、北鮮、それに中共をも加えた各密行ルートばかりの地域であるような気がしてきて仕方がない。

大体大昔からのことで、潮流なんて名前のついていない頃からのことだし、又日本と言う国の歴史が始まっていない時から、黒潮の分流である対馬海流なんてものは流れていたようだからアチラさんからは来る積りはなくとも、エンジンをもたない、波まかせ、風まかせといったようなその頃の舟は、いわば丸木舟に毛のはえたようなシロモノなので、当然南は九州沿岸から、山口は北浦を通って、島根半島あたりの沿岸ならば、朝鮮からは時間がかかるだけのハナシで流れつくのには「カッコウの場所」と言うことになりそう。

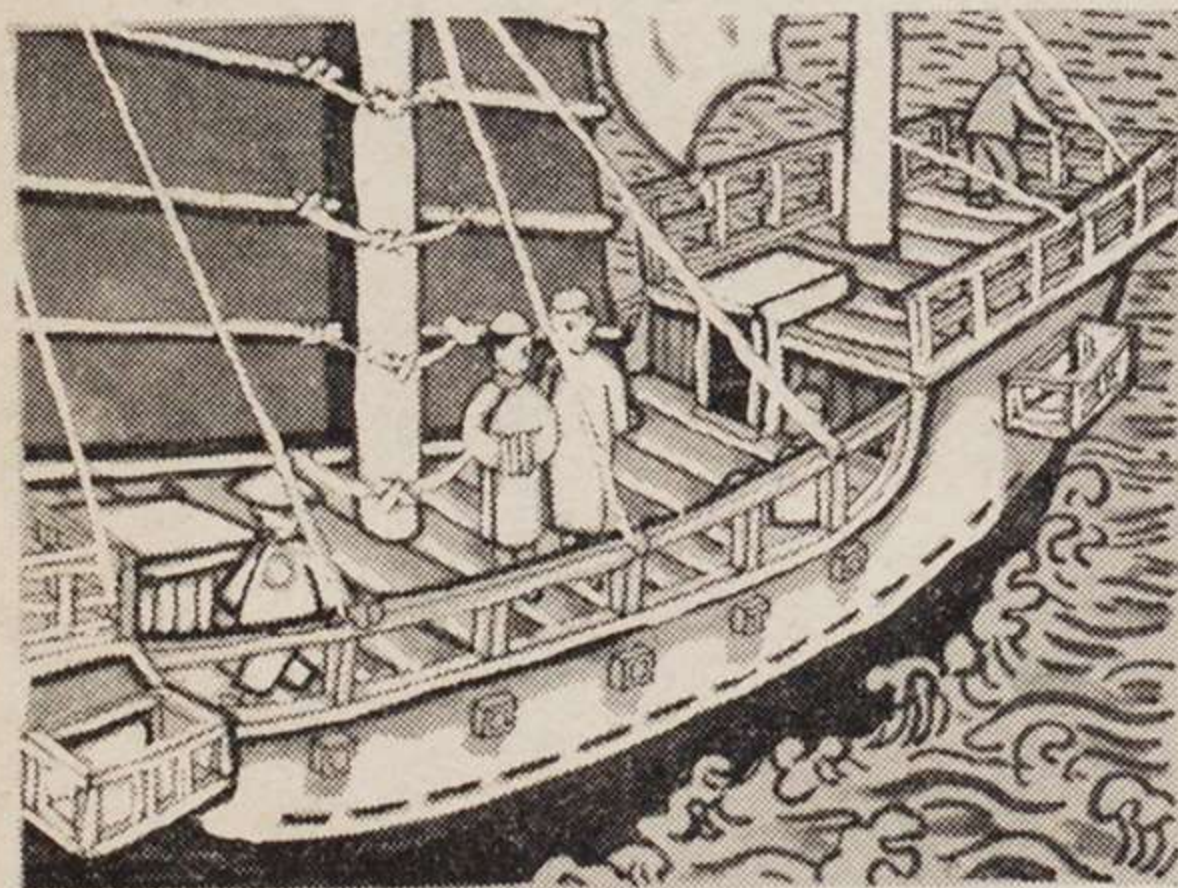
そこで一つ思いつくことは、吾々がその昔、絵本その他で教わった、オナジミの大国主命がイナバの白ウサギのオテアテをなさって居られるお姿を拝見するに、童謡の文句ではないが、大きな袋を肩におかけになり、左前の御着物をおめしになって居られるお姿はどうしても「ポロありませんか？」と廃品回収を業となさっておられる朝鮮のオカタを連想させられて仕方がない。

「縁結びの神様を何事です！」とお叱りを受けそうだが、ご免遊ばせ、唯々そう思っただけですから……。兎に角それらの地域は、大和民族以外の国の方々が多くお出入りをなされたような場所

ばかりである。即ち他国人、言いかえれば、今で言う出稼ぎ人と言った方々が多くお出入りなさったと思われる地域ばかりであると言うことになりそう。

大体アチラさんにしても、今の日本と同じように、お金持のタイジン、ヤンパンと言った方々は、態々外国までも出向いてご商売はなさらないシキタリは、今も昔も変わらないことだと思われるので、あえて出稼ぎ人と言った方が適切なような気がして来てならない。つまり余り高級な方々がお出入りなさらなかつた事だけは確かなようだ。然しこれらの地域のなかで、四国地方の宇和島の美人特産地なるものは、所が所だけに、代々海賊の本拠として有名な地域であるから、これはご商売つまり貿易なんてなまやさしいものではなくて、掠奪と言う方法で、昔から美人どもをかき集められたように思われる。

考えてみると、美人なるものを産する地域は血統的にみてどうしても純粋型とは言えそうにない点ばかりである。即ち萩美人とすることばが産まれた理由の一つはどうも朝鮮あたりとの混血であると言う意味をも含んでいるようであり、萩



貿易船

近辺の方々は、人種的にみて雑種の「サイ」たるものであると言う証明としか聞きとれないような気がして来てならない。つまり余りホメたことばではないことだけは確かなようだ。

処で余談にはなるが、最近この世の中が落着いたせい、人間族の結婚話の中で、血統とか、家柄なんて言うことばが、またボツボツと頭を持上げてくるようだが、よく考えてみると変な話である。その理由の一つに、最近愛犬熱が流行して来たが、その愛犬どもは皆血統書つきと来ているから、若しその犬どもが人間族の言葉でも解せるようにでもなれば大変で、恐らく犬どもは鼻の先にシワを寄せ、美人面をして犬を連れてくるご婦人方をみて大いに笑うことだろう。然し犬でも雑種になる程、オツムの方はオカシコイと一般に言われているので、そういう考え方からすれば、美人程オツムの方もよい事になりそうなのだが、その点はどうですか。「皆んなホレたら美人に見えますよって」そんなものですかね？

処で第二理由として考えられる点は、いまからおよそ三百年ばかりの昔のこと、萩が毛利のお殿様の居城とあいなったということになりそう。ところで萩の毛利のお殿様の菩提寺、東光寺、大照院の両お墓所をみて、まず驚かせることは、お殿様の正妻の墓石のほかに、おのおの何々側室さんと名付けられた側室さん方の墓石の多いことだ。もちろん毛利のお殿様だって、徳川さんから押しつけられた政略的結婚？による正妻なのでは、毛利のお殿様ならずとも、お側付

きのお女中に、手か足かは知らないが、出しくなってくるのは人情のツネかもしれないが、それにして側室さんの数が多すぎるのではないかと思われる。従って萩の両菩提寺に御安置なされて居られる毛利のお殿様方の御年令を調べてみると面白い、即ち当時は大正製菓の「サモン」なるものもなく、御年七十三才で亡くなられたお殿様は例外とし、殆んどのお殿様方はお若くして亡くなられていると言うことだ。無理は昔からいけなかつたようですか？

それはともかくとして毛利のお殿様が萩へお越しになられたのは、歴史も新しくご運も悪く、豊臣方の石田三成ダンナになびかれたばかりに、徳川のオヤジさんから生まれ、ご領地の中国地方全域から、一番端っこのいまの山口県へと押し込められたのだから、毛利のお殿様にはお気の毒だけれども萩の地の者からいわせれば、よそ者の大将が毛利のお殿様ということになり、これも第一の理由とは別な意味ではあるが、混血的な理由として考えられないこともない。

ところでそのお引越しの折り、毛利のお殿様は中国地方全土から、かき集められた美人ども、ごいっしょにお連れになさったもようであるから、萩美人の原名の出所も、そんなところにあるのかもしれない。

ナ  
ン  
オ  
萩  
第三の理由についてであるが、萩はもともと山陰僻地の町であるということだ。いうなれば、中国地方を二つに分けて、山陽と山陰ということになる。すなわち萩は山陰僻地の雄であり、冬



大照院の側室さんの墓

ともなれば一向に太陽のお顔はおがめないし、一年中を計算してみると日のあたる回数には山陽道に比べて少ないということであって、この萩では山陽道のお方よりも色白という結果が出そうである。

昔から美人の要素の一つに色の白いことがあげられているようであって、俗語に「色白は百難かくす」いや「七難かくす」かな？どちらでもよいですが、とにかくこの俗語が示すように色白は美人の基準をなしているようだ。そのように、山陰は萩の測候所長さんの話ではないが、統計上快晴なるお天気は、一年三百六十五日の中、ナント五十七日しかないというところで、その残りの日数は曇りか雨、それに白い雪の日

ということ、山陽に比べて天候もたしかに悪く、その字の意味からしてもいわゆる「陰」であるから、萩オンナは色白で美人の条件には合うが他面、性格的な「グズ」という点が指摘されようである。また第二の理由のように、上はお殿様から範を垂れられたように、上流社会からして側室さん方、つまり「オカコイモノ」のご養成が多かったようだから、その当時の家族制度の

中においては、妻の座としては、女は意思表示はあまりでき兼ねるような「グズ」な性格の女が要求され、一方男どもは大手をふって「オテツケ」ができるような風潮があったのではないかと、この疑問がわいてくる。

大体昔から、いや今もそうだが、男族なんて種族は勝手にできているようだ。「なに？女のほうもだつて？」いやそんなことはないでしょう。したがって男のうわ気や道楽が公認されるような環境を男族どもはしだいに作り、それに適応するような性格的な「グズ」な女の美人が歓迎され、その結果が、萩が美人特産地の称号を賜ったのかもしれない。

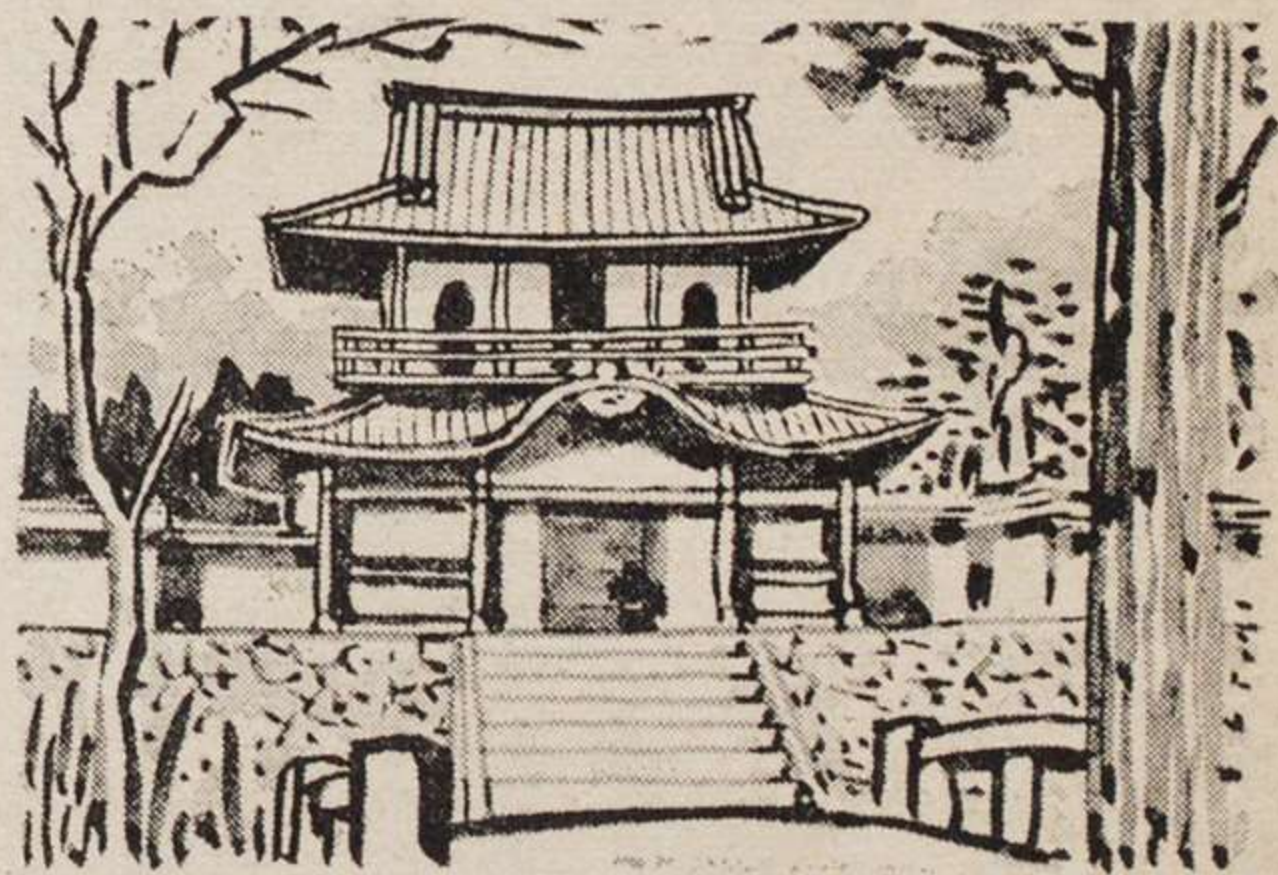
第四の理由にあげなければならぬことに水がある。すなわち昔から美人と水とはつきものであって、萩は長門峡の清流による阿武川が流れ、萩は阿武川によって生まれた「デルタ」であるから、萩の町自身が美人を産する基礎基準をなしているのかもしれない。しかもこの交通不便な田舎町の萩では、工場汚水問題なんてことは、今後もし起ることは絶対になさそうであるから、山陽道の地域とは違って、この萩では今後も美人を産出しそうであるということだ。

最後に第五の理由として考えられることは、萩はかつて「ツバキ」(椿)の産地であったということだ。しかしいまは「ツバキ」の木は余りみあたらないが、昔はこの北浦地方には、かなりの萩の木があったようである。つまり前にも述べた、毛利のお殿様の菩提寺の一つ、大照院は

その山号を「靈椿山」と称しており、また萩の周辺には「椿」という字のつく地名が、現在もたくさんにある。そこで考えられることは、このツバキの実からとれるツバキ油なるものは、当時から女の人の髪油として賞賛されていたのではなからうかということだ。俗語に「髪はカラスのヌレバ色」うんぬんということばがあるが、これも萩の美人を引き立たせるための化粧法、つまり女の「ミダシナミ」としての役目をはたしたようだ。

以上のように、萩美人の要素があまりありがたくない混血の結果のものであったり、お殿様方によるかき集め策などであったり、また山陰という環境であったり、あまりホメた理由はないのだが、前にも述べたように「陰」という字は「グズ」ではあるが、その半面、表面的ではないが、内面的で情熱家が多いということがいえるのではあるまいかという、いま一つの疑問である。

その証拠に皆さま方もすでにご存じのように、山口県民謡とまであいなった、あのあまりにも



靈椿山大照院正門

有名？な、萩の「男なら」の一件のように、萩の男族どもが長州征伐の折り馬関（今の下関）方面までも出向いて留守のこと、この萩の沖をロシアの軍艦が通るや、待ってましたとばかりに、精力の余った？（もちろんそれだけではないでしょうが）萩オンナの方々は、モッコやテミイそれにクワなど、つまり今から考えてみると原始的な道具だけをもって、当時砲ルイと称するお台場を築き、萩オンナの心意気をイヤがうえにも示された情熱的な行為を高く評価され、これが萩オンナつまり萩美人を広く天下に売り出した一つの動機となったように考えられないこともない。すなわちいまも立て札つきで残っており、萩の名所とまであいなっているかの菊ヶ浜の女台場、つまり砂でもって一キロにも及ぶ大きな「ドテ」を海岸に沿って作り、それに町中のモロモロのお寺の「ツリガネ」をそのドテの上に乗せ、しかも「毛」のかわりでもあるまいが、ごていねいにも芝ふまでも植えそえて、太いの、長いもの、とうちながめ、敵艦にあいまみえんとした萩の女の心意気は、さぞや壯観そのものであったことだろう。

萩オンナ  
萩の男たちが家をアケると、かくも萩オンナが強くなったということは、山陰であるがための内面的情熱家が萩オンナの主流をなしているのであるということになりそうだ。してみると混血で色白く、しかも一見おとなしくみえ、情こまやかで、いったん「カンキウ」あるときは、焼き尽くさねば身の置きどころもなくなるような、二重人格的なグズな性格が、萩美人としての内



女台場構築風景

面的な条件をなしているのかもしれない。そんな性格的な女のヨサは現代のお若い方々には、とうていおわかりになっただけそうにもないのだが、考えてみるとお気の毒にというほかはないようだ。つまりすべてそうだが、底のみえすいているようなものは、あまりアジ？があるものではなさそうだ。

ところで昔からのことわざに「段々よくナル法華のタイコ」ということばがあるが、考えてみると「萩オンナ」のために作られたような気がしてきてならない。同じおみやげでもタイてみたぐらいでは、なかなかそのモノのヨサはわからないように、萩美人のヨサは眺めたり、さわってみたりしたぐらいでは、とうてい味わえないようであって、その点萩オンナは大事に長く使って、だんだんイロヅキ、ナレてこのみの型にかわってゆく萩焼き茶わんと同じような気がしてならない。本当かしら？。疑われるお方はぜひ僻地の萩までお遊びにお越しになられることですか。それも一日か二日ぐらいのことでは本当の萩の味はわかりませんが……。

## 「玉の越に乗る」の巻

昔のこと、毛利のお殿様によって開城され、文化の僻地であるこの萩にも阿武川の清流とお殿様方による略奪婚の流れをご踏襲されたお手柄とによって、ウルオイのある「萩美人」と言う名の「花」を咲かせて貰ったことは、今更ら歴史の本を腰ヒモではないがヒモトカなくとも想像される場所である。

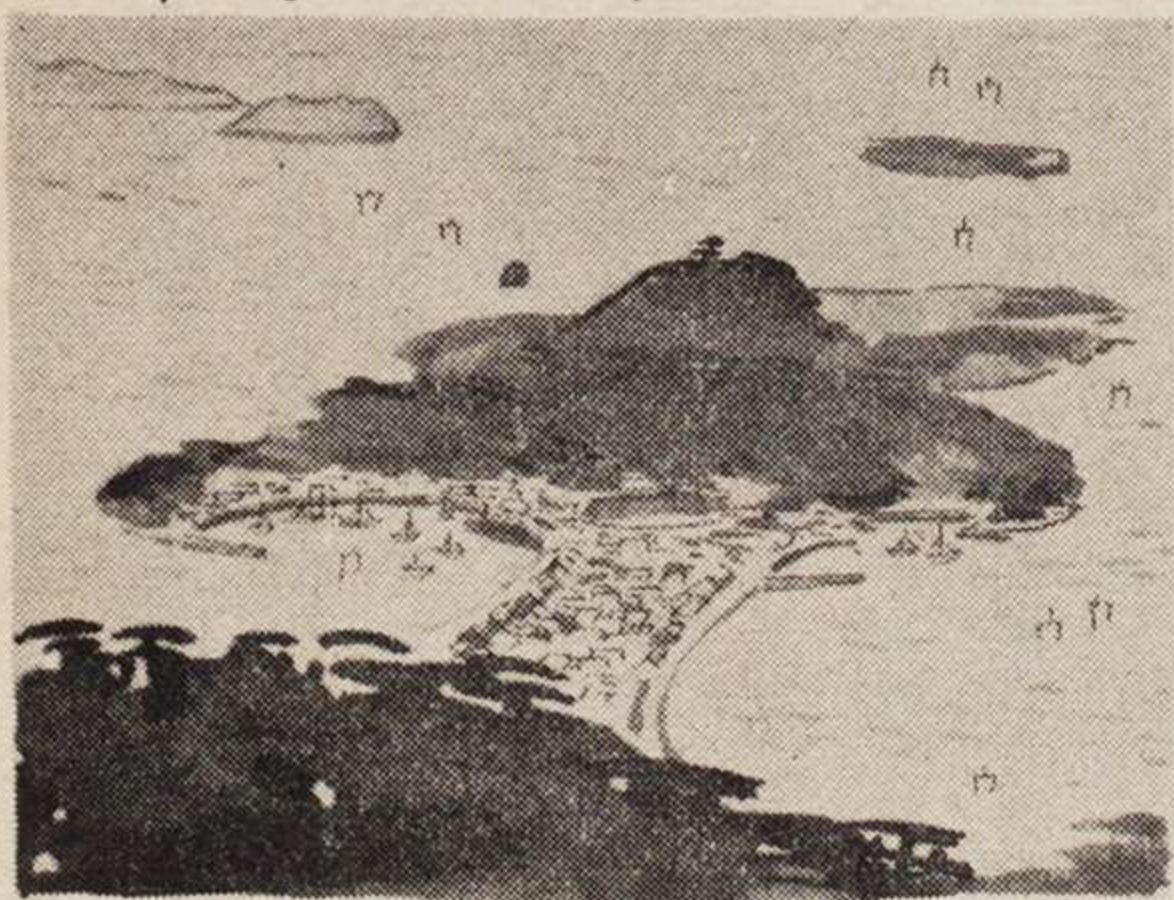
ところでこの阿武川の清流によって出来た、デルタ萩の北、即ちモデル的塊状小型火山の典型として名高い笠山を陸続きとしている越ヶ浜。それにこの萩の西にクライする玉江浦なるものは現在ともに近海、遠洋の両漁船の基地として存在しているが、この両地区の存在こそ、実は「萩美人」の名を産んだ拠点でもあったように思われる。

先ずこの越ヶ浜なるところは、かつて毛利様の藩政時代のこと、越後米（今の新潟県の米）を南廻りで、江戸表や、大阪は堺港へと廻送されていた当時の千石舟、つまり精しくは北前船の中

継港として、石見の国は温泉津港と共に大いに栄えたものであったらしい。即ち毛利のお殿様はこの越ヶ浜なる所で、撫育局（ブイクキョク）、越荷方（コシニカタ）なるお役所を設け、一方ではその「サヤ」をモウケて居られ、その上「夜」ともなると、舟頭やその他の舟の乗組員から金銭を、舟のつみ荷どうよう「マキアゲル」一つの手段として今はなき「遊郭」つまり「女郎屋」なる「アソビ場」をこの越ヶ浜に設け、オモテ、ウラ共に「ツヤ」のある「モウケカタ」を毛利のお殿様はお考えになったようで、お殿様も「ツミナオカタ」であったと言えそうである。然もこの「モウケ」の金は、つまり撫育局、越荷方なるお役所に納められ、別途会計であったらしく、然もそのお金が明治維新回天の折の軍資金と相成ったと言う話だから、昔から越（腰）の力は偉大であったものと言えそうで、世の中も案外「アジ」なものであるようだ。

処で今もこの萩で流行している、かの「嫁泣港」なる歌の文句のなかに浪曲の吉田御殿ではないが「白い手が招く云々」とあるのも、当時恐らく、金を掻き集める手段として、この萩の附近から「オキレイドコロ」として相集められた、いわゆる子女御婦人方たちが、この越ヶ浜なる「クルワ」つまり女郎屋なる二階の窓から「スイ」をこらして、男から金を捲き上げるための、そして「アソバセル」ための一つの「シグサ」であったとも考えられそうだ。つまり昔から男は「オンナ」にはアマク出来ていたと言う証明のようですナ？。兎に角そんな訳でもあるまいが、今

でもこの越ヶ浜では、ご婦人方とはとてもではないが「ヨル」「ヒル」ともに大変な「ハタラキモノ」が多く、その上表面的には「亭主関白サマサマ」と言ったご家庭が多いようだが、これももとはと言えば、毛利のお殿様時代からの、越ヶ浜でツチカワレタ遊郭的な、つまり男を大いに喜ばせ、アソバセテ呉れるための一つの技術を自然に身につけられた「オンナ」の存在を物語るものであるようであって、その一つの型式が今だに、この越ヶ浜なる所には残っているのではないかと思われないこともないようだ。従って今でもそうだが、この越ヶ浜では、沖から帰った漁師達は、遠くは下関や博多の港に入港するや、蜘蛛の子でも散らしたように、モウケタ金を汗ばむまでに握り締めワキメモフラス、吾が家へと急ぎ、奥さんの「フトコロ」の奥深くに飛込んで帰られる程の越ヶ浜のご亭主族の、哀れなまでの御心情の程も、ヨクヨク考えてみると「ウナズケル」ような気がして来る。尚この越ヶ浜では最近までそうであったと言うことだが、日中でも家の前にご亭主の雨具がさげてある時は「オアソビ」の最中の合図であるらしく、近所の人も訪ねないシキタリになって



越ヶ浜風景

いると言うことだ。

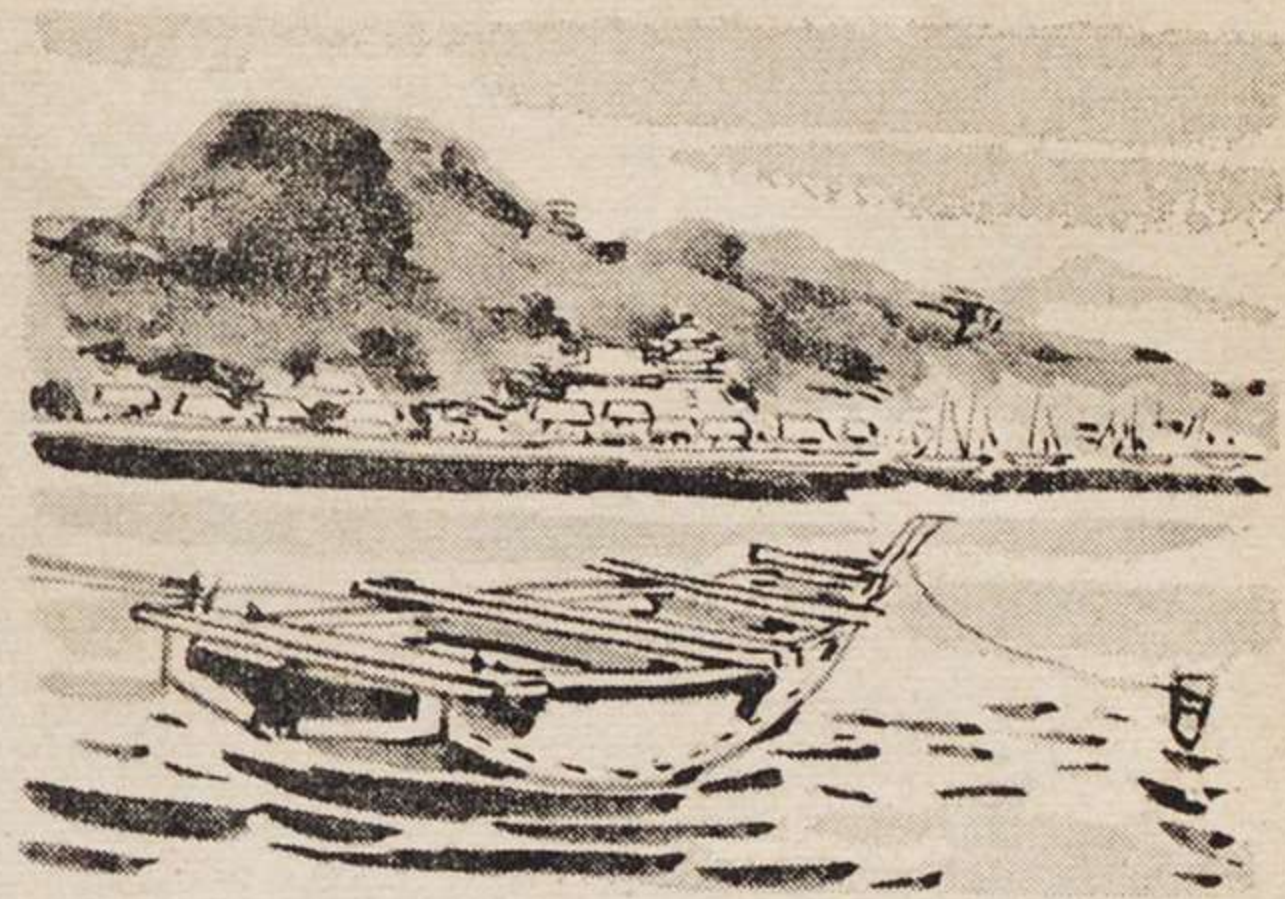
処が一方西のカタなる玉江浦では「オンナ」が働き者である点については、先きの越ヶ浜の「オンナ」の方とは同様ではあるが、玉江浦の御婦人方の違ふところは「気位」が高いと言うことだ。かつて吾々が子供の頃によく見受けられた「カネリ」（魚を入れる桶を頭の上に乗せた御婦人のこと）のオバサン方による「イオ（サカナのこと）を買いジャンセ！」とドナラレ、半分押売りの如き印象を受ける程の気位の高さであったようだが、この気位の高さが家庭の中にまでもシミワタリ、玉江浦の御亭主族は、先きの越ヶ浜の御亭主族とは違って「実質的養子型」の存在と相なられ、男は「オンナ」のタメにあるが如きアリサマで、オシリに敷かれ「オンナ」のために金を儲ける道具化したように見受けられる点は、越ヶ浜の場合と比べて、一見同様のようには見受けられるが、実はその立場を異にしているように思われる。つまりそんな結果と言う訳のものであるまいが、今でもその風習が残っているように、この玉江浦なるところでは、男性どもは一定の年令になると「舟宿」つまり「青年宿」なるものに投げ込まれ、金儲けの道具的教育を受けさせられ、頭から押えつけられる環境、即ち簡単に言えば「オンナ」のお尻に敷かれる立場に「ナラサレ」、その風習が身にシミツイタところで結婚と言う年令になるように計算されている「アタリ」など、考えてみると玉江浦の男性方は誠にお気の毒と言う外には、言いようがない

程だ。然し玉江浦の御亭主族はそれでいて、ともにイトモご満足気な顔立ちをして居られ、「オンナ」のお尻にしかれた「アジ」が忘れられない程の余韻のある愛情を玉江浦の御婦人方はお持ちなのかもしれないと言うことだ。兎に角この玉江浦でも越ヶ浜同様、御亭主が沖からご帰還あそばされると、いまの共産党ではないが家の前に雨具ならぬ赤い旗を立てられると言う話である。

ところがこの玉江浦なる地域については、古老の言い伝えによると、モトモト源平の赤白合戦のその昔、なんでも壇の浦の戦いのあと、平家の落人方が相集まられ、椿の郷は山田なる海の入江の程近くに住みつき、その地名もかつての、おつかえしたお姫様のお名前にアヤカッテ、「タマエ」とつけられたと言うことで、玉江浦の御婦人方の気位の高さも案外そんな点から来ているのではないとも言えそうであって、ウナズケないこともない。

又昔からの言い伝えの一つで、天下によく知られている通人方の諺に「肥後のズイキとリンの玉」と言うのがある。ソモソモこの「リンの玉」なるものは、お宮のガマケチならぬ賽銭箱の上で、カリ首よろしくブラリとサガッテいる「鈴」のことであるようだ。そう言えば鈴のカタチは何かのサキに似ているし、古くは平安の昔より「オンナ」の「オマモリ」として愛玩され「オナグサミ」の折りに使われて、タエナル音色もチンチンとイトモ「興」をモヨウしたと言われるも





玉江浦風景

ので、玉江浦の御婦人方も、昔は御亭主方の久々のご帰還の「ミギリ」ご使用に相なられたと言うところから「玉」の入江、つまり「玉江」と言うのが地名のオコリとも言われる「チン説」もあるようだが、その点の「シンギ」の程は分らない。然し平安の頃、暇のあり過ぎる奥女中方が「玉」なる鈴で一人でオナグサミ遊ばされたと言うことは、その「道」の通人方のヒトシクお認めなられる程のことだから、マンザラでもないのかも知れないが、凡人のウカガイ知る由もないこと。

質がウカガエルようだ。ところで最近の御婦人方のお化粧法なるものが大変によく進歩したセイか、顔の型までも、流行の「インスタント」化しているように見え、型にはまった幾種類かの形式化された、つまりソコラ、ココラにザラに見受けられる御婦人方の顔立ちよりは、この玉江浦や越ヶ浜あたりの御婦人方の顔立ちの方が、はるかに個性的であり、然も確かに美人型であるよ

うだ。勿論女の評価と言うものは、顔立ちだけで定められると言う訳のものではないことは、今更ら言うまでもないことなのだが……。

そこで、これらの両地区はともに、海と言う自然の脅威に立ち向う地理的条件から「ハグクマレ」「ツチカワレ」そしてその気性の「ハゲシサ」が身体の内自然と養われ、その心の奥底深くにヒソんでいるようだ。即ち日本海の怒濤の如く、折にふれ、時によると、打寄せてはハゲシク岩に「ブツツカリ」？そして最後に「アワク」飛散して消えて行く波シブキの如き「サマ」は激情による「オンナ」のハゲシサを物語る心情にも似て、男族共には「エモイエヌ」ヨロコビなのだと言うことだが、この心ニクイまでの女の心情が、これらの地区の御婦人方の心の奥底深くに、ともにひそんでいるようで、その点が矢張り「萩美人」と言う名を高く評価させた一つの大きな素因をなしていたのではないかとも言えそうである。

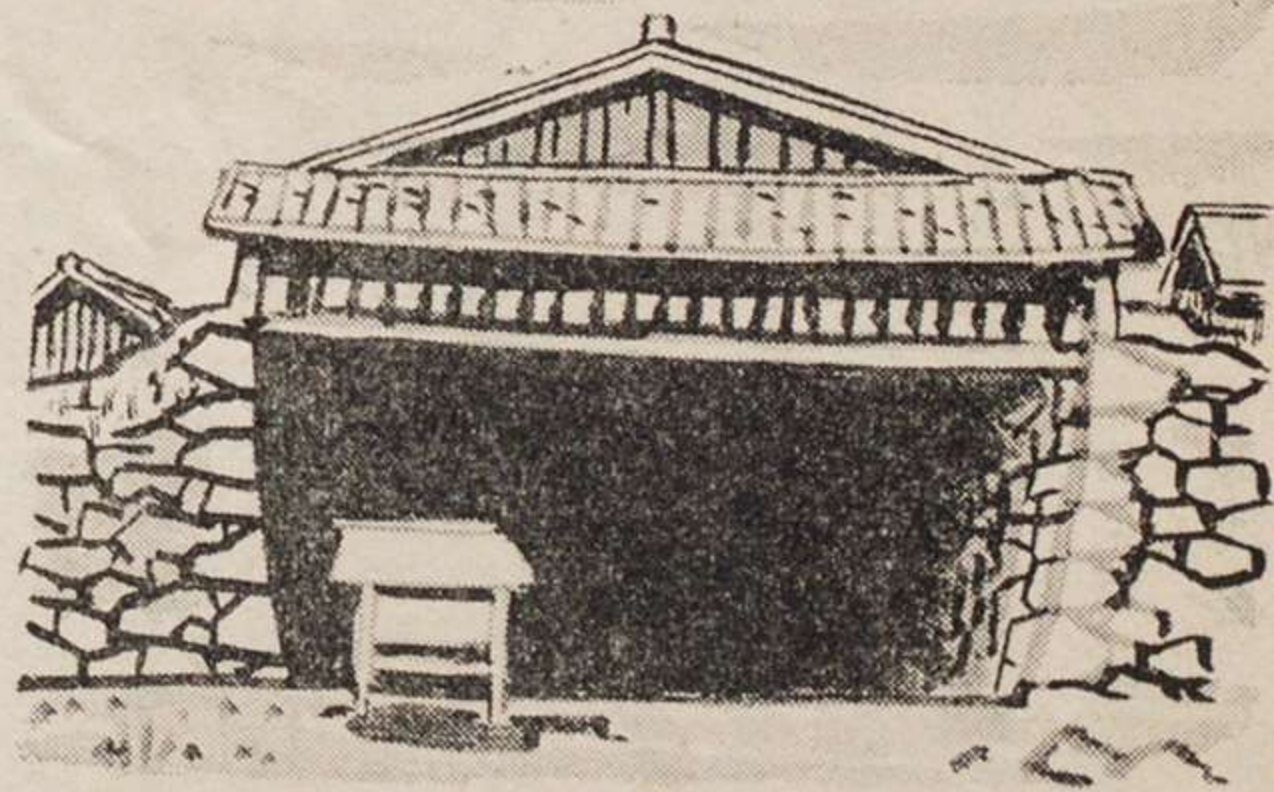
「玉の越」に乗る

考えてみると、古くは毛利のお殿様も案外「オツ」なお方であったようで、年に二度ばかりはお座舟に乗られ、越ヶ浜の厳島神社（弁天様で、つまり女の神様？が祭つてある）へお参りとシヤレコマレ、民状視察とかで玉江浦の観音院（カンノンサマ、これは女の仏様？がチン座ましましておられる）へとお越しになられたと言うことだ。してみるとお殿様もナカナカオメが高くそんな点からも「美人」をお集めになられたのではないかという気がして来る。お殿様も「ツミナ

オカタ」であつたというものだ。

昔からの諺に、ヨイ身分になることを「玉の輿」に乗ると言われている。毛利のお殿様は舟で「玉」（玉江）や「輿」（越ヶ浜）にお参りになり、共に女の仏様や神様をおがまれて、諺を地で行かれたものらしく、吾々も一度は毛利のお殿様に「アヤカリタイ」ものだ。

追記——越ヶ浜にはいまだに「カドナ」つまり屋号にイチゴヤ（越後屋）、越前屋など北前船にちなんだ屋号がありな中には「マメ屋」なるものもあるが、これらはともに以前藩政時代にあつた「女郎屋」なるものの屋号だと言われている。今もその当時の家が一部に残つてはいるが、この北浦地方は季節風の北風が特に強く、当時の家屋は一般にみられるような二階屋ではなく、「女郎屋」と言つても、中二階式の低い家屋で、格子戸がそれぞれに取付けられた家が多いようだ。



お殿様の御船倉

### 「五輪塔さま」に足を向けてねられないの巻

「五輪塔様」に足を向けて寝られない

「萩オンナ」で忘れてならないものの一つに、平家の残党の後裔説がある。即ち寿永三年二月七日のこと、源九郎義経による一ノ谷、鴨越ヒヨドリゴエの奇襲作戦に敗れたのを始まりとし、讃岐サヌキの屋島（今の香川県）、それから瀬戸内海を転々と西下し、最後に年もあけた二月十九日、平ノ宗盛らは安徳幼帝を奉じ、馬関（今の下関）の壇ノ浦に於て最後の抵抗を試みたが、とき利あらずして敗走し、主を失つた平家の舟師（水軍又は海軍のこと）の残党の一部の者たちは、旧暦も二月のこと、シベリヤ直輸入の冷たい北風が吹きまくり、荒れ狂う北浦の波シブキをかぶり、やっとの思いで荒波を乗りきり、この椿の郷なる萩の附近の入江、つまり「にい」（二位）の浜」（今の飯井の浜）、「さんみ」（三位）ヶ里」（今の三見の浦）、それに阿武川の川口の「玉江ヶ浦」に、それぞれにたどりつき、それらの三つのコースより、おのおの舟を乗り捨て、源氏の比較的追討の手うすと思われる中国山脈の尾根すじへと向つて、三三五五と移動をした模様である。従つてこの

萩周辺の山奥深き谷間の各所には、平家由緒の地名が数多く点在していると言うことだ。それらの地域を探ってみるのも面白く、平家滅亡の哀歌が今だに聞かれるような所ばかりである。即ち峻しい山を背負い、深い谷をひかえ、平家にとっては外敵を防ぐのには絶好な所ばかりではあつたと思われるが、考えてみるとこれらの場所は交通不便な点はあるが、然し景色がよい所ばかりであつて、町中で生活している者にとっては、大きな魅力だし、その上それにまつわる平家一門の「オンナ」の物語を聞かされるに至っては到底忘れることの出来ない所ばかりであるようだ。恐らく彼等平家一門の者たちは、兎に角これらの土地を第二の故郷として住みついたものであるらしい。そして遙か遠くに離れ、すぎし「京」や「福原」での都の栄華のあとを偲びながら、むなしくこれらの山合いに棲む里をもとめたことであろうことは、想像に難くはない。即ちその証拠でもあるかのように、これらの地域は「川上村」を中心としたそれぞれの山合いの部落ばかりで、平家にまつわる伝説がことのほかに多く、その上数百にもおよぶ「五輪塔」が各所に存在し、しかも今に至るも「五輪塔さま」とよんで、古人つまり平家の残党の霊のたたりを恐れ、なるがままに放置されている「サマ」は、平家一門の最後の模様を物語っているようであつて、その哀歌がヒシヒシと身体の中にまでしみこんでくるように思われる程だ。それらの地名をザット挙げてみると、萩市内では、さきにも述べた玉江、三位（三見）、二位（飯井）、野戸呂、女屋

敷（お姫様の住居）、雑座（雑兵の屯所）、殿河内、鳥越（鴨越）など、川上村に入ると、京床（西の京都を模した名）、小郷（小督とも書く）、夕櫃（平ノ夕櫃姫の住居した所）、平家山（沢山の洞窟が残っており、平家の残党たちが住んでいた所）、一ノ谷、矢櫃（平家の残党が追われて逃げる途中箭箱を落した所）、弓矢形（館）、江舟など、また福川村では仮館、御館、佐々連（平家一門の漣姫が潜んでいたと言う鐘乳洞）、清宗（平ノ清宗の死没の地）、鶴ヶ谷（平ノ鶴富姫が住居した所）、御幸原、大宮ヶ原、生野（ウブノと読む）、柴館、四条ヶ嶽、などその地名を挙げれば枚挙にいとまもない程である。これらは一様に平家に因んだものばかりで、いずれも長門峡にその源を発した阿武川の本流並に各支流にそつた地域であり、人里離れた深山幽谷の場所で、遠く京の都を偲び、ひたすらにすぎし昔のプライドを忘れかね籠の俗人どもとは交流なく、猫のヒタイの如きササヤカな斜面を耕し、生活の「カテ」を得て、ホソボソと暮しをたて、その生活が身につつき、その後、星が移り、日がかわり、怨敵源氏も亡んで天下が泰平となり、平家の残党探索の手が



長門峡風景

弛んで来ても、ひねもす警戒に余念のなかつた彼等一族の者にとっては、社会より隔絶した深山幽谷を友として、限られた生活の中から、平家一門の者たちの内面的生活のみが楽しみとなり、彼等の血統をほこり、山奥での生活になれ、荷物を担っての山での生活で腰にスジガネを入れ、いざと言う時にそなえて「シマリ」をつけさせるようにしぜんとなり、次第に「日陰者」としての素質をも身につけ、その上にこれらの山奥深くに、気位の高き「京オンナ」としての面影をただよわすような結果ともあいなったものではないかと推測される。

長門峡と言う谷間よりホトバシリ出る水の流れも、ようやくにゆるやかとなりし、その川面にそそぎこむ、<sup>ソマキタニ</sup> 杣木谷、<sup>トオタニ</sup> 遠谷川の畔には殊の外に美人が多く、日の当る時間も少ない谷合いの部落だけで、「京オンナ」にも似て顔立ちがよく、色白の御婦人方が多く、何れも能面を想わせる鼻すじで、その内面的情の激しさは、その顔立ちとは別に、日陰者としての素質をも身につけ、平家の残党としての血すじをも引き、表情は哀愁をおびてはいるが、時にのぞんでは「仕舞」の演ずるが如き内面的激しさにも似た情を持ち、乙女心のものあわれをも連想出来るものであると言われている。

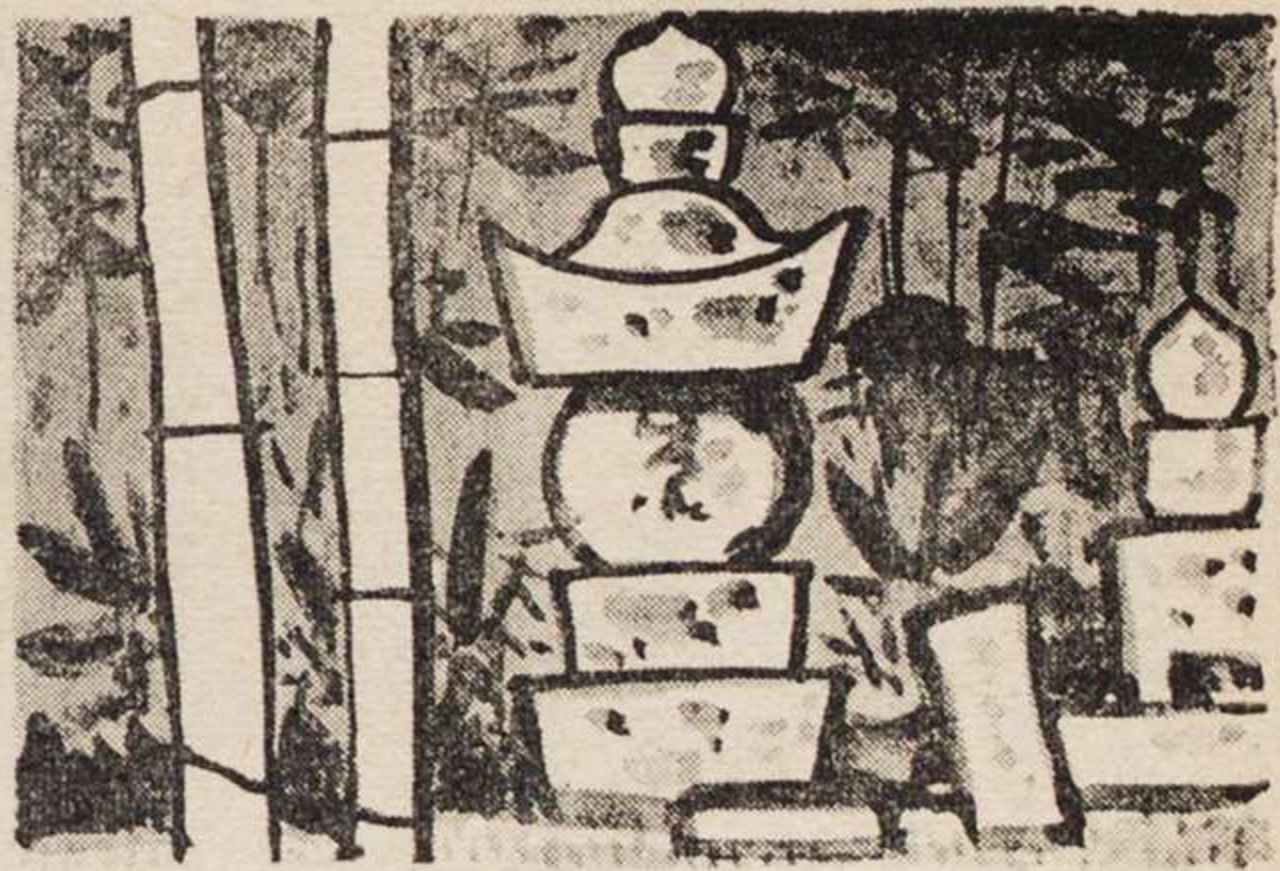
即ち平家一門を代表するかのようになり、昔から「川上美人」または「<sup>トオタニ</sup>遠谷美人」の名があり、「遠谷オンナは幸福をもたらす」とさえ言われているようだ。然し「遠谷オンナ」をものにした御

仁は「黙して語らず」、その「アジ」の真意の程を確かめるすべはないようだが、その御仁方のお顔をみてみると、マンザラでもなさそうだ。

春は若葉、秋は紅葉の長門峡を探索するのも結構だが、それだけではなく足をのびし、宿をもとめて江舟ケ里、遠谷川の畔、筏場のセセラギを聞き、引いては旅の仮寝ならぬ<sup>カリヤカタ</sup>仮館などにソレゾレ足？をフミイレルことも歴史をサグリ、美を求め、いや美を楽しむための「足？がかり」と言うことにもなりそうだ。

このように考えてみると川上村の「遠谷美人」を知らずしては恐らく「萩オンナ」を語る資格がないとさえ言えそうである。さきの項でも述べた、日本海の荒磯とともにハゲクマレ、環境から自然にメバエた、かの激情型の越ヶ浜、玉江浦の御婦人方とは異なった面で、この川上村の「遠谷美人」には、哀愁的でウレエ多く、桜の花の散らんばかりの風情にも似た情熱のアジは、殿方にとつては、エモイエヌ女のアジとも言えそうである、と言うことだ。

その昔、美人かき集めのおすきな毛利のお殿様方にしてみれば、これらの平家一門の後裔は、かっこうの美人供給源でもあったと言えそうである。毛利のお殿様にアヤカロウなんて、シタゴコロのある御仁は、この川上村その他の「五輪塔さま」には、足？は向けては寝られないと言うことにもなりそうだ。



川上村の五輪塔婆

の五輪塔さまのように疣がとれ、裾の病が治ると言われて、お詣りのあるものもある。

烏丸様と姥神、横坂に烏丸様の祠という石室がある。平家滅亡の後、この地に落ちのびて一生をここで終えた烏丸朝臣を祠るといい、ほど近い丘の上には朝臣の乳母または朝臣に仕えた姥を祠った姥神社がある。ともに烏田一族が総本家を中心として祭りをともにしている。

追記——五輪塔婆、川上村を中心とした、どの溪谷も平家

の残党が籠居して拓かれたと言うに相応しい土地柄であることは、既に述べたとおりである。それはただ一ノ谷、平家山、矢櫃などの地名が残るだけでなく、中世の遺物と考えられる数々の五輪石塔婆が散在しており、当時の貴人や武士の墓石であることを想わせる。五輪塔婆は崩れおちたものを入れると可成りの数となるが、わかったものだけでも一〇〇基以上に達するであろう。殊に字中ノ原の八道家の裏山に面した畠には、あたかも崖のように崩れ重なっている。村の人達は「五輪塔さま」とよび、さわると祟りがあるとして、崩れてもこれに触れようとしない。だが字、野戸呂の吉富家裏

## 穴 観 音 の 巻

万葉の古歌に「はかなしや 心つくしの年を経て いつとも知らぬ阿武の松原」という歌があるが、この歌は当時栄えた頃の大井の松原を歌ったものではないかと思われる。

この大井なる里は、今でこそ萩市に合併されてはいるが、古くより開けた里で、沖には六島村の大島をひかえ、北浦の荒波もこの大井の湊<sup>ミナト</sup>だけは波静かであったと言うことだ、そのため朝鮮との貿易が始まり、大井の里が開け、北浦唯一の政治の中心地がこの大井の里であった由、このことは、蒙古軍舟のいかり石や、奈良時代の古寺の遺趾、それに多くの古墳があることなどをもも明らかだ。

## 穴 観 音

ところで古記によると「大井」ではなく、阿武君（あむのみきみ）の居たと言う意味らしく「阿牟居（あむい）」と記録されており、さきにもふれたようにかつては、この北浦での文化の中心をなしていたと言うことだ。昔から「庄屋のおる部落には美人が集まる」と言う諺があるように

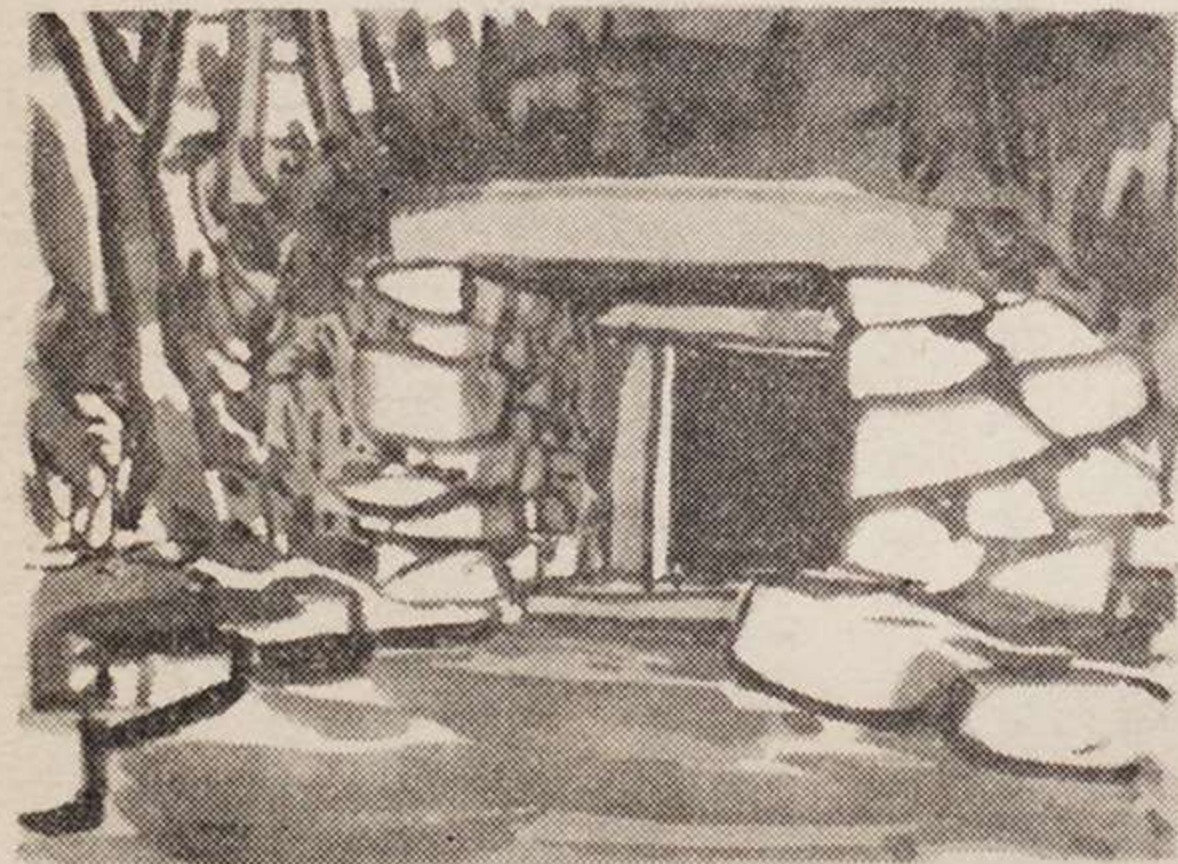
この庄屋ならぬ文化の中心地「大井の里」にも、美人に集まる鼻下長族のように、美人方があ  
い集まってきたものか、それとも集められたものかは知る由もないが、兎にも角にも多くの美人  
どもがいたことだけは確かなようだ。従ってこの大井ケ里の坂本なる所には、昔より大井美人を  
代するかのよう「坂本美人」の名があり、これらの「オンナ」にまつわる物語が今でも多く民  
話としても残っている。その一つを挙げてみるとナカナカに面白く、さきにもふれた多くの古墳  
の一つにまつわる物語となり、今に至るも大井の「穴観音」として、広く庶民の信仰のまとな  
いながら残っていると云うことだ。

大体昔から観音様なるものは女を意味し、然もその上に御丁寧にも「穴」までついているの  
から愉快である。そして男も女も、老いも若きも、その穴観音にお参りになると云うのだから、  
考えてみると尚更面白い。即ち「古塚、八百比丘尼」の物語りがそれである。

その話と言うのは昔々の大昔のこと、この大井の里、つまり「阿牟居ケ里」の中でも一番にお  
綺麗な娘さんが居られたと云うことだ。その娘さんがある日のこと、大井ケ里の佐々古の浜を  
一人で散歩をしておられると、浦島太郎さんのお話ではないが、海から大きな一匹の亀がはいあ  
り、その娘さんを背中にお乗せして、海中深く龍宮城へと消え去ったと云うことだ。ところがそ  
れから数えて丁度三年半、かの美人の娘さん？、浦島さんのように玉手箱一つのお手軽なお土産

ではなくて、沢山の宝物を龍宮城より頂戴して、この大井の里は佐々古の浜へと御帰還遊ばされ  
大井の里の者たちを驚かせたと言ふことだ。考えてみると昔から女と言ふものは慾が深かった  
ようです。兎に角その娘さん？はその後大変長生きをなされ、最後は尼さんとなり、死して「  
穴観音」と相なられたと言ふことで、この浦島女郎物語りは目出度し目出度しとなっている。

ところでこの話を現代流に考えてみると面白い。即ち大井の里には多くの美人が揃っていたも  
のだから、毛利のお殿様ではないが、大井近郷の鼻下長族に  
とっては「アコガレ」の的がこの大井の里であったろうと思  
われる。だからこれらの男族どもの、豪族か海賊どもの親方  
あたりが、手下どもに命じ「人買い舟」か「人さらい舟」か  
は知らないが、兎に角舟なるもので、娘さんを探していたと  
ころ、今でもそうだが女の一人歩きというものは昔から危い  
ものであったようで、一人歩きをしていた娘さんに目をつけ  
佐々古の浜で拾って、亀ならぬ舟に乗せ、恐らくは見島あた  
りの沖の島に連れ去ったのではないかと思われる。大体三年  
半と言ふ歳月は、昔からお互いに「アキ」のくる期間でもあ



円光寺の穴観音古墳

り、三年半もたてば「三下り半」が書きたくなくなるのは、今も昔も変わらない人情のようではなからうかと言うことだ。そこでその豪族か海賊かの親方は、ホトケゴコロでも出したものか、タダでは可愛そうだとのおボシメシの意味の「手切れ金」としての宝物であったものか、それともこの娘さん？ ジラをこねた上でのことであったのかは知る由もないが、兎に角「手切れ金」としての意味のものが「宝物」とあいなったものではないかとも考えられる。また別の考え方によれば、この宝物なるものの存在についてだが、当時としては宝物と言うからには珍らしいものであったと言うことであろうし、その頃の吾が国ではメツタに見られなかった、トツクニ（外国）つまり朝鮮あたりからのものであったのではないかとも推測される。そう考えてくると、距離的にみて、その龍宮なるところは、見島あたりであって、今のお若い御婦人方が外国人にアコガレて居られる心情にも似て、この比丘尼となられた娘さん？も、当時の外国人つまり朝鮮人（当時の朝鮮は文化が高かったのですよ）を相手にサービスをされ、その代償としての珍らしい宝物であったのではないかとも思われぬこともない。

兎に角とんだ龍宮城であったことだけは確かなようだ。そこで三下り半ではないが、三年半たち、異性を知りすぎた娘さん？は、大井の里に帰るや、龍宮ならぬ外国の味？が忘れられず、その娘さん？は地元の里の男族には目もくれず、最後は尼さんと、あいなられたのではないかと言

うようにも考えられる。この比丘尼となられた娘さん？が長生きをされたと言うことも、考えてみると、一人の味しか御存知ない一般の御婦人方に比べて、多くの味をガンミされたことを意味しているように受けとれないこともない。そしてその娘さん？死して「八百<sup>ヤ</sup>比丘尼<sup>ビクニ</sup>」と名づけられ、穴観音としてチン座ましまして居られるが、色々と考えてみるとオカシナ話である。アナカシコ、アナカシコ。

#### 追記

○円光寺古墳——円光寺古墳は大井駅付近にあって、昭和四年鉄道工事中に発見されたものである。竪穴式古墳で、大型の石棺が残っている。この円光寺古墳からは立派な刀剣の柄頭三個のほか、金銅製品、玉類などが出土して、かなりの貴人の居ったことを示したものであると考えられる。

また大井駅北東二〇〇メートルの丘陵に横穴式の円光寺穴観音古墳がある。すでに盗掘されておき、巨大な石造りの入口や室が残っている。この古墳にまつわる民話を紹介したものである。

#### 穴 観 音

○湊古墳——大井、湊の鶴山台、中腹にある横穴式古墳。

- 松崎石棺——大井松崎共同墓地のなかにある。
- 重地石棺群——重地山の麓に数個の石棺が発見されている。
- 塔の郷石棺群——大井塔の郷山中にある。四個の組合せ式石棺群。
- 宮の馬場遺跡——大井八幡神社馬場付近の丘陵台地一〇〇平方メートルの地域から、弥生式時代の石器、土器を多数出土している。

○蒙古軍艦のいかり石——大井字馬場道路傍に現在あり、長さ二・八メートルの柱状の石で、中央に一〇センチの横溝がある。文永・弘安の役に来襲した蒙古軍艦が使用したものといわれ、北九州にも同型のものがある。このいかり石は、大井付近の佐々古の浜から揚げられ、現在の場所に移されたといわれている。

○大井の民家——大井には古い民家がよく残っており、とくに坂本部落の二棟は、特色のある民家である。この二棟はともに庄屋をつとめた家といわれるが、この家は江戸時代後期の建築で、ワラブリ入母屋造りの平屋建で、間取りは田の字型であり、部屋は三列に並んでいる。客を泊めるためのオクザシキ、下男下女の寝間となった、ムコウザシキなどは、他地方ではあまり見られない建築物といわれている。

## イヤジャイヤジャの巻

「萩オンナ」の物語では是非とも忘れずに、つけ加えておかなければならないものに「長者、国守家の葵の姫」の話がある。

それは萩の沖原なる南明寺の麓近く、脈々として一千年の長きにわたって、その血縁を保ち、氏神と氏寺を持ち、今は農業を営んで居られる、珍らしい家が今も老樹の下にある。これこそ萩の伝説に名高い「長者、国守家」がそれである。

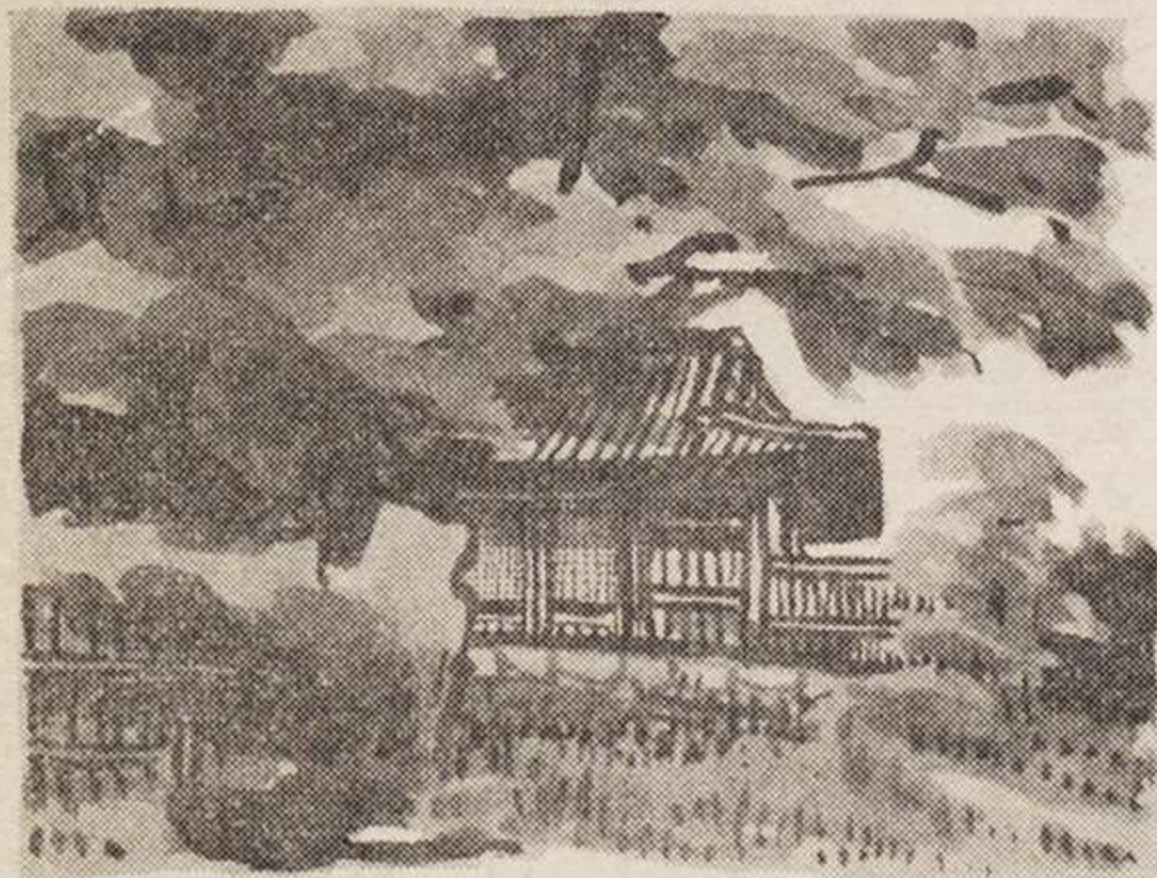
「伝へ云う、今より千三百年の昔、聖武帝の奈良の東大寺建立にあたり、長門国、阿武の郷、堀田之庄（後に椿の郷、川島の庄となり、又改めて牛牧<sup>ウシマキ</sup>の庄ともいわれ、現代の萩市大字川島あたりのことらしく、その当時阿武川の本流も色々と蛇行していたもようである）から一人の若者が白牛を索いて都に登り、他国の牛に優り、巨石巨木を選び、夕に至るも疲るることなく、その功優れ、帝叡感斜ならず、この牛飼に国守の姓を賜わり、且つ官女葵の前という美姫をも賜わる。



若者は美姫を擁して国へ帰った。しかし草深い田園の生活は美姫には適すべくもなく、都恋しさに遂に悲しくも此の世を去る。その骸を涙ながらに葬った所が、今葵の森と云い、之を祀ったのが「葵大明神社」として、国守家の敷地内にあり、白牛を葬ったのが菩提寺、白牛山、童蔵寺である。国守家はその後長者となり、何時の世にか農を営み、住み続け日本最古の千年百姓として世にも名高いもの」と、その伝説には綴られている。

恐らくその当時、この萩なる地域は、阿武川のデルタとしての生成途上にあり、中洲としての様相をなしていたことだろう。そんな時代に、ナント文化の中心、つまり奈良の都から、幾ら若者から見染められたとは言え、はるばると、沼田ならぬこの山陰の僻地、椿の郷なる萩の地に、タンチョウズルよろしく、葵の姫がお越しと相なられたのだから、今にしてみれば確かに、中共の原爆実験か、クレオパトラのオナラ以上のトビックニュースものである。即ちこの萩は、長者国守家の葵の姫から、中央文化の恩恵をうけ始めたものといっても言いすぎではないようだ。従って「萩オンナ」の話も、この国守家の葵の姫の物語りから始まり、その後朝鮮との交易の影響をうけ、下っては大内文化の波に乗り、毛利のお殿様による「美人かき集め策」でミガキをカケ最後には明治維新に当って、御亭主方の御留守ごととしての「女台場」を築き、「萩オンナ」の名声をあまねく天下に知らしめたものと言う外はないようだ。

ところでこの葵の姫、当時としては沖の六島村の島々を遙かに眺め、近くは今の指月山ならぬ指月島？を打ちみるだけで、そのほかは名もない中洲による一面の葦の原という殺風景な景色では、奈良の都で「蝶や花よ」と楽しく青春を過ぎた眺めとは、恐らくは比較にもならなかったことだろうし、その上いくら見染められたからとはいえ、同じ男性から可愛がられるにしても、田舎の牛飼いと宮人とは、どちらが月で、どちらがスッポンかは知らないが、兎に角「月とスッポン（スッポンは喰いついたならば、雷が鳴るまでは離さないといわれている）」程の開きがあったことであろうことは、下々の者乍ら想像に難くはないが、それにしても腑に落ちぬことが一つある。つまり葵の姫なる方は、それ程までに「都を恋され遂に悲しくもこの世を去られた云々」ということは、可成りの歳月をこの萩の地にて生き長らえたということだし、その上国守家も千年の長きにわたって続いているのだから、葵の姫もお子様を身ごもられたようであって「一すじに田舎ゆえに悲しむとは」チトおかしいなという疑問が湧いてこないこともない。



国守家葵神社

考えてみるとこの葵の姫なるお方は、都育ちの美人と言う気位いの程がワザワイして、つね日頃、人前では自らのプライドを保つ意味で物悲しき面持ちをされ、夜ともなれば、白牛の如き精力的な若者の味に酔い、その二つの面をも持たれ、内面的にはともにナヤミ続けておられたものではないかとも拝察されそうであるが、そのシングの程は分らない。兎に角お綺麗どころの御婦人方というものは、今も昔も取扱いが六ヶ敷しいものであるということだ。

かくしてこの長者国守家では葵の姫も泣くなく？身ごもられ 幾拾代もの長きにわたり、千年にナンナンとしてその血縁を保たれ、そして「萩オンナ」としてのイシズエとあいなられたものであるようだ。

考えてみると世の中は遷り変わるものではあるようだが、変らぬものは昔から「オンナ」の情であるらしく、日頃は何喰わぬお顔の御婦人方も「イッタンカンキュー」あるときは、日頃の思いとは別なお言葉をモテアソバサレ、イワク、イヤジャイヤジャと泣きあかされるものでもあるようだ。この「萩オンナ」の開祖「葵の姫」にあやかる意味のものでもあるまいが、今だに「萩オンナ」の方々はイヤジャイヤジャと夜が更けて行き、萩の歴史が続いているということだ。メデタシ、メデタシ。



## 「アナトの国」の巻

萩は昔、防長二州は毛利のお殿様の居城があり、その証拠でもあるかのように、人口三万ばかりの旧萩市内に、ナント六十にもおよぶ古寺が存在している程だ。

ところがこの防長二州とは、周防、長門の国を指し、この萩は長門の国の中心をなしていたと言ふことだ。

大体この長門（ナガト）の国という、この名称はどんな処から出たものであろうかと考えてみると、ナカナカオモシロイようだ。

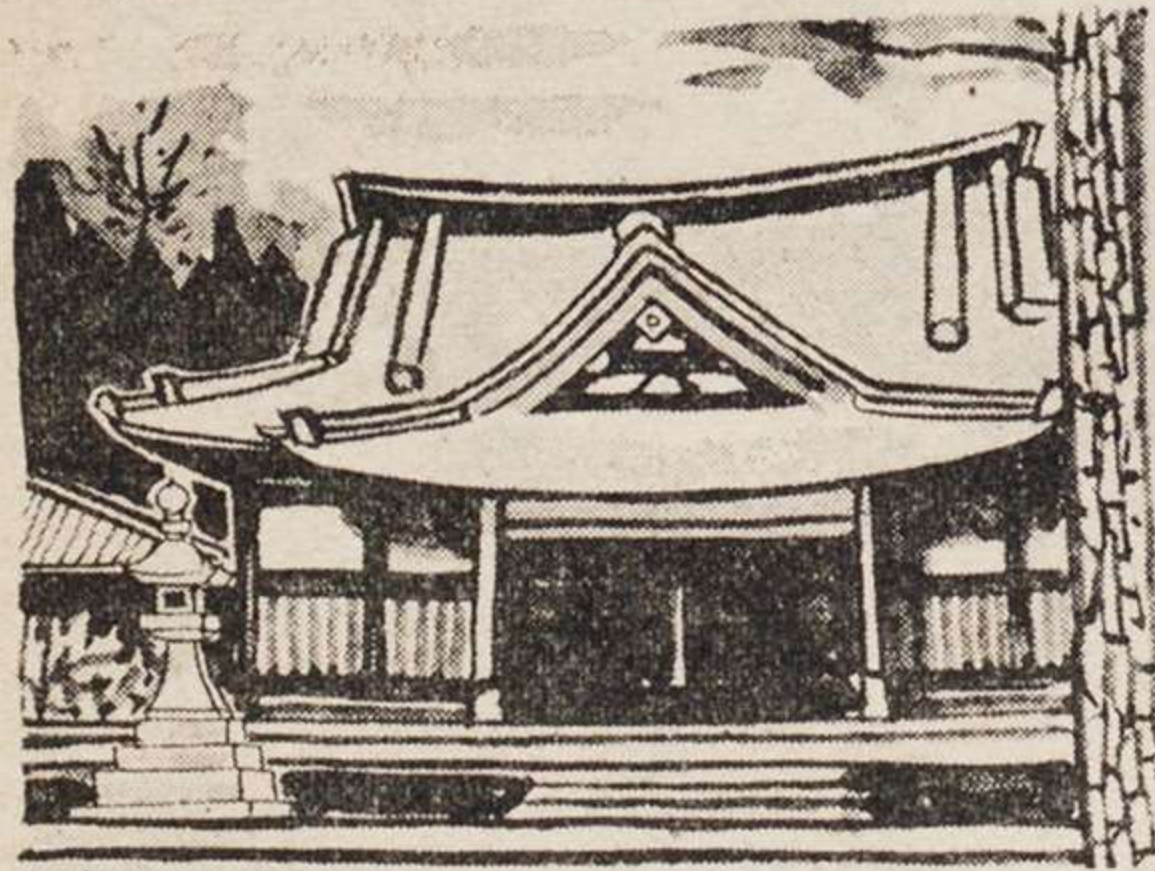
阿武川の上流に、長門峽なる「名勝」があるにはあるが、これはズット歴史も新しく、明治もアケてのちのこと、絵かきの高島北海先生のお筆によって広く天下にその名をPRされたのが始まりなのだから、これは長門の国の名にアヤカッタと言うことだけの話で、長門の国の名の出所とはオヨソ関係はなさそうだ。

そこで古い昔の万葉の頃、かの「恋歌」のお盛んだった時代の記録によると、この辺りは長門（ナガト）ではなくて「穴戸」（アナト）とか「阿古」（アコ）とかになっていているようだ。ではその「アナト」と呼ばれるようになった理由は、一体何であったろうかという疑問が湧いてくる。かつて戦国の世に、大内氏が大いに繁栄した理由の一つに、朝鮮との交易が挙げられていたように、この付近はモトモト出雲の国は大国主命の「国引き」の御神話のあった頃より、今の朝鮮つまり「高麗」あたりとのユキキが盛んであったようだ。してみると地理的に出雲よりも余程に近いこの山口県は北浦地方のこの萩が、特に地の利を得ていたということは、常識的にも確かなことだろう。

つまりその頃の「フネ」？というものは、今もそのカタチは大体同じようだが、イワバ丸木舟に毛のはえたような、シロクロならぬシロモノであって、現代のように羅針盤とでもなく、広いウナバラをツバをもむ思いで「フネ」をウゴカシ、ただ人間の「カンドコロ」と経験だけで、航海されていたものだろうと想像されて来る。その場合に考えられることは、何にかの「メジルシ」が必要になったことのように思われる。マア、ナンデモそうすな。即ちアチラさんから来られる場合に、その大きな目印となったのが、恐らくこの北浦海岸、特にあの青海島あたりのコウクツならぬ洞窟、つまり岩のホラアナが目標とされていたような気がしてならない。その目標

となったこの「アナ」が所謂、この地名ならぬ国の名の起源ではなかったかという疑問である。即ち「アナの戸」が「アナト」となり、ひいてはのちに「長門」（ナガト）になったというのもマンザラ、ウソではなさそうだ。それが証拠にこの前「国体」のために作詩された、かの山口県民歌の歌の文句に、寝た子を起してもするかのように、ワザワザ長門ではなく、周防「穴戸」（アナト）と唱わせて貰っているのも、アナがちそのためのものだろうが、ヨクヨク考えてみると、お偉いお役人様や歌人様という方々には「スイ」のキイタお方も居られるものだと感激したくさえなってくる。

つまりこの北浦の雄をなした、この萩はモトモト「アナ」にユカリがあったということになる。然もこの萩に「アナ」のユカリにズイキならぬ輪をかけたものが一つある。モトモト「アナ」にツバキはツキモノのようだが、この萩にはこれを証明でもするかのように、ツバケなら椿（ツバキ）の原産地でもあったようだ。即ち今でも残っているように、かの有名な毛利のお殿様の菩提寺、大照院の山号をなんと「霊椿（レイチン）山」といい、お殿様は御正妻のホカに多くの側室



弘法寺

さん方のお墓とナカヨク御一緒に「チン」座ましましておられる程だから、昔からお殿様を御筆頭にナカ？ナカ？お「アナ」がお好きなようであったと、モレウケ賜わっている次第である。その上この萩では御町寧にも、この椿（チン）を東西二つに分けて椿東（チントウ）椿西（チンゼイ）とし、阿武川のミズケをハサンで、椿（チン）を東西にアイ対している、アタリなど、チヨイと「イカス」トコロだし、「スイ」のキキドコロでもあるようだ。

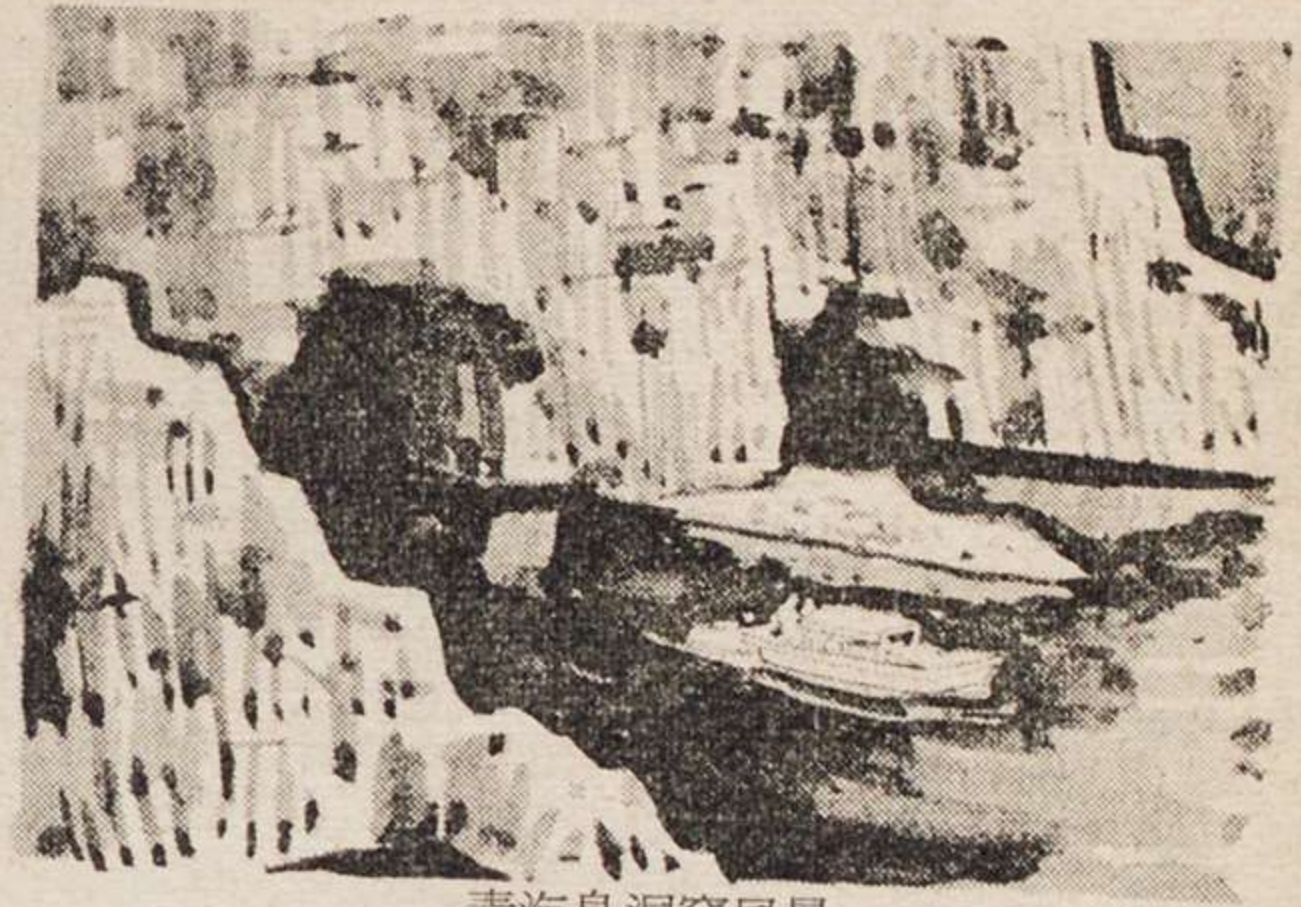
ところで萩のキノキイタところは最初にも、チヨイとフレておいたように、大体「観音様？」をふくむお寺という「モノ」のツクリからして、モトモト「ツヤ」ならぬ「エン」があるようであって「イロカ」とナカナカ御縁のフカイものでもあるようだ。即ち皆さん方も御承知のように、お寺の「モン」というものや、本堂の明り窓というものの「カタチ」？それに多宝塔？や「トウバ」の形式など、そのミチの通人の方々には大変によくツウズルものであるらしく、僧侶が木魚の割目で思い出すだけのものではなく、お寺の全てのモノがナニカに通ずるものだという話である。大体モトモトお寺と言うものは、原始宗教から発展したものだから、その形式の中に、その原形がトコロドコロに残っているということが、社会科学御専門の先生方の定説のようだ。そうですかね？。即ち人間誰しもスベテ、カンヌキならぬお寺の門を、お入りにならない限り「ホウエツ」の境地、つまり極楽往生のヨロコビは到底味あえませんぞヨ、と御存知の「親鸞上人」も

オツシャルほどだ。ナムアマミダブツ、ナムアマミダブツ。

そのお有難い？お寺さまなるものが、この旧萩市内には前述したように多くあるのだから御有難き次第である。ことにこの萩の有名なる、かの「弘法寺」？（もとユウカクのあった地名）なるお名前は、お古いお方には「灯ともし頃」ともなると、アマク、アタマ？の髄にまでもシミツイテいる言葉のようだ。

以上のような、詩情豊かな歴史を持つ、この萩の現状は一体どうかということになるが、これも考えてみると、またまたオモシロイ、モノばかりであるようだ。

即ち今のところ、風呂屋の煙突？以外には白い？煙の出る所は一ヵ所もない程の文化の僻地であるこの萩では、朝から吉田町あたりの、開店前の「パチンコ」屋さんのオミセサキで、ナント働く所のないお若い方々のお行列で一ぱいなだからオドロキだ。即ちパチンコをやるために、親ユビに、ツバまでツケて、朝からパチンコの「アナ」を、お若い方々に探させるといふのも、考えてみるといまどきの政治屋さんもツミナオカタと言いたくなってくる。パチンコよりほかに何にかよいアソビでもさせたいものと思われるのだが、ヨクヨク考えてみると、今から三百六十七年もの昔のこと、徳川康康ダンナから、チリ紙ならぬ折紙つきの僻地なのだから、仕方がないのかもしれないが、それにしても何んらかの指ならぬ「手」ぐらい打てないものかとさえ言



青海島洞窟風景

いたくなってくる。

一方お年寄りのお方ともなると、お若い方とは別に、ナカナカ高尚で、この萩では釣天狗のお方が多く、「フネ」を槽いで磯釣りとシャレコミ、何にをお釣りになるかといえ、  
「チン」（くわしくはチヌ）をお釣りになる。また夜ともなると、尻をマクリ、川に入り「カンテラ」をトモシ、これまた石垣の「アナ」をお探しになり、「サオ」？をシズカニ「ソウニユウ」して、寝ているウナギをツツキ起している仕末。またシャレタ大人ともなれると「クラブ」を振り廻し、ホール、イン、ワンとお穴をお探しになられるのだから、世の中と言うものは、余程楽しく出来ているようだ。

ところが戦後、この僻地萩にも御多聞にモレズ、時のナガレには勝てず、レジャーの波は容赦なく押し寄せ、アソビグセが付き、商店ならぬキグライのお高い田町筋あたりの株式会社さえも、労働基準監督署の御親切なる御指導により、月に二回は一斉休業、お店の方は締めて休んで御家族並に従業員の御一同、打揃ってバスを貸切り、青海島や秋芳洞などへとお出掛けになりこれま

た「アナ」が大きい、お深いのとオツシャルのだからオメデタイ話である。

またどこの世界でもそうだが、この萩でも兎に角「名」をなし「功」をとげ、人徳？をつみ、お金がたまってくると、ヒトシク世の常のように、毛利のお殿様にアヤカッてかどうかは知らないが、側室ならぬ「コユビ」をお探しになり、その上ガメツクお金を貯めようとなさるのかどうかは知る由もないが、これまた御同様に、「株」に足？ならぬ手を出して「アナ」をお探しにするという御念のいった御仁が多いようだから、本当に世の中というものはヨクヨク「アナ」には御縁があると言うものだ。

人みな、生れる時にもアナ、死する時にもアナという。アア親鸞上人の御文章ではないがアナカシコ、アナカシコと言うことになりそうだ。

考えてみると世の中と言うものはヨクヨクマカ不思議なものであるらしく、特にこの萩のモノはスベテよいクドクの星のもとに生まれあわせたものだ。有難や、有難やと言いたい。

### 追記

○大照院——青海というところにある。臨濟宗南禪寺派に属し、山号は靈椿山。萩藩初代藩主毛利秀就の菩提のため、二代毛利綱広が建立したもので、当寺には東光寺と交替に歴代藩主夫妻

の墓並に側室の墓を造った。大規模の伽藍と数多くの文化財があり、名刹の名に恥じない。  
○東光寺——椎原にあり、山号を護国山といい、三代藩主毛利吉就が、元禄四年（一六九一）に建てた黄壁宗の寺である。大照院と並んで、毛利氏の菩提寺で、当寺には吉就のほか五藩主および夫人並に側室の墓がある。江戸中期の最盛期には堂塔四〇棟、僧侶八〇人の大寺院であつたが、いまは総門、三門、大雄宝殿、大方丈、鐘楼などが残るのみである。藩主の墓地には大照院同様、約五〇〇墓の石燈籠があり壯観である。

○弘法寺——真言宗、山号を寄船山といい、弘法大師が唐より帰朝するとき、嵐にあい、船がこの地即ち浮島に漂着した縁故から寺を建てたと伝えられている。尚境内には「比翼塚」、句碑などがあり、松の大樹にかまれ川に映えて美しい。尚弘法寺はモトモト、松本川下流の湾入した湖の浮州に建てられた寺で、この浮州を浮島といい、その一部に、戦前まで遊廓街があり、この萩では、弘法寺参り、またはお寺参りと言えば、この遊廓通いをする意味であるときえ言われていた。

### 萩焼は小児マヒであるの巻

「一楽、二萩、三唐津」という諺が、お茶碗の通人方の間にある。しかし私はあえて「一萩、二楽、三唐津」といいたい。勿論私自身萩で生れ、萩で育つたためかも知れないが、しかしただそれだけの理由ではなくて、私は萩焼のお茶碗がなんとなく好きなのだから、あえてそう言いたいのかもしれない。兎に角私は萩焼のお茶碗をみると、それはなんとなく親しみを感じるからであつて、その理由は、と尋ねられても困るのだが、萩焼のお茶碗に言い知れぬ、恋愛にも似た感情が湧いて来るのだから仕方がない。即ち恋愛なるものには理由はないし、仮りに理屈をつけたからといっても、その理屈が他人に通用するものでは勿論ないのだから仕方があるまい。

ところで一体茶碗とはどんな条件が必要なのだろうかと言うことを考えてみた。すると第一に考えられることは、先ず人間がお茶をのむためのものだから、その茶碗にお茶を入れる訳だが、その場合、ザルのようにお茶が漏つてはいけないうことになるようだ。ところが漏らなけれ

ぼんちなものでもよいかと言うことになるが、どっこいそうはゆかない。大体茶碗というものは人間が手で持って、そしてお茶をのむためのものであるから、持つためには、持つのに手頃であると言う条件が次に出て来る。つまり茶碗の大きさと言う問題がくつついて来る。それから茶碗には一般に熱いお湯を入れるものであるから、その茶碗の質と言う問題が次に取上げられ、それに加えて、茶碗の重さと言う点も見逃がせないし、最後にはそのものの色彩や趣向というようなヤヤコシイ点をも加わって来るようだ。ではそれだけで全部の条件が揃ったのだから、その茶碗は全ての人に受け入れられるものかと言うと、そんなものでもないらしい。

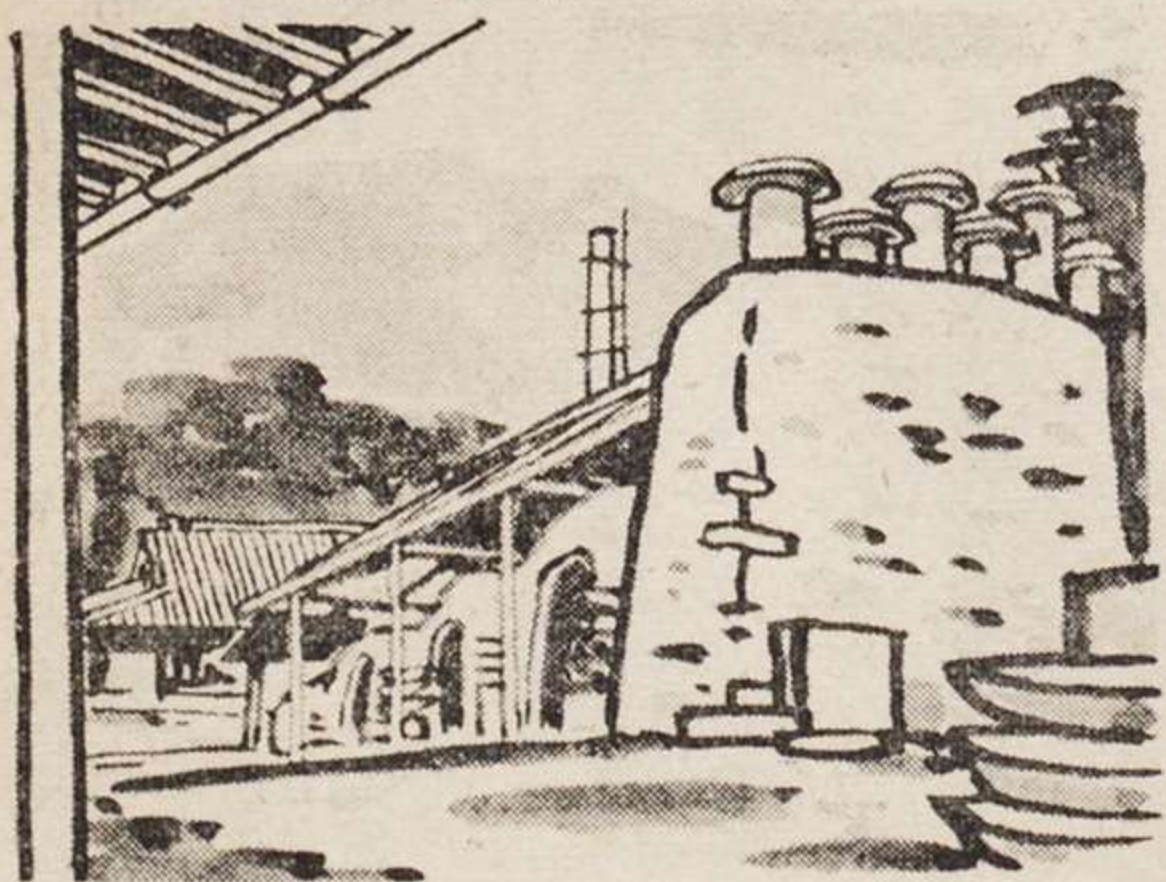
第一茶碗を扱う人の顔がソレゾレに異っているように、考え方や趣向はソレゾレに違っているし、その茶碗が多くの人々から愛用されるようなものともなると、そんな茶碗はなかなか少なくなってくるようだ。

大体人間の好みということになると、どこまでも主観的なものの考え方から出発したものであるだけに、はなはだ面倒になってきて、凡人である私如きものには到底説明のしようがないが、然しまア言うならば、茶碗の観方は美人の評価と同じような気がしないこともない。幾らその女の人が美人だからといっても、世の中の万人総ての者たちがその女の人に「ホレル」訳のものでもないし、勿論ホレられないこともないのだが、そこは社会秩序という問題があるので、そう簡

単には話が落着くものではないようだ。そこでその美人を奥様にでもするということにもなると、甚だコトはメンドウになってくる。即ち一人の男が、一人の女を独占することなのだから、もしもその美人が、その場合沢山な男の方々に愛されているとするならば、その時は九十九パーセントの人々は独占するということ諦めると言う結果が出ない限り、その話は成立しないことになる。そういうことにもなると、独占慾の強い者たちは、お互いにシノギをけずって、力や金に「モノ」をいわせて、意慾を燃やす結果が、そのモノの価値を産むものであるようだ。又世の中と言うものは実際にはそうあるべきものだと思われる。

ところが今の世の中と言うものは、はたしてそうなっているのかと言うと、そうでもないようだ。現実の場を見ると、中には逆の場合の方がはるかに多いような気がしてならないが、如何なものだろうか？萩焼の茶碗の場合だって、先ずは茶碗の値段をみて、サイフの中身を計算し、それからその茶碗の「ヨシアシ」のシナサダメをするのが、今の世の中のナラワシのようだから、考えてみると、まことに変なもので

萩焼窯風景



ある。

そこで先ず茶碗の値段についてであるが、この際、最低の基準となるものに、その茶碗の原価計算による価値と言う問題があるようだ。勿論芸術品には原価計算と言うことは、問題外となる訳だが、この萩焼の茶碗がみんな芸術品ばかりと言う訳のものでもないのだから、この場合茶碗についての原価と言う問題を考えてみて、さしつかえはなさそうだ。

ところで萩焼の場合、今のところ防府市三田尻近くの大道なる所からと、萩の唐人山の東側にあたる、福栄村大字福井の金峯（ミタケ）からとの両方から陶土を運んでいるのだから、その陶土の代金といつても、その殆んどは運搬賃のトラック代だけといった方がはるかに適切なような気がしてくる。最近トラックの運搬賃は高くはなっているが、それにしても茶碗の値段と比べてみれば問題にはならない額と言う外はないようだ。

それにこの萩焼の窯が甚だ原始的な「のぼり窯」だし、燃料は殆んど松の木のものであり、従つて、一束で幾らになるかと言うことだ。又窯のフクロにもよるが、一体幾らグライ積めるかと言うことだ、勿論その品物にもよるが、この場合茶碗を主体にしての考え方であつて、従つて出来上った製品の数で必要経費を割れば、簡単にその答は出る筈である。ところがこの萩焼と同じような方法で陶器を焼いている窯元は、京都を始め全国には沢山にあるのだから、他の窯のもの

も一応損益をみてからの値段だとは思われるのだが、どうしてこの萩焼の茶碗だけが、他の窯の茶碗よりも高価なのだろうかと言うことが、吾々「シロウト」にとつては大きな疑問である。

そこで吾々の日常生活について考えてみると、吾々の生活は次第に進歩し、生活内容も次から次へと、文化的で衛生的なものへと遷つていようであつて、日常使つてゐる食器のタグイにいたるまでのものは殆んど、科学的な大量生産方式による文化的生活を余儀なく味わされてはいるようではあるが、何にかそれだけでは満足しかねるような面がないでもない。前文にもふれたように、美しいものはどこまでも美しい筈のものではあるが、これを独占すると言う段階になると、他の何処にもあるようなものでは満足出来なくなるような不思議な心情が吾々人間にはあるのではなからうかという疑問が次に湧いてくる。又もし仮りにそんな物が手に入ったからとしても、それを毎日眺めて愛玩している内には、人間と言うものは妙なもので「アキ」が来るものであるらしい。美人の場合になると、茶碗のように、そう簡単には行かないが、そこは茶碗という品物ともなると、いとも簡単である。ただその場合、いろいろと理屈だけを後からつければ、それまでだ。第一茶碗の方は、美人の場合のように、文句は言わないし、それに家庭裁判所と言うような、公的な苦情処理機関もないのだから、至つてアッサリとケリがつく。ただその場合に、損をするだけのオチで済み、その上美人のようにヒステリーになられて、大事な顔に爪あとを残



れものでは、仮令呑んでみたところで、一向に気分が出るものではなさそうだからである。

ある時、或るお茶のお師匠さんの宅で、その家の一番良いお茶碗なるものを、みせられたことがある。その折、その家の御主人が、もつたいを付けて持ち出されたものは、二重の箱の中に納められたもので、しかもそのうえ金らんドンス緞子のきれに包まれていた。そこで定めし御立派なものが取り出される事だろうと思ひ、目を皿のように見張って待ち構えていると、何んと、見たとこ

してくる。言うなれば、道楽をしないような人は人間の仲間には入れられないと言うことだ。

又世の中というものは、なんだか変なもので、ある時は馬鹿に芝居気を出してみたり、そうかと言うと、馬鹿に勿体振ってみたり、とかく素直ではないのが世の中で通用するようだ。又素直に受取ろうともしないのが人間ではなかるうかとも言えそうである。即ち至って衛生的である筈のガラス器や、日本陶器の製品のような、近代的な陶器だけでは満足出来ないところに、世の中の「オモシロ味」があるのかもしれない。

大体人間というものは面白いもので、何事によらず、素人ばなれとなり、学問が進み、教養が積み、肝イモが出来てくると、素直な、真すぐなものよりも、曲つたものが好きになるようだ。

まずお茶のお稽古の時だつて、考えてみると、まことにこれ程変なものはない。本当に良い極く上等のお茶を呑むような場合には、よくすぎ透つたガラスのコップのような、そんな美しい容器



お道楽の場

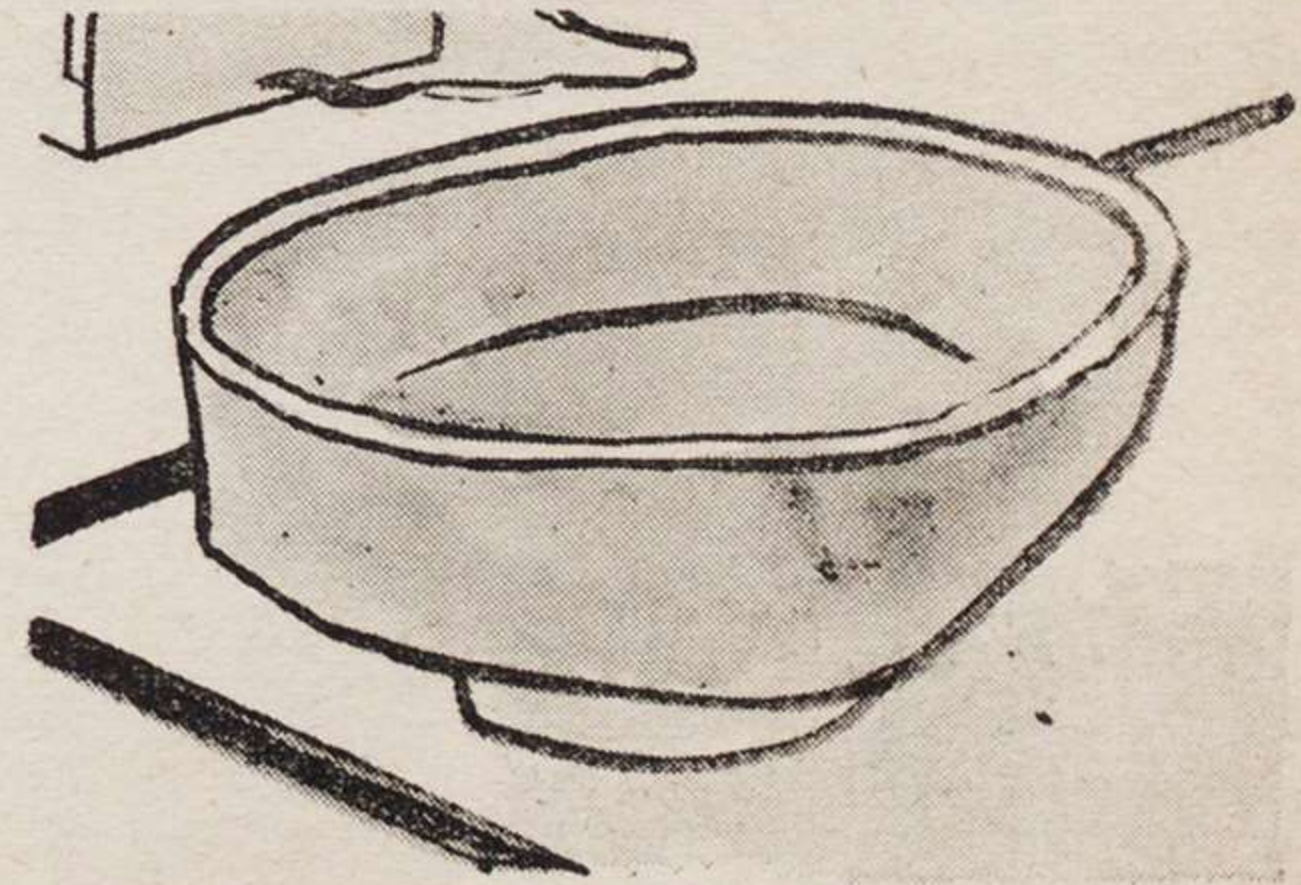
されるような心配も、サラにないのだから、先ずは安心と言うものだ。

ところで一般に、自分の生活を主体としたもの以外のこと  
に金を使うことを浪費と言ひ、世の中の多くの人々は道楽と  
称しており、道楽をすると、その人は世間から陰口をたたか  
れながら、笑われるようだ。ところが道楽の「道」という字  
の意味は、人が歩むべき道と言うことで、その生きる方法の  
一つとして、金と言う物指しがあり、その金がもしも余分に  
あれば、その道を楽しむことに金を使うことが、なんで道楽  
かと言うような気がしてならない。即ち道楽をすることを知  
っている人は幸せであつて、逆に道楽をしらないような人間

は不幸であり、その上そんな人は、人の風かみにもおけない筈なのに、とかく世の中の人々と言  
うものは、人が道楽をすると、よくは言われないようだ。勿論他人に迷惑をかけることは、社会と  
言う集団生活の中では「ゴハット」であり、他人様に御迷惑をかけない筈のものであれば、人間  
誰しも、大いに道楽をすべきであつて、他人から陰口を言われるような筋メジは毛頭ないような気が

る実に汚なくて、どす黒いイビツモノであり、しかもナント鶏のエサ鉢のようなシロモノである。そのウスギタナイお茶碗を、その家の奥様が白粉オシロイを付けて、御丁寧にも御自分の白魚のような御手々の上に乗せて、しかもその鶏のエサ鉢のようなお茶碗を三回ほどお廻しになり、馬鹿丁寧にお礼をなされるお行儀振りで、出されるのであるから、考えてみれば至って変な話である。次にその鶏のエサ鉢同様のお茶碗で、お茶をたてて出されたが、御同席のこれもまた実に御美しい着物のお化けのような御婦人が、その鶏のエサ鉢を可愛いお手々の上で二回半程もお廻しになり、しかも押し頂いて、相当大きなお口を三分の一位に御収縮遊ばされ、静かに二回半にお呑みになり、最後にはお茶を吸い込む音までもたてて、はい！御結構様で、とこれもまた馬鹿丁寧にお礼をなされる。一体何が御結構様だと言いたくなる。あんなウス汚い、しかも不衛生極まる鶏のエサ鉢同様なお茶碗からお茶を呑んで、と言うことなのだが、そのお茶の道が進めば進む程、ひねくれて来るものらしいのである。

お抹茶々碗（雞のエサ鉢）



そこで考えられることは、そんな鶏のエサ鉢同様な茶碗が何故に有難がられ、何故に大切になされるのかと言う疑問である。

即ちその鶏のエサ鉢のような茶碗の由来であり、その茶碗の制作された年代、つまり歴史であると思われる。人間と言うものは、とかく時代や歴史を身上のように有難がるような変な素質がモトモトあるようだ。従って骨董品ともなれば、古いものは一応歓迎されているようだが、それかといって古いものだけが決して良いものばかりとは言えないし、その中でも良いものだけが他のものよりも大切にされて、次第に後世に残されたというような可能性は多分にあつたように思えるのだが、然し要は、そのもの自体の良さが問題になるのではなからうかと言う気がしてくる。

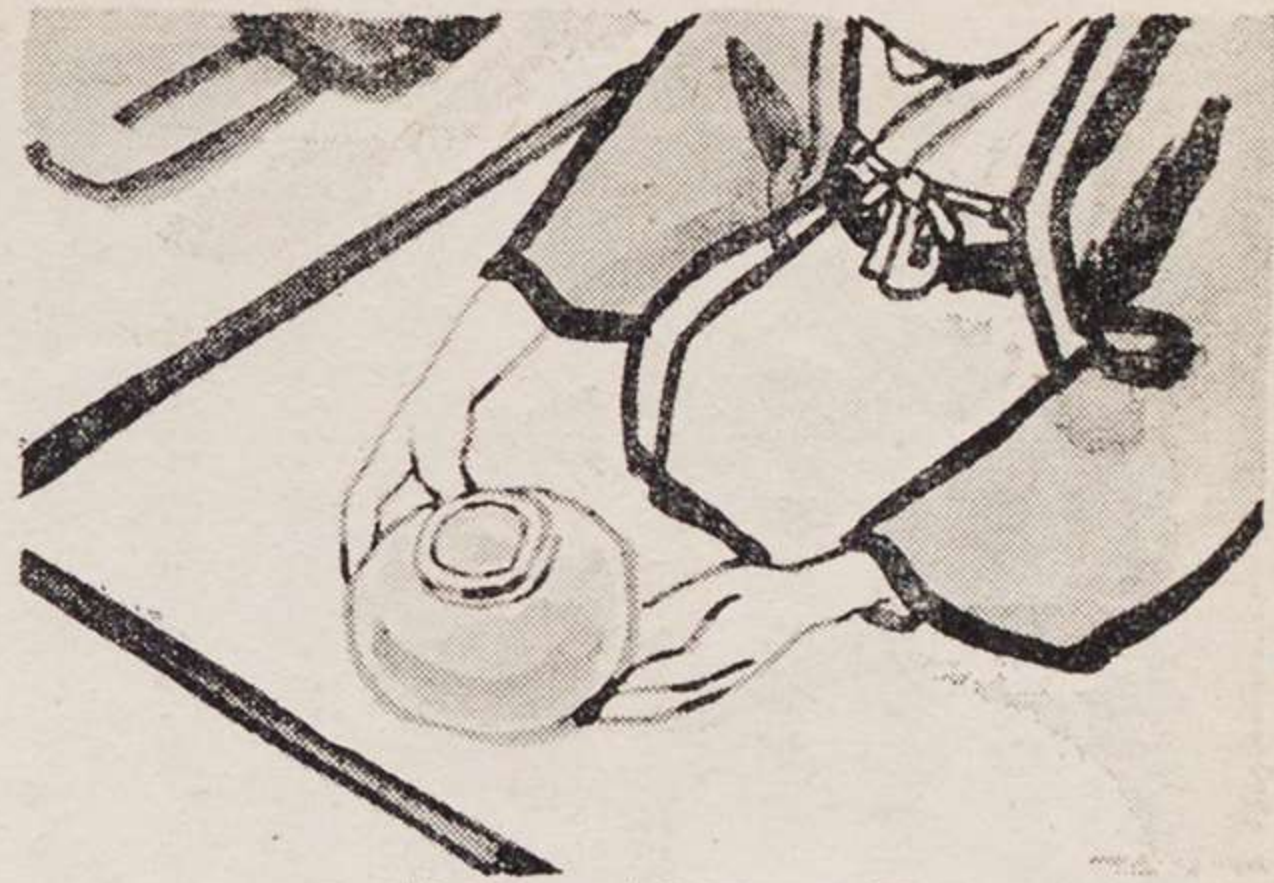
また茶碗の場合にはよく、お茶の宗匠さんなるお方の箱書きがついているが、その場合その茶碗が良いからついているのだらうとは思われるが、それが実際には箱書きのために、その品物が二、三千円も高く評価されているような感じをうけるような場合だつてあるような気がしてならないが、その点は如何なものですかな？

良い茶碗は何処までも良いものであり、それが他からの受売りであつたり、または宗匠さんによる箱書きであつたりしたのでは、外箱の中のお茶碗にしてみれば、はなはだ迷惑千万なこと

お尻をなぜ、その上で両手でもって「ツمام」ところなど、その道の通人でなければナカナカ分らない程の 心ニクイまでのやりくちのようだ。

考えてみると、お茶の宗匠さんなんてお方は、お茶の道に通ずる前に、女の「ツمامイグイ」にも通じて居られたのではないかな？と言うような気がして来てならない程だ。考えてみると案外道楽なんて言葉は、そんな処に語源があったのではないかと言うような気がして来る。

ところでこのお茶道の宗家を開かれたようなお方は別として、現代の宗匠さんと言うお方は代々お茶の先生を業とされているお家柄のお方であって、所謂オキレイドコロからチャホヤされておられる境遇のお方であり、人間的には案外、その生活的経験という点では、一般の平民どもの生活よりははるかに少ない筈のものであるようにも思われるが、その宗匠さんはお茶碗を拝見なさる回数だけは確かに多いかもしれない。また一般のお茶をやって楽しんでいる人よりははるかに高級な良い茶碗ばかりを見て居られることだろうと思われる。そこで考えてみると、かの御有名なアインシュタイン博士のオジサンのおツシヤルお話による、相対性原理のような観方からする、比較論によると、お茶の宗匠には、お茶碗の「ヨシアシ」を御認定なさる御眼識については、余り信頼度はあるものとは言えそうにないようにも思われてくる。従って「モノ」の善悪、良し悪しについては、既に今から三千年もの昔のこと、お釈迦さんもオツシヤッタように「モノ



あつて、その中身のお茶碗は、恐らく泣いたり、笑ったりしている筈だと思われる。

ところでこのことを美人の場合にあてはめて考えてみると面白い。幾ら宗匠さんがホレられた茶碗ならぬ女だからとて吾々はホレなければならぬこともないし、ホレなければならぬ義理だって尚更らない。そのうえ茶碗が実用品であるだけに、特にそうではないかと言うような気がしてくる。

茶碗の 拝見の 場  
そこでお茶のお作法の中で気になることの一つに、道具、特にお茶碗の拝見なる仕儀がある。

つまり出されたお茶碗を先ず受取り、自分のヒザの前におき、両手をついて、次にお茶碗の左、右を先ず眺め、それからお茶碗を手に取って、お茶碗の高台をなぜ、最後にそのお茶碗を両手で握って、そのお茶碗の感じを味わうというようになっていくようだ。ところがこのお茶碗拝見の儀も、よく考えてみると、これも美人を鑑定？する時の観方と一つも変ってはいないようだと言うことだ。つまり先ず両手こそつかないが、まずはその女の姿を上から下までよく眺め、次いでお茶碗の高台ならぬ、

の良し悪しと言うことは、イロイロ比べてみた上でなければ、分りませんぞよ」(なんでもそうですが、オワカリ!)と云うことになり、悪人の如き者にこそ善に対する認識という点については、善人よりははるかに、しっかりとしており、救われる率が多いのだと言う、お釈迦さんの御有難い「お言葉」をも思い出されてくる。ナムアミダブツ、ナムアミダブツ。そう言うお言葉からすると、雑な悪い茶碗を御覧になる御機会のないお茶の宗匠さんなるお方は、お気毒だけれども、お茶碗を見分けられるだけの御眼識の程があるかどうかと言うことは疑わしくなつて来そうである。

処が現実には、そのものの茶碗よりも、さきに宗匠さんの箱書きなるものの方が「モノ」を言い、然もそれだけで、二、三千円程度もお値段がはねあがると言う話だから、世の中と言うものは面白く出来ているものだ、と言う外はないようだ。

案外世の中の通人顔をして居られるお方の中には「メクラ」にも等しい者が多いのではないかと云うような気がして来てならない。然しそんなお方のほうが遙かに多いのだからこそ、宗

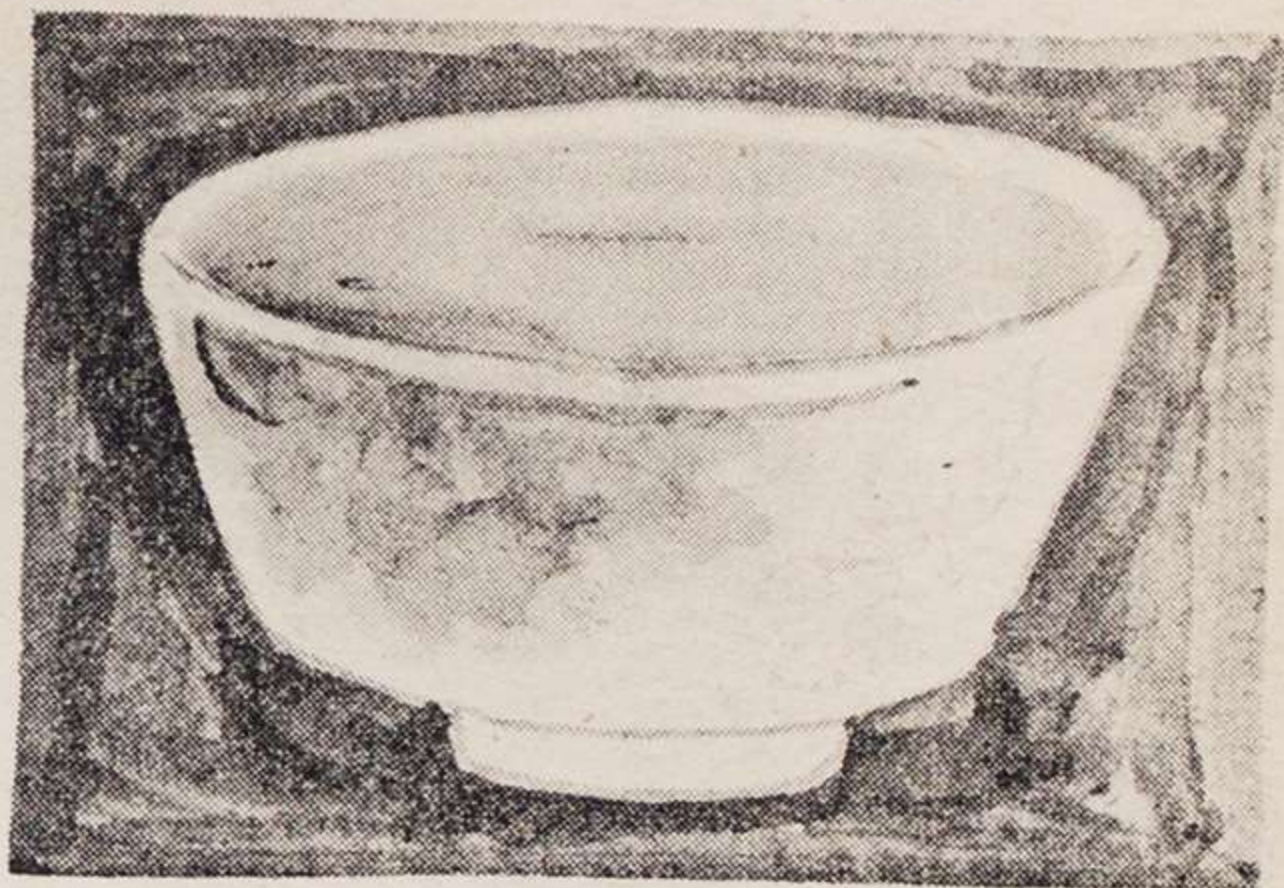


匠さんの箱書きだけで、羽根がはえたように高く売れたり、または町の骨董屋さんの御商売も御繁昌するというものだろうし、世の中は目出度し、目出度しと言うことにもなりそうだ。

そこで話を萩焼にもどすと、萩焼には「七化け」(ナナバケ)という言葉がある。即ちその一つは萩焼の窯変(ヨウヘン)といい窯の中の火の温度や加熱時間それに湿度などの関係で色々と変った色に仕上る、つまり焼き上ることを言うものらしい)をさし、今一つはその茶碗を實際に使つてからの変化の様子を意味するものであるらしいが、考えてみると、窯変と言う言葉が世間で通用していると言うことは、作者の意志通りのものが出来かねると言うことのようにも受けとれないこともない。

即ち若し窯変なるものが、仮りにあつたとしても、それが作者の計算に入れられ、はっきりと意識的に作品が作られているものであれば、窯変なんて言葉はこの世上では通用しては居らない筈のものと思われぬ。言いかえれば、この萩焼なるものは「窯まかせ」的であり、然もその窯変の偶然をねらつたようなものが、案外に多いのではないかと言う疑問である。然も更らにオカシナことは、その偶然の産物の方が遙かに他の茶碗よりも、高価となるようだから益々変である。

即ちその中で特に偶然の産物であると思われるもので、萩焼の中でハバをきかせている「灰カブ



茶碗の窯変（灰カブリ）

リ」と称せられるものがあり、通人顔をされている「ヒネク  
レ者」方からは、ナカナカに賞美されているものが多いよ  
うだが、考えてみると、この「灰カブリ」なるものは、モト  
モト灰をつけようとしたところで、ナカナカ人工的には出来  
るものではないらしく、窯を焚いている折、タマタマ何かの  
原因でその焼物が灰の中に落ち込み、見苦しくない程度に適  
当な変形をし、しかも灰がその焼物のユウ薬、つまりウワグ  
スリに溶け込んだものらしく、普通の人間ワザでは出来る「  
シロモノ」ではなさそうである。

たるものの筈なのに、この萩焼だけは特に、この頃の政治の合言葉のように普通のものよりは「  
倍増」と言うお値段となるのだから、買う方の立場になってみれば、タマツタものではない。作  
者の言葉によると、この「灰カブリ」なる作品について「こんなものはメツタに出来るものでは  
ないから云々」とオツシヤル。とんだ神様のシワザによって、平民どもは買いたくても買えない

仕儀とあいなるのだから、世の中と言うものは不可思議なものだと言う気がしてくる。

そう言えば思いあたることだが、萩焼の窯元では、何処でもそうだと思われるが、とにかく窯  
に火を入れる折、恐らくは窯を清めるための意味のものだろうとは思われるが、窯の前に「塩」  
がおかれ、一本の「オミキ」がそなえられているようだが、考えてみると、作者によって神様に  
偶然が祈られ、購入者イジメのための御祈禱がなされ、そのための「シルシ」がおかれているよ  
うに思われ、貧乏人は「ヒガマ」ざるを得なくなつて来る。

次に萩焼を使ってからの変化についての件だが、これは最初にもふれたように、茶碗の条件の  
一つに漏ってはいけないと言うことになってはいたが、この萩焼の茶碗は多少、水が漏ると言う  
ことだ。この萩焼では漏ると言うことと叱られるが、水が「スク」と言えば通人顔が出来るようだ  
ら、オカシナ話である。従って茶碗がお茶を通して吸込むのだから、使っているうちに段々とお  
茶の色が付いて変化して行く次第のようだ。

大体萩焼の焼きあがる、焼成温度はゼーゲル錐（窯の中の温度を測るための試験片）で計って  
セイゼイ約千四百度どまりの温度であるようで、それ以上の温度にあげると焼締って、萩焼らし  
くなくなり、その上お茶も漏らなくなる模様である。してみるとこの萩焼なる茶碗は最初から、  
漏ることが特徴と言うことになりそうだ。案外作者の方々は、萩焼の茶碗を如何に漏るように焼

大体小児マヒの子供ともなると、親子の情と言うものは、普通の健康な子供たちよりも遙かに、情コマヤカとなる模様であるが、萩焼の茶碗が高価であると言う原因は案外、それにも似た「情」の盲点をウマクつかんで利用されているような気持ちが出てくるのである。

考えてみると、小児マヒの子供の場合は、親はその子供が、普通の他の子供よりは可愛いそうだとする気持ちから、なんとかして元気に、しかも「ヒガム」ことのないように育ててやりたいとの愛情の発露から、金にイトメをつけずに「ハグクミ」育てようとするのだから、自然と他の健康な子供たちよりは、金がかかり高くはつくが、茶碗の場合は、小児マヒのそれとは立場こそは似ているとしても、悪く言えば、余裕の出来た大人の一種の浮気にも似たタグイだし、「ツマミグイ」にも似た気持ちをも手伝って、女に手を出す心情にも似ているようだが、それにしても、余りにも、その代償が高価すぎるのではないかと言うような気がして来てならない。

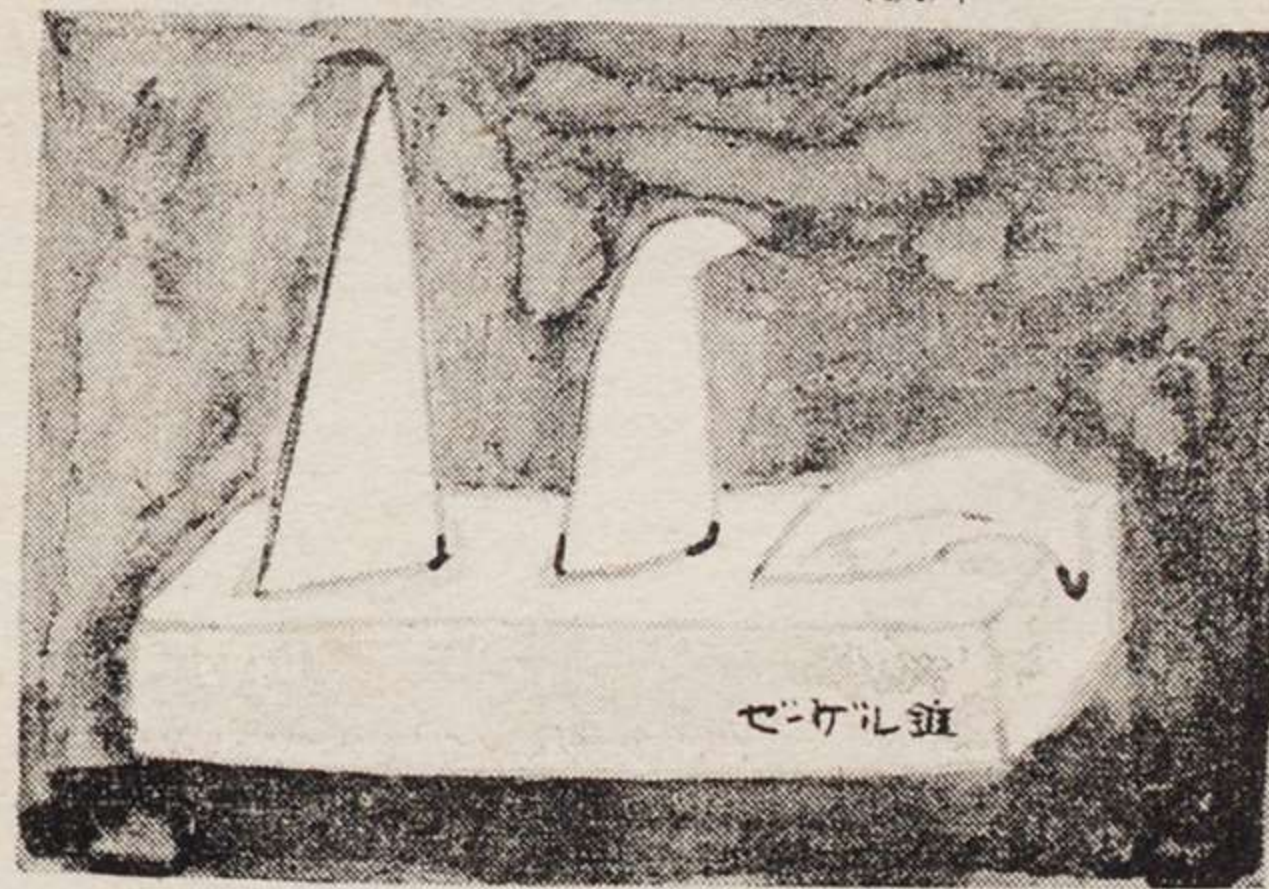
ところで薬でも高くなる程心理的に効果があるように、また戦後の新興宗教のオブラダって、高い程「レイケンアラタカ」でキキメがあるようだから、萩焼の茶碗も高価であることが、かえって人間の虚栄心を満足させて呉れる「効果」があるのかもしれないが、そう言うことであれば尚更らのこと、窯元はお寺のお坊さんではないが「マルモウケ」と言うことになり、余りにも世の中は片手落ちになりすぎるのではないかな？と言う気がしてくる。

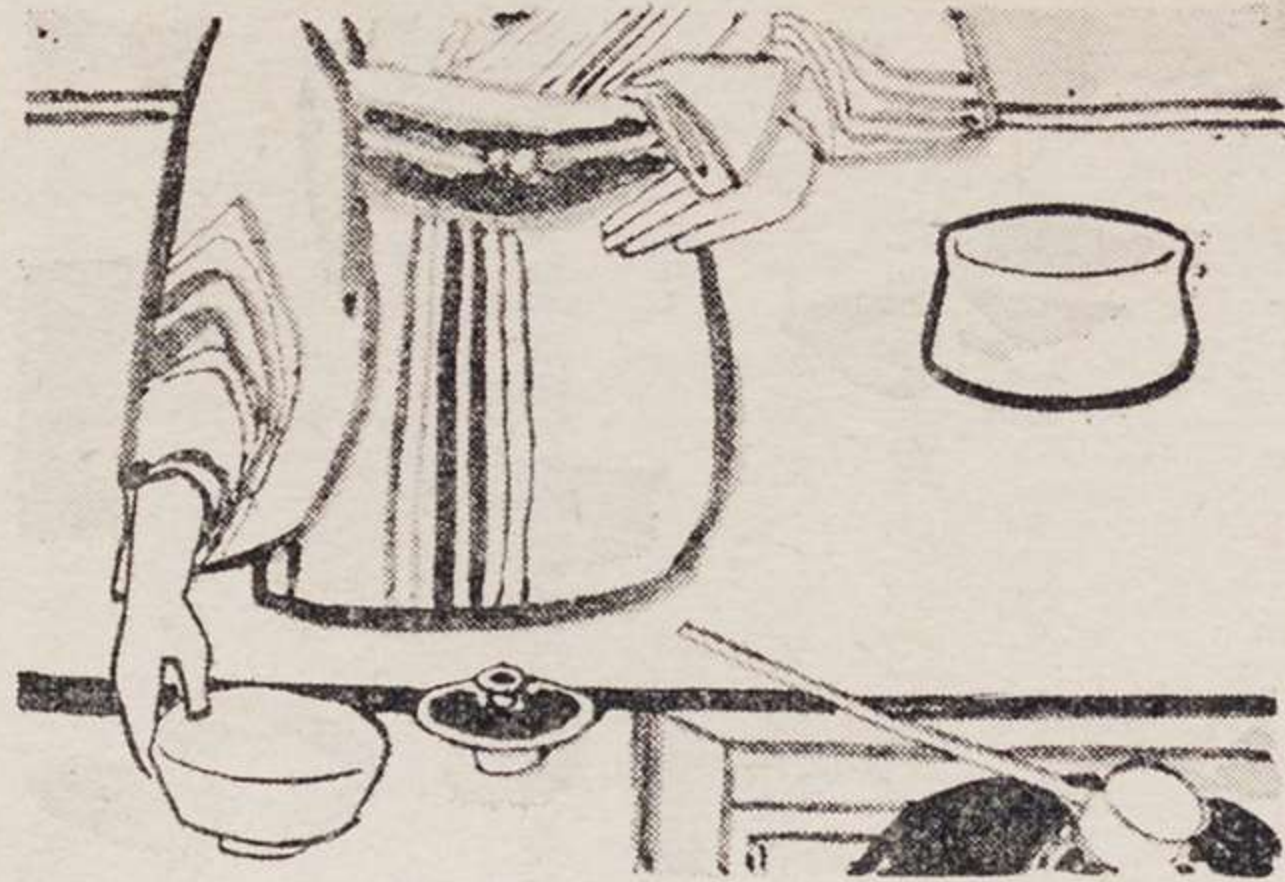
きあげればよいかと言うことを「ネラッテ」居られるのではないかと言うことで、これを逆に言えば燃料の松の木を如何に儉約をなされるかとも言えそうである。

そんな点では備前や唐津の「モノ」よりは、はるかに燃料代だけでも安くつくことになりそうだ。アア、ソレナノニ、ソレナノニ、何故にこの萩焼の茶碗は、他の窯のモノよりも高いのかと言いたくなってくる。

以上のような点を、色々と考えてみると、この萩焼の茶碗は、人間で言うならば、普通の状態ではなく、片輪の如き状態のモノと言うことになりそうだ。してみると萩焼の茶碗は言うならば、さしずめ小児マヒにも等しいような気さえて来て仕方がない。だからと言う訳でもあるまいが、萩焼の茶碗には「コワレモノ」にでも、さわるように、「オトナシク」しかも「ヤサシク」取扱かわないと、すぐに「コワレル」ものであるらしく、そのためには、お茶道と言う名のヤヤコシイお作法と言うものが、必要なかもしれないと言うような気がしないこともない。

ゼーゲル錐の温度試験片





お茶のお点前

ることの出来るお茶の暖かみ、それに「カロヤカ」な重みなど、萩焼ならではの感ずることの出来ない境地であると言うことであり、一生を「ツレソウ」最愛の女房の味にも似たところに「ヨサ」があり、あえて「一萩、二楽、三唐津」と言いたい程の魅力があるのではなからうか。本当ですかネ？「アーメン」。

また萩焼ではお茶が滲透するのだから、茶碗にお茶の色が付き、言うならば茶碗は不衛生なことながら汚れて色々と変化して行くことで、その「サマ」は、男が好きな女と共に暮して、次第に自分の「コノミ」に染って行く、女の心理にも似ているような点があるが、その道の通人方が萩焼を愛される心情なのかもしれない。なんですか？男が女に染るのだから？そんなことはないでしょう。

ところで俗語に「段々ヨクナル法華のタイコ」と言う言葉があるが、よく考えてみれば、この萩焼の茶碗と女のために作られた言葉のような気がしてきてならないが、如何なものですか。萩焼の焼成温度、茶碗における水の漏れ、それに萩焼の「七化け」の件など、色々と考え合せて言えることは、どの点を見ても、特にこの萩焼だけが他の焼物よりは高価となるような正当なる理由は更にならないようだ。アアそれなのに馬鹿に萩焼が高価なのは、どんな処に原因があるのだろうかという大きな疑問が湧いてくる。

考えてみると、人間と言うものは案外、下らない形式に流され、知らぬ間に化物のような権威にふし、心ならずも政治に動かされているのではないかということにもなりそうであって、茶碗の良さの分らない「メクラ」ばかりがこの世の中に、ヒシメキアツテ、金や権威のジャングルの中を追い廻されているような気がしないこともない。言うなれば、田布施の踊る神様ではないが、

「ウジムシ」の如き人間どもがこの世の中には案外に多いと言う証明にもなりそうだ。

とにかく、お茶の世界に生きていられると言われている「ワビ」とか「サビ」とか言う「アイマイ」な言葉に眩惑されることなく、もっと素直に茶碗を観、そして親しむべきものではないかと思われる。

余り思った通りを言うと、とかく叱られそうなので、最後に萩焼の茶碗の「ヨサ」について一こと、つけ加えたい。

即ち萩焼の茶碗は土器にも似た「粗野」な感じの、然も「イロ」に染った、なれた茶碗に、お茶をたて、つまり茶せんでもって、お茶をニゴシ、両手で握り、ホノカナ肌から感じ

最後にオワビ——世の中には何んでも「分らない」のに「分ったような顔をするお方が案外多いようで、然も「アイマイ」なままに「分った」ような顔付きをしないと、バスに乗りおくれでもするように思い、毎日をスマシテいるお方があるのではないかという気がしてくる。勿論その中の一人に私も入るのだが、この際お茶の道や、萩の焼物については至って、ズブのシロウトである私は、この萩では大変に有名で、しかも全国的にも大いに自慢出来る萩焼の茶碗について、自分ながらの狭い視野と、浅い生活経験とをもとに、自分なりに、そのことについて思ったままをのべたまでだ。私はシロウトであるだけに、メクラ、ヘビにオジズの感が大いにする訳だが、そこはその道には、コトノホカにお精わしい萩の諸先輩方は、こんな観方も出来るものかと、御一笑に附して頂ければ幸甚の至りです。

追記——萩焼についての由来その他製法、窯元などについては、あとの「カワラ」に毛の生えのた巻の末尾の余白に精しく説明を加えておいたので、それを参考にして貰うと幸せです。

## 人は「マスメ」で勝負するの巻

人は「マスメ」で勝負するの巻

萩は山陰僻地の田舎町なのに、都会ズレして居り、その一面でもあるように、なんと百二十七軒にも及ぶ「ノミ屋」が、この萩市内にあるようだ。その店の看板や経営主は変わっても、数の上では余り動きはないようだから、これも萩の「七不思議」の中の一つと言うことになりそうだ。ところであるとき四、五軒の「ノミ屋」なるものを「ハシゴ」で吞んで歩いたことがある。その折のこと、どこのお店でも申し合せでもしたかのように、出てくる「徳利」の形式は一樣に「タケ」が高く、底高でしかもスンナリとした、言わば美人タイプのスタイルであって、到底一合入りのものではないらしく、いいところ七シヤクどまりと言うところだが、考えてみるとこれは経営上の通念で、底高分だけは「サービスタ」と言うつもりなのかもしれないが、本当の酒呑みにしてみれば納得しかねる「シロモノ」である。しかもどこのお店でも申し合せたように、勘定書きには一本一合代の計算で中味は「七不思議ならぬ七シヤク」では「スジ」が通らない筈なのに、



これが「ノミ屋」の仲間では通用している常識のようだから、なんとかヒトコト言いたくなくなってくるのは「ノミスケ」だからと言うことでもあるまい。

大体「お酒」と言うものは、一つには酔うものであって「徳利」の中味の不足の「三ジャク」分だけは「フンイキ」代であり、これが「オミキ」に酔う「モトデ」となるのかもしれないがそれでは「徳利」ならぬ「不都合」と言うことにもなりそう。

ところで、それでは本当にノミたいのであれば、一升ビンでも据えて、馴れた「女房」を前にしてチビリチビリとヤレばよさそうにと思われるのだが、ドッコイそれでは気分ドコロが「酔い」も「サメ」ようとと言うものだから、世の中と言うものは「オカシナ」ものであるようだ。これが兎角世の中の「呑み助」のアワレナ心情と言うものかもしれない。

大体もともと「徳利」なるものは、酒を入れる容器であり、しかも入れるものの量が「メヤス」である筈なのに、その「徳利」に呑み屋の「フンイキ」料までも折り込まれた「スタイル」と言うのも、考えてみると余り「イタダケル」話でもなさそう。

ところがこれによく似た話が世の中には沢山あるようだ。即ちその一つが「人の評価」の場合だと思われる。一般に呑み屋のマダムや旅館の御主人方と言う方々は、兎角人の身なりで、その人の「品サダメ」をなされるようだが、世の中には「ありそうにみえてないのが何とやら」と言

う諺もあるように、余り「アテ」にならないのが世の中の常のようだ。

ところでその人間の評価の場合、よく世間でもあるように、その人の学歴と言うものによってのみ、その人の評価がなされるのが「常」のようだが、そのことを呑み屋の「徳利」に例えれば即ちその学歴なるものは、その「徳利」のスタイル、言うなればその「高さ」に等しいものであるとさえ言えそうである。

大体その人間の人格なるものは、その高さや容姿とは別物であって、その中に入れられる「オミキの量」ならぬ「人間味」そのもので決まるものではなからうかと言えそうである。即ちタケは低くとも胴のはった無格好な「徳利」には、スナナリとした「徳利」よりは遙かに「トク」であると言うことを、この際トクと考たいものだ。

世の中にはエテシテ、その人の学歴だけで評価をしようとしたり、又学歴だけを「カサ」にして世の中を渡ろうなんていうお心掛けの御仁がかなりにおられるようだが、世の中はそう言う人ばかりでもないようで、一方では「名を捨てて実をと



る」と言う諺もあるように、案外、世の中の人々の眼は「ツメタク」で、その量（マスメ）で勝負をさせられていることの方が遙かに多いのではなからうかと言う気がしてくる。

兎に角、世の中には「フンイキ」なんて「マカフシギ」な付録が付きすぎると、一時は人の客足はふえたとしても、その内「フンイキ」ならぬ「インチキ」にかけられたような錯覚をおこし、客足も次第に遠のくと言うことにもなりそうだし、引いては知らぬ間にその店の看板も本当の「カンバン」ともなりかねないのが、世の中の「ツネ」でもあるようだ。

大体酒呑みと言うものは、どうも「クドクテ」申し訳ないが、この「徳利」の件についてはよく考えたいものだ。

世の中の「オミキ」に御縁のある方々はどうか、お互いに心して「徳利」の姿を眺め、その姿や高さだけに、ゲンワクされることなく、その中に入れられる「マスメ」（量）で勝負をしたいものである。

兎角「ノンベイ」と言うものは、酔った振りをしている、トコロドコロ覚えているものでしてね。萩の呑み屋のマダムも、このことをお忘れのないように、と申し上げたい程だ。

### 「カワラ」に毛がハエたの巻

「カワラ」に毛がハエたの巻

山陰の僻地である この萩で、文化的な匂いのするものに、萩焼茶碗と萩美人の名が、今に至るも残っている。この二つの中で「萩美人」の話は前の項にふれたし 「茶碗」の件についても述べたのだが、「茶碗」の「オメキキ」と称せられる人々は、鼻の巢を大きくして、待ってましかたとばかりに、この萩焼の御自慢をなされるのが常のようだ。勿論萩の方にとっては、萩焼は郷土の特産品であるのだから当然のことなのだが、然しこの萩焼なるものは、モトモトその地肌「ヒビ」割れが入っているのが特徴であるから、アタカモ萩焼の名が天下にでも「ヒビ」いていかの如くにお考えのお方が多いようだ。ところが実際には、それほどのもでもなく、この萩焼なるものの名が、天下に知られるようになったのは、明治もズット後のことらしく、よく調べてみると、現在言われているように「一萩、二萩、三唐津」という言葉が、その道の間で通用するようになったのは、萩焼の流れを汲み、精しくは萩焼とはいわれてはいるが、正統ではな

いらしい、深川焼つまり長門市の三之瀬（ソウノセ）で 一名「ホウキ」との異名さえあった程の 今は亡き、人間文化財としての坂倉新兵衛居士の賜であったようだから、ツマリこの萩焼なるものの名は、本当に新しいものであると言うことは、萩でも余りにも知られてはいない事実のようだ。

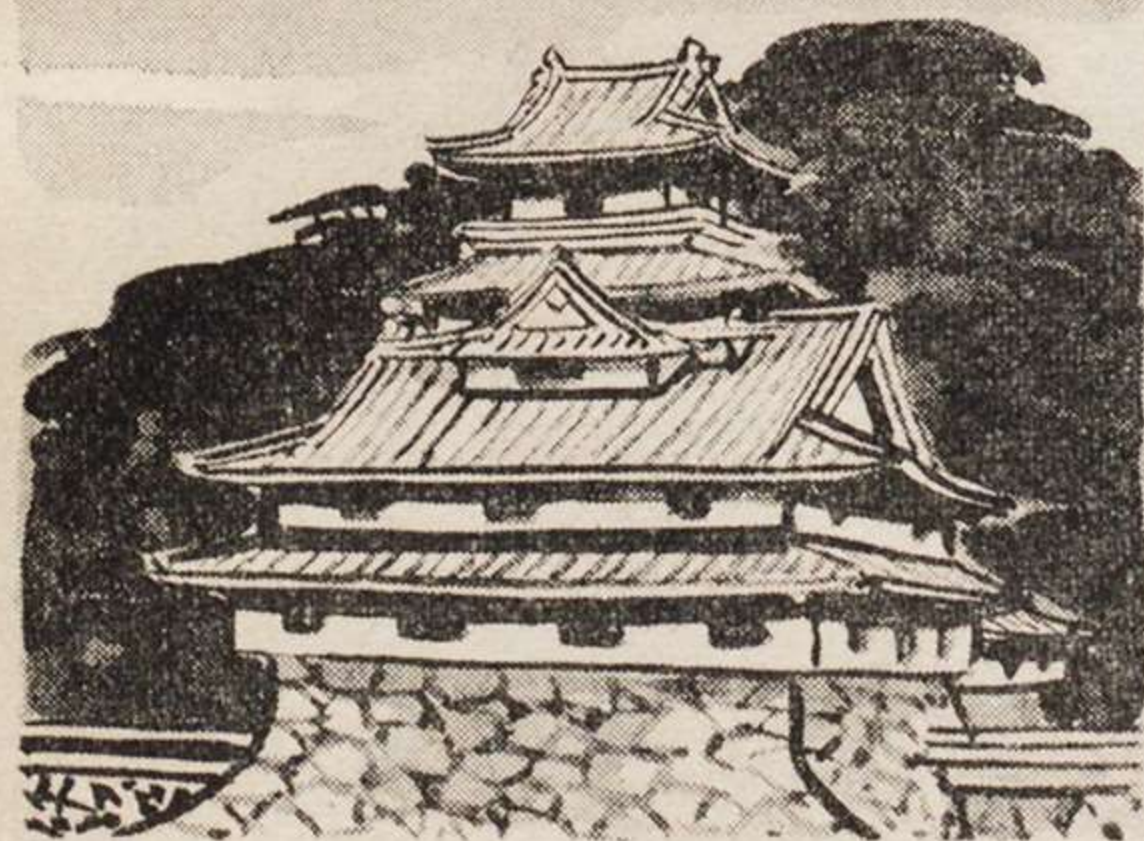
考えてみると、モトモトこの萩なる町が、その産声<sup>ウツゴエ</sup>をあげたのは、歴史の上では新しく、徳川も初期、つまり慶長年間の関ヶ原の戦で、毛利のお殿様は、ヒヨリミ的な配軍の功績？によって江戸表より「ニラマレ」広島は吉田の山奥から、山陰の僻地である この萩の地へ、仕方なしにお引越しになられたのが、今から三百六十年ばかりの前のことだから、歴史の中では ホンの馳け出し者といった年代である。その折のこと、毛利のお殿様は汽車もバスも御存知ないし、今のように舗装された道路もないものだから、側室さん方や御家来方のお供をしたがえて、四人掛りのカツギ屋による「オカゴ」で 田舎ミチをトボトボと、この萩までも お越しになられたのだから、道中サゾやお淋しいお気持ちで一杯だったことだろうと思われるし、その淋しさをマジラワスの中には、先ずは「カワラケ」？ならぬ側室さんが、その第一のものであっただろうということは、吾々シモシモの者乍ら想像出来るようである。

ところでそのお殿様は、椿之郷は今の大屋あたりに、お着きになり この「アワレ」な「葦」

ばかりからなる当時の萩の姿をみられ、お殿様は一体、何をお考えになられたことだろうかということだ。それから約三ヵ年半ばかりの間、つまり一千三百日ばかりの短期日に、お殿殿は指月の山の麓に五層の天守閣と、二十三にも及ぶ砦の数々、その上家来ども一同の住いに至るまでの武家々敷、商人町の区劃などのすべてを、堀内は三の丸、猫之丁の天樹院なるところに「居」を構えられての大奮闘であり「涙なくしては到底聞かれない」程の苦闘の物語りであったようだ。その上当時の状況から押して考えられることは、その工事の際に 一番必要だったものは「お城」であり、また「家」であったことは言うまでもないことで、そのための構築資材を如何に準備するかということが緊急を要する問題であったと思われる。そこで石材や、木材はこの付近の地域から集められたとしても、どうしても集められないものが、なんとと言っても「屋根瓦」であったらうと言うことは、馬鹿でなければ思い出せる筈である。

ところがその当時、この瓦なるものを作る職人の多く住んでいた所はと言えば、ナント先ず挙げなければならぬのが

ありし日の萩城天守閣





大和の国は奈良の都の程近く、ウネビの麓の「三輪の里」それに同じく近畿の泉州は堺湊で知られた「堺ノ里」もう一つは今も瓦で名のある石見（ユワミ）なる「津野津ケ里」であったようだ。そこで毛利のお殿様はこの三つの瓦の里から、瓦の職人をお集めになられることは相なるのだが、それも一人や二人の職人では間に合わないのだから大変である。勿論「ソロバン高い」毛利のお殿様のこと、かつて広島吉田の居城を明け渡し、この萩なる田舎へと新居御造営とは相なられるのだが、お引越しにあたっては、岡山は備前・備後、それに安芸の三ヶ国の旧領地より、前年度分の税金？までも、先きどりをしておられた程の「ゴキトク」なお方だけに「赴任旅費」の高くつく、大和の国は三輪の里や、泉州は堺あたりの職人方については恐らく御敬遠遊ばされたものであらうと思われる。但し特別な関係のあった者は別のことで、なかにはかつて豊臣方との交流のあった方々が、大阪冬夏両陣後、毛利様の居城築城と聞いて態々参上した瓦の職人のあったと思われるフシがないでもないが、それはホンの一部の方であったと思われる。兎に角、かつて毛利のお殿様の御領地であった石見の国から、大半の瓦職人をお呼びになつたとみるムキが、まずは正しいものであるようだ。

ところがこの山陰なるものは、この山口県の北浦地方から始まって、島根県は石見の国を通り、出雲の国は大社のあたりに至るまで、対馬海流のお陰で、朝鮮からの密航については至って

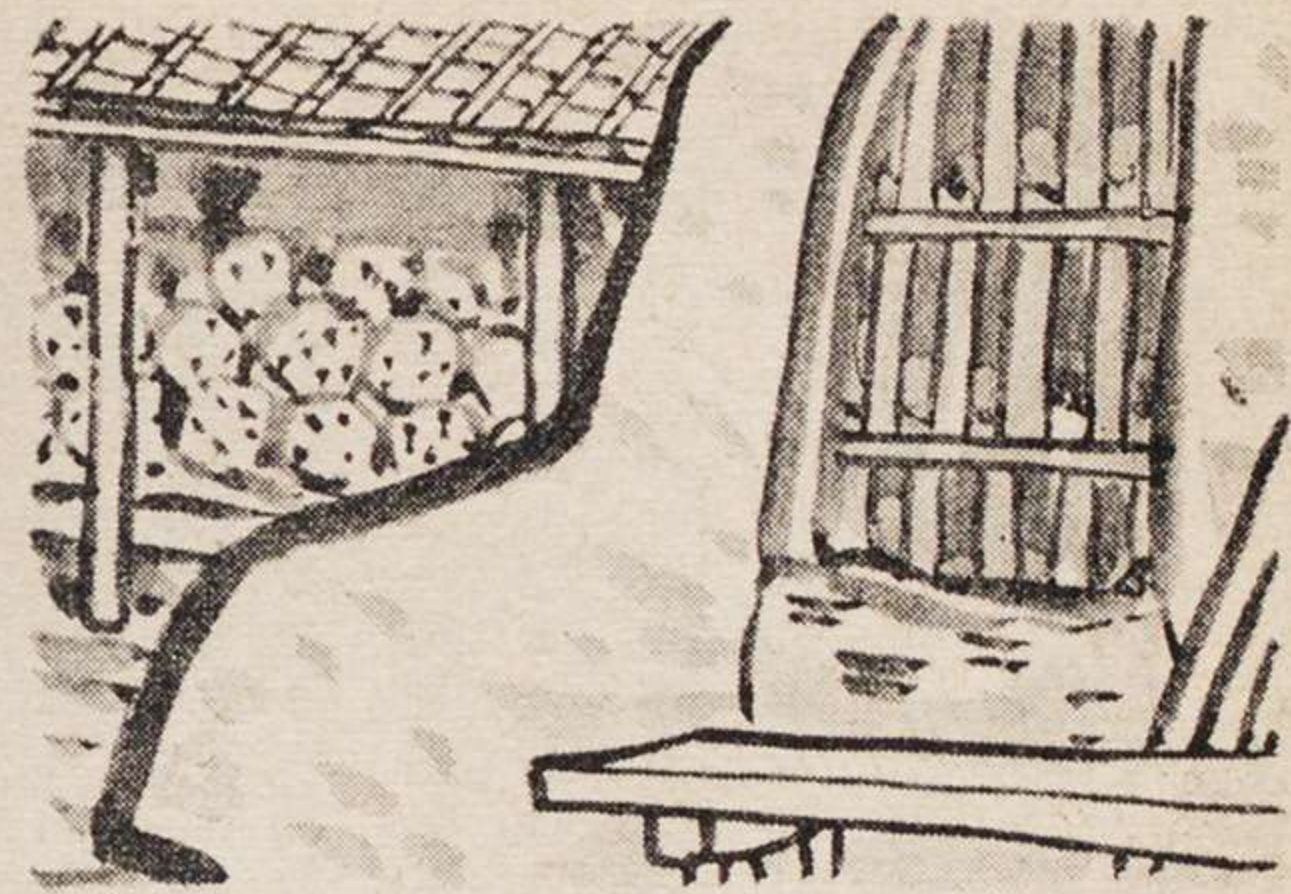
好都合の場所であり、その上今のように税関や海上保安庁なるお役所もないものだから、密入国なんてことは、イトモ簡単であったということになり、現在と違って文化の程度も、朝鮮の方が遙かに高いものであったことだし、当時としては、むしろ「外国人」サマサマとして、大いに歓迎されたようだ。即ち石見の国の瓦なるものの名の出所は、実のところ、朝鮮又は朝鮮を経由しての支那からのものであると言うことは、今更らいうまでもないことで、瓦以外の焼物についても、今に至るも「カラモノ」（唐の国の焼物と云う意味）などとさえ言われているのを見ても、その一つの証明であるように思われる。従って萩城開府が慶長十三年の秋の頃だから、一応その頃に工事が完了したものと思われる。ところでこの一応の工事の完了による後仕末が大変なこと、仕事のなくなった瓦職人のヤリバがなく、当時は「公共職業安定所」なるお役所もないことだから、毛利のお殿様も、ホトホトとお困まりになられたスエ、それではと言う訳でもあるまいが、そこで思いつかれたのが、瓦に毛のハエたような、カワラケならぬ「焼物」であり、一つ焼かせてみてはということ、この萩焼なる窯元が産まれ、瓦が再出発したのではないかと考へ出されてくるが、シロウトながら当然のことのように思われてくる。

即ち今も現存している、唯一つの正統窯である、坂窯なる中之倉の場所などについてみても、そうだが、当時としては、津和野（平安時代から栄えた町）に通ずる街道筋の入口にあたり、窯

うごときぐらい考えられないこともないし、その方が話の筋も通っているようにも思えて来る。だから萩焼の由来書通りとしても、余りに有能な職人であったとは決して言えそうになくなってくる。

然もその上「由来書」では朝鮮の役後、萩焼窯を開いたとあるが、その朝鮮の役後、毛利のお殿様が御帰還遊ばされたのは、この萩ではなくて、今の広島県山奥、つまり吉田城にお帰りになったのだし、然も調べてみると、吉田なるところには、窯跡さえもなく、毛利のお殿様はその後、関ヶ原のイクサ後、さきにもふれたように、徳川方よりニラマレて、この萩へとお引越しとなられたのだから、萩での開城に至るまでの年代の開きに、大きな疑問が残るように思われてくる。又毛利のお殿様の「オカカエ窯」という点から考えてみても、朝鮮からの直輸入ではなくて、先ずは石見の国あたりの職人であったか、又はその系統の人を引き抜きになったものかと考えた方が正しいようにも思われて来る。

ところが、この石見の国と長門の国との、国境なるところは、かつて尼子(アマコ)、大内兩氏の間で、イザコザが度々おこり、直接には益田家と吉見家との勢力争いの場となり、常にその去就が定かではなかった所だ。即ちその一つの拠点が、今の須佐の町であるということだ。またこの須佐の町はそれ程の価値がある位置でもあったようので、この須佐なる所は、歴史



瓦窯風景

元では燃料の薪の蓄積がある処から、当時としては一つの兵垣基地化としての役割をも、あわせて考えられたことだろうと思われる。そうして考えてみると、萩のお城が出来、町の形が整ってから、窯元の位置と言う問題が考えられたのではないかと言うことで、当時としては窯元一つにしても相当地に細かい布陣の意味を持たせて考えられたものであるようだ。そうしてみると、今の坂窯が出来たのは、どうしても慶長十三年以後のことになってくる。従って萩焼の「由来書」による、豊臣秀吉の朝鮮出兵当時、スパイとして、毛利のお殿様にツカエ、その後毛利のお殿様に引きつけられて、あい来られたと言うことになっている話も、ナンダかズレているような気がしてならないようだ。つまり今でもそうだが、アチラさんで窯を持ち、ヒトカドの名をなした窯元の主人となるような者は、恐らくは外国である日本、つまり敵方になる毛利のお殿様のスパイ役などをする訳もあるまいしと考えられてくる。然ししいて言うならば、ただの「窯たき」位の者ならば、窯元の主人から命令を受け、仕方なしに毛利のお殿様の道案内をしたとい

うに、この唐津と言う言葉の意味から、焼物を作っていた処と言う意味で「唐津」と言われているのかも知れないが、兎に角この唐津と言われていた場所には「焼物の窯元」があったことだけは確かなような気がしてくる。

またこの須佐の入江から考え出されることは「八幡舟」つまり「倭寇」の根拠地が、この須佐であったのではないかと言うことだ。即ち須佐の奥の台地の名が「八幡原」と言い、入江の様子や、その上今に残る「須佐美人」（須佐、弾富、小川、江崎付近には、ナカナカ男マサリの美人が多く、今でも都会に萩と言うフレコミで仲居さんとして、出稼ぎに出ている御婦人方が多い）の産地？としても、その名があるのも、実はこの「八幡舟」つまり「倭寇」の御連中方による色々な地域からの、美人カキアツメの結果による、流れを汲んでいるのではないかと言うことも考えられないこともない。

またこの須佐の高山の麓にある権現様なるものは、その当時としては、信濃や高野山あたりの山嶽仏教としてのつながりが考えられるし、山ぶし姿も、この須佐では相当に見られたと言う記録さえあり、この権現様は現在は殆んどその敷石のみであるが、当時としては、その寺宇の壮大さは想像以上ではなかったかとさえ思われる。またこの高山には「磁石岩」があり、現在でも、この須佐付近を航行する船舶は羅針盤がきかない程であるから、この高山は権現様による「霊場」

もこの萩よりも古く、平安の頃より、吉見の殿様の居城、津和野の出城としての役割をもはたしていたようで、この須佐は、徳佐、高佐、と相ならんで、津和野の三本松城の一つの砦としての役をもなしており、その点須佐が度々の戦禍に見舞われたのも、当然のことであったとも言えそうである。

ところがモトモト この須佐なる町は、先きにも述べたように、かつての吉見の殿様の本拠、つまり津和野の三本松城より弥富を通り、犬鳴山の麓の「田の口」を抜け、左に「八幡原」を眺め、右に「星の出城」をみて「唐津」に下り、三原を通過して「五本松の出城」に抜け、そして須佐に至るコースは、かつての津和野の表立関に通ずる街道筋であり、然もこの須佐なる多くの入江（リアス式海岸）は恰好の舟のカクレ場所でもあり、朝鮮貿易の表立関であり、早くより港として栄えたように思われてくる。

またこの津和野街道の道筋にある「八幡原」なる台地の麓に「唐津」という地名が今も残っており、九州の唐津と関係があるのか、それとも現在も焼物のことを「瀬戸モノ」と言っているよ

須佐湾風景（フォルンフェルツ）



ある「八幡原」の台地と焼物とを、むすびつけて考えてみる以外にはないようだし「奥阿武宰判地下上申」なども考え合せてみても、先ずは間違いのないことではないかとさえ思われてくる。つまり当時の室町時代には最高の焼物とされている「青磁」さえ焼かれていたということだ。ただこの際に考えられることは、主としてこの須佐窯では、日用雑器が作られたのに対して、時代も新しいこの「オカカエ窯」としての萩焼窯では、お殿様より「録高」（現在の官吏の俸給のようなもの）を貰っているのだから、生活に困っている訳でもないし、考え方もノンビリとしていたものだろうし、技術的には瓦焼に「毛」のハエたような焼き方であって、焼成温度も低く、幾ら焼いてもセイセイ千四百度どまりの温度であり、素焼きの「カワラケ」に「毛」のハエたような温度とも言えそうである。つまりそのため、萩焼茶碗は水を通すものもだから、茶碗以外のものには使用に耐えないものであったと言うことが、かえって「ヘソマガリ」のお茶人方には歓迎され、茶碗の「茶なれ」と称せられて、賞美される結果ともなり、現在に至ったものであるとも言えそうである。そのため須佐焼なるものは、新入りの萩焼に「お株」を奪われ萩焼の陰にかくれ、今は亡き「土谷一水」氏を最後に、その須佐焼の存在さえも消滅したもののよう

に思われる。

またもう一つ、この須佐焼の存在を「ウスク」したものに、陶器の「目キキ」と称されるお方



倭冠 (ワコウ)

としては、その当時としては大きな意義があったものと思われる。

これ等のことなどを考え合せると、この須佐の町は、萩の開城に比べれば、遙かに古くから栄えたところであると言うことだけは確かであるようだ。

ところで江戸時代の中期、つまり宝暦三年の「奥阿武宰判地下上申」によると、この須佐より焼物を、俵にして千五百六百俵に及ぶものを他国に売出したとの記録があり、その須佐窯、つまり須佐の唐津窯の当時の規模は恐らく、この萩の窯元とは比較にはならない程のものであったように思われる。

また大内氏の室町時代の頃の文献によると、大内氏は朝鮮に対し「八幡青磁」なるものを逆に輸出された記録があり、これを裏がきするものとしては、大内氏が当時の海上権を握っていたとは言え、その海上権の勢力範囲内には「八幡青磁」なる焼物を産出したと思われる所はなく、この須佐窯以外にはないと言えそうである。つまりさきにもふれた須佐の奥の「唐津」のすぐ近くに

でも、アナガチ、クツガエス訳のものでもないようにも思われてくる。  
兎に角、色々と考え合せてみると、萩焼の「モト」は、その手法その他の点からして、朝鮮モノであつたと言うことは確かではあるようだが、その経路などについては疑問があり、その点、朝鮮の役後の直輸入ではなく、先ずは石見の国、それから須佐を経て、この萩で窯を開かれたのではないかと言うの方が確かなように思われてくるのだが、どんなものですか。  
考えてみると、萩焼なるものは、ソモソモ瓦に毛の生えたような「シロモノ」であり、西洋陶器のハンランした現在、ドコニモ、ココニモあるようなものには、アキタラズ、時代から取残された、つまりブリミチフ（原始的）な萩焼がかえって浮びあがると言うのも、オカシナもので、人間誰しも、頭の毛がウスクなるような年令の御仁ともなると、萩焼などに「ワビ」とか「サビ」とか言われる「アイマイ」なものが「ミリキ」となるのかも知れないが、よく歴史の「シンビョウ（信憑）性」をも考えず「アイマイ」な「由来書」だけを楽しみに、お互いにカワラに毛の生えたような「カワラケ」？ならぬ萩焼茶碗（チャワン？）の高台（チャワンのオシリ）でも「ナゼ」（撫、何故）たくなるのかもしれない。

や、お茶の「宗匠」をあげねばなるまい。即ち宝歴の頃、千五・六百俵にも及び陶器を他国にまでも輸出した記録がありながら、今だに須佐焼の名のないのは、一体どうかと言うことにもなるが、現在残っている雑器としての「ツボ」の焼きからみた、黒の鉄グスリ、つまり「尾呂グスリ」なるものは、朝鮮物と言うよりは、瀬戸の尾呂に似て居り、むしろ瀬戸以上の輝きのある点などを考え合せると、殆んど須佐焼のモノが、瀬戸や唐津、引いては朝鮮モノにまでも、その箱書きなるもので、別ものにされて了っているのではないかと  
言う大きな疑問さえ感じてくる。  
ところで話は変わるが、この坂窯の記録によると、坂の三代の頃、弟子の一人が須佐の「土谷家」（窯元）に養子として向えられ、坂から窯を分けて須佐窯が出来たような考え方も出来ないこともないのだが、考え方によれば、むしろ坂窯なるものが出来た頃には、須佐窯の土谷家あたりから、時の毛利のお殿様へと「オカカエ」となり、そのツナガリが、あと  
の坂の三代の頃に養子として、その弟子が向えられると言う見方も、当時としての「ウルサイ」家柄の問題から考えてみ

お茶碗の高台





追記

○御用窯萩焼窯元——文禄の役（一五九二）に多くの朝鮮の陶工が日本に連れてこられたが、萩焼もかれらの手によって始められた。毛利輝元は関ヶ原戦後防長二州に削封されたとき、この陶工を伴って萩に来た。そして中の倉、鼓嶽のふもとに窯を開かせるとともに、付近の古窯を多く再興させている。これらの陶工の子孫や同じ流れを汲む陶工のうち、多くのものが御用焼物師として禄をもらい、また窯を預かったが、とくに坂、三輪両家は代々御用窯を受け継いだ。これらの焼物師の造る陶器は地名から松本焼と呼ばれ、作品は藩に納められた。萩焼とは他の土地の人がいった呼び名である。

○萩焼の製法——この松本焼に使用される土は、その初期の頃は、松本付近の土が利用されたが享保の頃（一七一六年頃）から山口県吉敷郡鑄銭司村付近から産する大道の土が使用されるようになった。これを基材として金峯（みたけ）や見島の土を適量混合して用いた。そこで享保以前の作品を古萩（こはぎ）と称している。釉薬（うわぐすり）の原料としては長石や灰が用いられる。製品は茶道具、置物などの装飾品、湯呑、酒器などの食器である。

製法は、大道の土に他の土を混合し、水ひして純粘土をとり、それを土ぶみをして練る。練り土はふつう「けりろくろ」で成形するが、とくに作者の個性を表現する手づくねの方法もある。成形して乾燥された素地は、窯のなかに積み重ねて一七、八時間焼く。これを素焼きと称している。ただし井戸風の茶わんは素焼をしない。この素焼をしたものに、長石で調合された地薬（本釉）をかけ、さらにわら灰を調合した流し釉を施す。この地薬の上にかける流し釉には、いろいろな調合法があつて、この調合法や施釉の方法で萩焼の特徴が現わされる。この施釉をされた素焼のものは、円板や円柱を用いて台座を作り、それに並べて窯積みされるが、それに「さや」は用いられない。炎は萩焼茶わんとして最も望ましいびわ色にするため、多く酸化炎が用いられる。窯積みされたものは、本焼をするが、これには約一八時間松材を投げ込んで焚きつけ、焚き終ると焚口を密閉して火止めをし、おおよそ三日間放置して窯開けをする。こうして製品が出来る。

萩焼窯元、三輪十代休雪、昭和三十一年八月二五日付山口県指定無形文化財工芸技術萩焼保持者としての指定を受け、翌昭和三十三年三月三〇日その萩焼技術を「記録作製等の措置を講ず

べき無形文化財」と国指定を受けた。

○萩焼坂窯元——中の倉。藩主毛利輝元が萩に城を移したとき、朝鮮の陶工をつれてこの唐人山の麓に窯を開かせ、朝鮮系の陶器を焼かせた。これが萩焼きの始まりで、当主坂高麗左衛門はその後裔で一代目にあたる。作風はいまなお朝鮮焼、井戸風のもものが伝承され現在に至っている。

○萩焼三輪窯元——無田ヶ原。坂窯とともに長い伝統をもつ。作風は楽風を取入れた萩焼である。萩焼の不振のときも、一人他の雑器を焼かなかつたとして、不走庵とも称されている。当主三輪休雪は国、県の無形文化財指定をうけており、その作品は高く評価されている。

## 徳川家康さんは「萩が好き」の巻

最近萩市への観光客が増えて来たようで、観光協会の統計をみると年々に増え、バスやその他の乗物からみた、萩市の観光人口は、ザット数えて五十万人を超えるものとなるらしい。然もそのお客さん方は、ご丁寧にもお泊りにならずと、バスやタクシーでサッサとお帰りになるか、又はお隣りの長門市は湯本温泉にお泊りになるのだから、この萩に残されるものは、なんとお客さん方による御小便とバスが捲き散らす「ホコリ」だけと言うことになりそうだ。

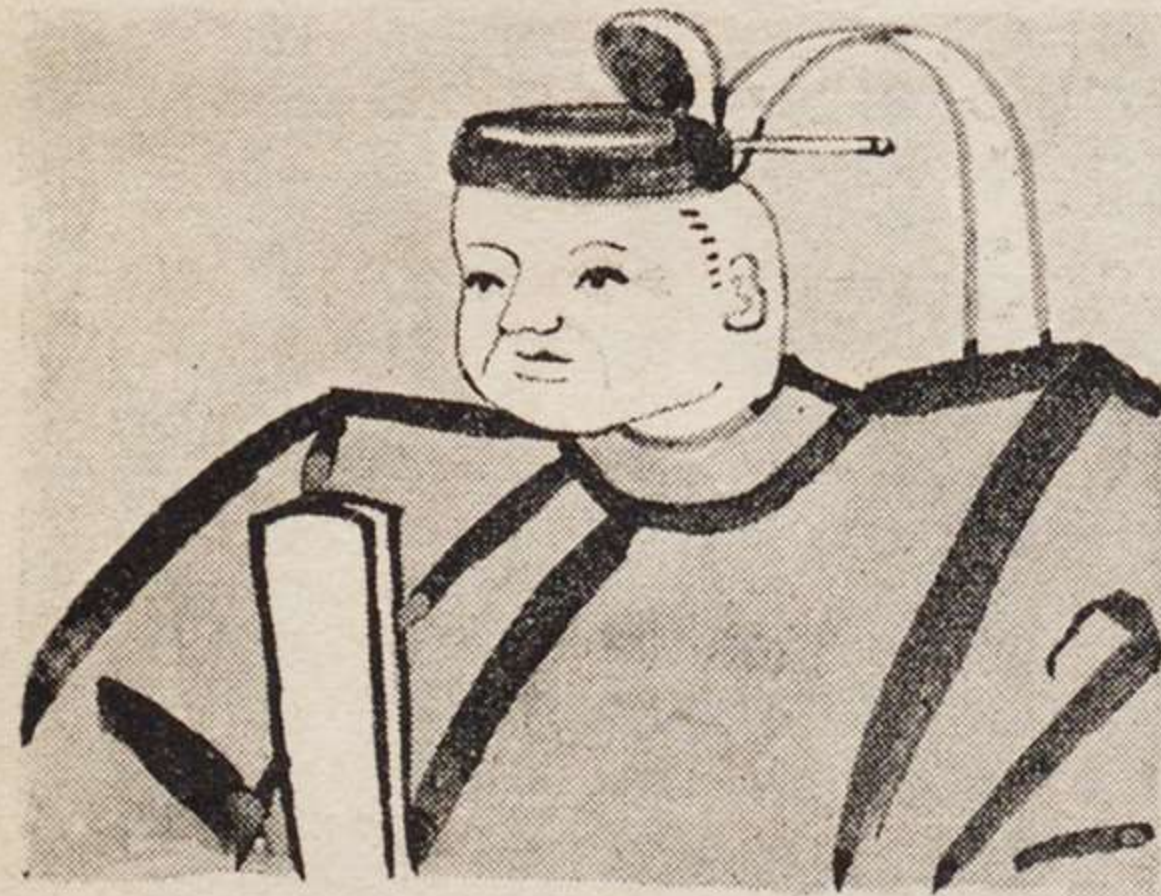
大体漁業と言うものは、ズブのシロウトである私にはよくは分らないが、常識的に考えてみても分るように、海の魚の通り道には網を張り、魚を一網打尽とまでは行かなくとも、多少なりとも何等かの「トリエ」があるからこそ、漁業と言う商売が成立つようなものであって、この萩にも、あれだけのお客さんがお通りになられるのだから、少しは「金」が落ちるように、なんとか「手」をうちたいものだと考えられる。漁業の場合でも網という「モトデ」があつてこそ、魚が

採れるように、この萩にも網ならぬ、なにかの資本ぐらい投資して、指をくわえて、ただ眺めているだけでは能はなく、なんとか観光都市としての「メンツ」が立つような方法を考え出してもらいたいものだ、萩市のお偉い方々にお願いたくなくってくるのは人情だろう。

計算は細くなるが、仮りにお客さん方に、キャラメルでも買って頂くとして、お一人様一個につき二円の「モウケ」と見積れば、年間でザット百万円以上の収入となり、月給五万円の方の二人分の年間収入と同額となり、一般の吾々市民一人の年間収入よりは遙かに多い額となるのだから馬鹿にはならない。だからチョイと頭をヒネリ「ソロバン」でもハジイテ頂くとすれば興味湧いて来そうなものだが、どうしてどうして、モトモトお人好しの御人柄の方々が、この萩には多いようであって、バスやタクシーによる「ホコリ」だけを頂戴し、スズシイ顔をして「悦」に入っておられる「ホコリ高き」御仁の集りが、この萩のような気がして来てならないが如何なものですか？

ところでこの「ホコリ」で思いあたる一つある。即ち萩では「キグライ」のお高い、お茶道と言うものがオサカンなようであって、大抵のお偉い？方々のお茶席では、何時もと言ってもいい程、毛利のお殿様の「書」なる御掛物が、ハバをきかして、床の間に掛っているようだ。一体毛利のお殿様なる方々の中には「スイ」のきいた出雲の国は松平不味公のように、お茶でも

御推奨遊ばされた程のお方でもおられたかと言うと、そうでもなさそうだ。大体毛利のお殿様はモトモト四百年ばかり昔のこと、広島は奥の吉田という部落の野武士の御頭目さんのタグイの御出身であるらしく、タマタマその時の流れの波に乗って、明智光秀さんよろしく、寝首をもカカンばかりのオコナイによって、尼子の軍ゼイを敗り、中国地方を平定し、世の中をウマク泳ぐ積りで、時の石田三成ダンナに靡かれたのが、ソモソモの御運のツキであって、仕方なしに中国全域から、周防、長門の二州におとじ込めの御身とされる仕儀と相なられた御模様であるらしい。モトモトこの山口なる所は、その昔大内文化の栄えた所で、時の大内氏は戦国の世とて、今のように税関なるものもなく、公然と密貿易なるもので、フトコロ具合も豊かであり、然も善政を施され、その中心は「西の京都」とまでうたわれた、今の瑠光寺の五重の塔のある山口市で、当時京都あたりのクイツメ者のオクゲさん方も相当に大内氏を頼ってお下りになっておられた程で、戦国の御代の当時としては、相当に繁栄した様である。



徳川家康肖像

毛利の御殿様も御引越しに当っては、内々この山口か、または瀬戸内は山陽方面に居城をおかまえになる、御心積りで居られたもようだが、オソルオソル猫にニラマレた「ネズミ」でもあるかのように、居城について、江戸表へお伺いをおたてになられた様であって、その結果が、徳川家康さんの「鶴の一声」で、この山陰僻地の萩に白羽の矢が立ったものであるらしい。ところがこの萩なるモノは、今でもそうだが、当時としては僻地指定地域のようなもので、毛利のお殿様は僻地手当にあらず、江戸表からの「ニラマレ料」として、この山陰僻地は萩へと押込められたと言うことになる。即ち徳川の家康さんは、今のように人文地理学や経済学などの御教育はおうけになつては居られない筈なのに、ナント今から三百七、八十年ばかりもの昔のこと、既にこの萩が文化の僻地であることの折紙をおつけになられたのだから、考えてみると実に御偉いものであつたと言いたい程である。

徳川家康さんから僻地指定をうけた当時のこの萩は、樺の郷なる一寒村であつて、今の川内などは、一面の葦のシゲミであつたらしい。勿論その当時をみた訳ではないが、文献などからの計算である。その折の毛利のお殿様にしてみれば、恐らくは泣きの涙で、シヨボシヨボとお引越しになられたものと、当時を想像しただけで、その折の御姿が眼に浮んでくるようだ。

その後時代が下り、毛利のお殿様方の反骨精神のお蔭で、お殿様の御威光もトミに上り、萩の

人口もふくれあがり、三百年ばかりの間に、徳川方の御威信は反対に衰え、徳川さんの眼も届かなくなつた幕末の頃ともなると、毛利のお殿様を御筆頭に高級武士の面々方は、早速に鼻をカンダ「チリ紙」でも捨てるように、萩に見切りをつけ、萩から正々堂々と山口へと夜逃げならぬ昼逃げをなされ、居城を山口へとお遷しになられたのが、文久三年のことである。そのため萩に残つたものは、八十ばかりのお寺（現在は五十七ヶ寺にへつている）と、余りオカシコクないお方だけと言うことになりそうだ。（勿論私も御存知のように、そのオカシコクない者の子孫ですが）してみると萩の市民で大いに敬意を表さなければならぬお方は、毛利のお殿様ではなくて、ナント言つても徳川の家康さんの外にはないと言ふことになりそうだが、どうしてどうして、「タヌキ親父」とばかりに、徳川家康さんは、この萩ではナカナカの悪評のようだ。

ところで、よく筋道を立てて考えてみると、少くともお茶において、道を売物とされている、その道の先生方のお集りである「お茶会」なるものには、特にその点について御留意なされ、毛利のお殿様の「書」なるものを、お掛けになられる前に、徳川家康さんの「書」でもお捜しになり、お茶席にお掛けになるぐらいのお心掛けが、本当の道の方ですな。そうあつてこそ正しい意味での「キグライ」の高い「ホコリ」を持つと言ふことになりそうだ。幾ら観光客の乗つてお越しになれるバスのホコリだからとて、黙ってカブラなければならぬ義理もないのだから

あるが、このお方が萩の御出身であることを知っているお方は、そうザラにはない筈である。然もよく考えてみると、本当のところ伊藤公の御出身は萩ではなくて、最近伊藤公の銅像が立てられた、熊毛郡は片田舎（熊毛郡束荷村、現在の太和村）の御出身であり、伊藤公の小さい折に、青雲の志をお立てになり、御親族をたよって、一時萩へ御転入なされた模様であって、その上当時の藩校、明倫館へは御入学の御資格さえなかった程の下っ端武士の御子息で、そのため公は仕方なしに？松下村塾の御門下生となられたのである。その後御維新ともなると、サツサと萩へは見切りをつけ、山口を経て、江戸表へと御転出なされた程の「キケモノ」のお方であり、生粋の萩人とは言えそうにもないのだが、このことを萩の人も案外に御存知ないようだ。従って萩の人だからと言って、伊藤公を御自慢なさるのも「当」を得ていないような気がしてくる。

このように考えてみると、純粹に萩の人と言えそうなお方は、セイセイ今から千三百年もの昔のこと、命令一下、白い牛を引張って、奈良は東大寺の御奉仕に参上されたぐらいの「オトナシイ」覇気？の者しかおらないと言うことになりそうだ。

伊藤公の話が出たので、ついでに考えてみると、マコトに面白い。伊藤公は生前、大変に女を愛されたことでは、御出身が萩であること以上に御有名であったようだ。ところがその伊藤公が現在は新千円札に御登場なされ、今度は伊藤公が女の人から反対に「キンチャク」の奥深くに入



る人は別だが、今の若い世代の人々は、山口県人は別として、この萩が中国地方にあることさえ知らない人の方が、はるかに多いと言うことだ。

この前新千円札の図柄の人物に聖徳太子と、選手を交代され、新しく脚光をおあびになって御登場なされた、かの郷土の大先輩？、伊藤博文公の名は確かに天下に色々な意味で、御有名では

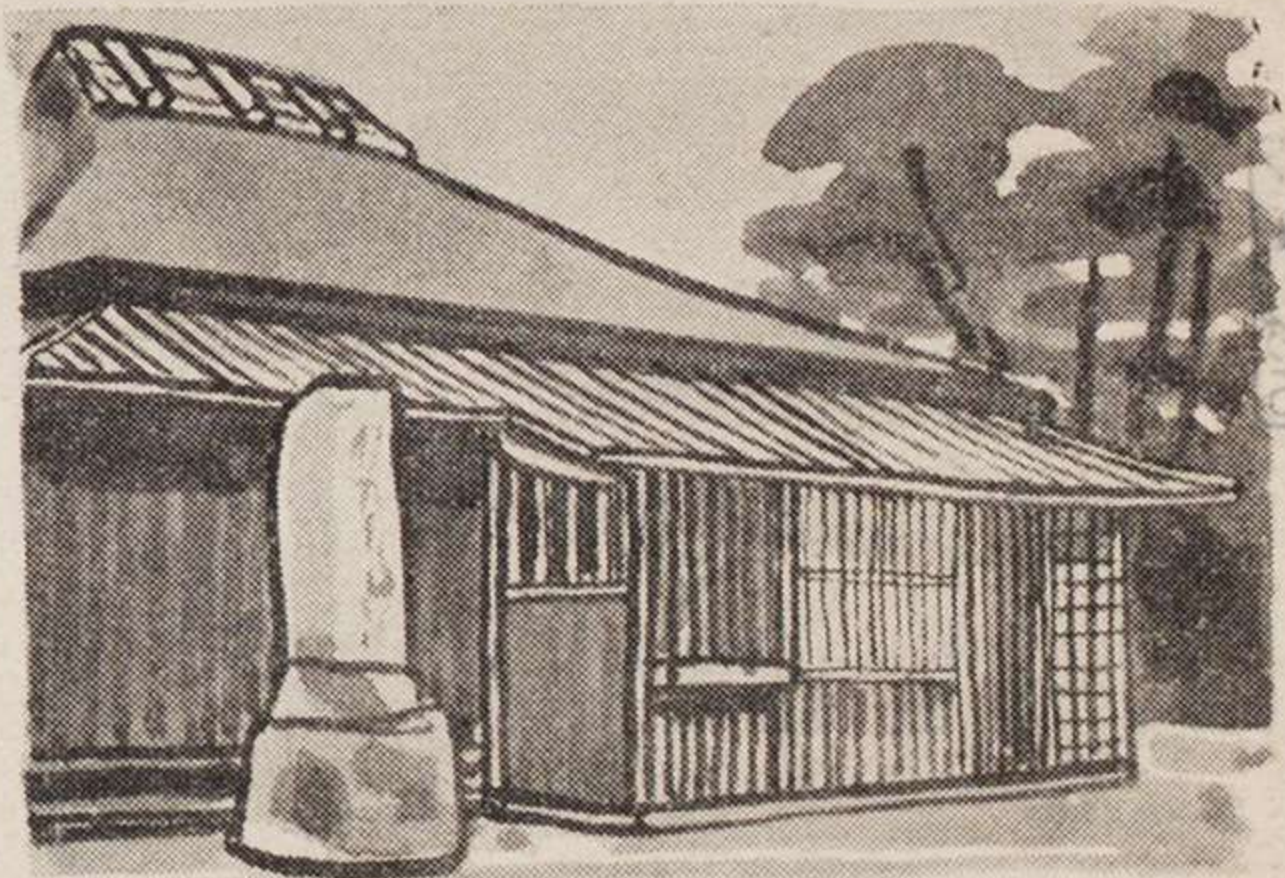
「ホコリ」についても筋を通し、ただの「ホコリ」にならないように「トク」とお互いに心掛けたいものだ。

ところで、その徳川家康さんによる折紙つきである、この僻地の萩なる御住人方は、家康さんの御教訓を忘れるだけではなく「サカウラミ」さえして、お蔭で栄えさせて頂いた、その昔の夢だけが忘れられず、明治御維新の大事業は萩の如くに思い上った、考え方をしている人が、この今の萩の中には案外に多いのではないかと言う疑問が湧いてくる。そこでお互いによく考えなければならぬことは、既に時代が変わっていると言うことだ。昔の夢だけをみてい

れられて、愛ガンされるお立場になられることなど、考え合せてみると、全く世の中と言うものは、皮肉なものである。

ところでこの萩にも、他の城下町同様、「武士の商法」なる言葉がある。この言葉は昔の夢を追っている自己満足の物差しのようなものだ。手をくみださずに、良い顔をしようなんて、不心得な見本のようなもので、現在では到底通用するものではないのに、この萩ではそんな言葉が、今だに生きているのだから面白い。

即ち商店街の田町通りも、パチンコ屋並に呑み屋街の吉田町なみに、水銀灯がついてはいるが、幾ら水銀灯をつけただからとて、夕方七時近くになると店を閉めていたのでは、なんのための水銀灯かと言いたくはなってくる。然もこれが観光都市萩の「オモテ通り」の商店街のユキカタなのだから変なものだ。田町通りの、ある商店の御主人のお言葉によると、「夜、店をあけていても、電燈代がとれなくて、「云々」とオツシヤル。それならば、態々水銀灯まで御負担になされる必要があるのかと



伊藤公旧宅

言いたいほどだ。これも「武士の商法」の見本のような気がして来てならない。

また萩の特産品「夏ダイダイ」（なんてセンスのないゴロですな）なるものについて考えてみると、これもまた面白い存在である。

即ち農林省の統計調査資料によると、柑橘類なるものは樹令四十年とされているのに、この萩の夏ダイダイなるものの木は、大体明治九年頃から、明治の十三年頃にかけて植えられたものであつて、既に七十年を超えたものばかりが多いようだ。つまり養老院行きか、西の浜の焼場行きかの如き存在なのに、いまだに実だけを採用している萩の園主の姿などは、漫画のタネにこそなつても、萩の発展はおろか、萩が物笑いのタネになるくらいだが、セキのヤマのようだ。だからと言う訳でもあるまいが、時折くる大寒にあうと、この夏ダイダイも木になったママで「トウシヨウ」にかかり、その上「トウシ」するような結果が出るのも当然のことだろうし、今までにだつて何故に、大正製薬の「サモン」ならぬ夏ダイダイの若がえり法でも、早めに講ぜられなかつたものかと言いたくなつてくる。

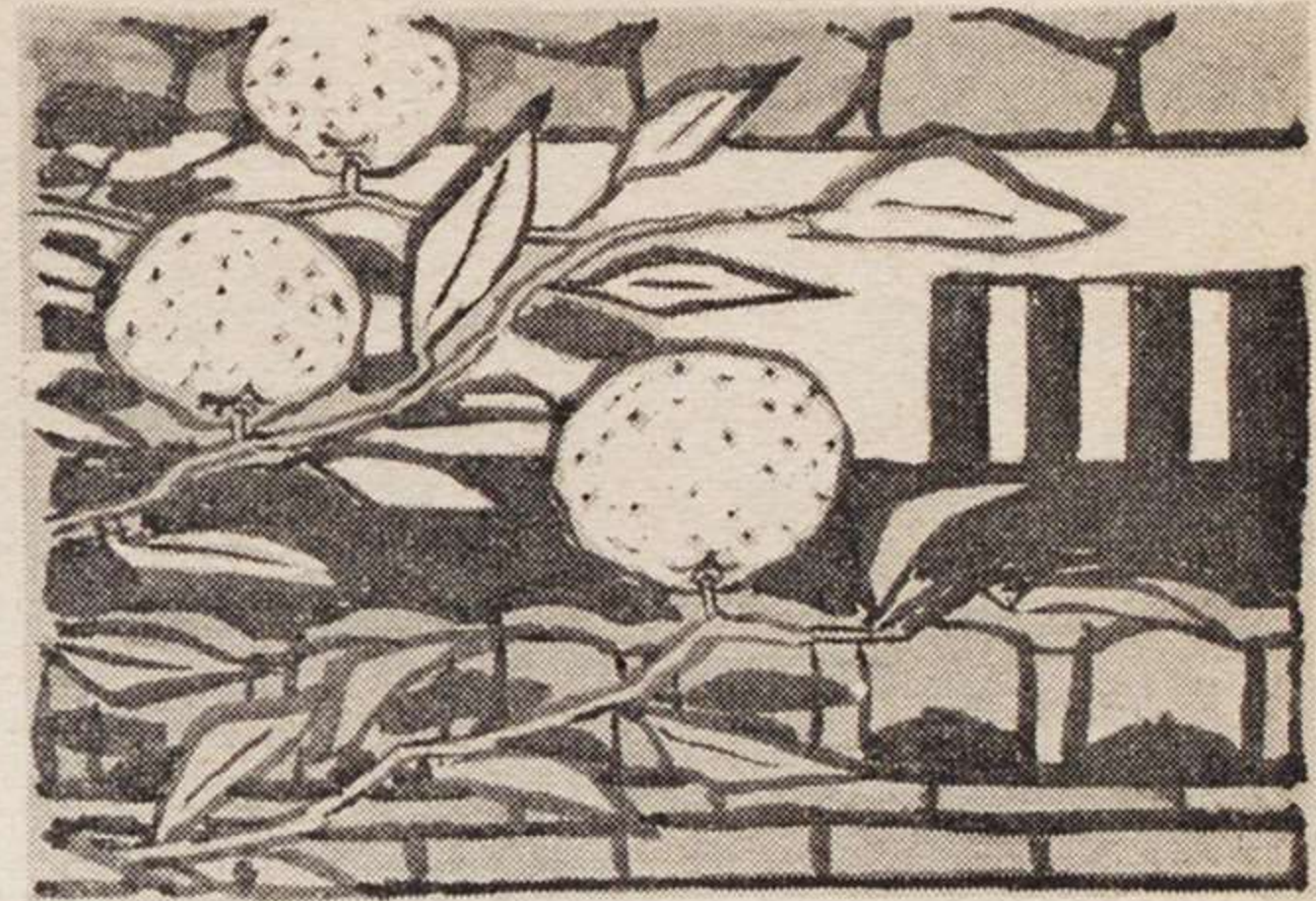
それに第一あんな「スッパイ」夏ダイダイなんかを売物にしたところで、東条さんの処刑後の今日、産児制限教育の徹底により、その結果「ツワリ族」なる御婦人方の数も「ウン」とへり、これが特産品としての萩市の発展策には余りキキメがなさそうである。

なっってはいるが、私達が子供の頃よりのことを考えてみても、日東製紙工場なるものが出来る以前から魚類は確かに捕りつくされて少くなっているし、それに戦後農業などの利用で、マスマス少くなっていると思われるのに、その分までも、工場汚水に「オンキセ」ようになって、汚ない考え方、つまり「汚水を食物」にしようなんて物の考え方を捨てて貰いたいものだと、関係者の方々に申しあげたいくらいである。

世の中には「ホオカムリ」のように、両方ともに良いと言うことはあるまいが、お互いに「ハラ」を割り「キョシンタンカイ」にゆずりあい、今から三百七、八十年もの昔のこと、徳川家康さんから御指定をうけた、山陰の、しかも僻地としての地理的条件をモトに、根本から話しあい考えなおすだけの「ドリョウ」をもち、腰を落着けて、萩市の大乗的見地からの真の発展の方向付けを、萩市のお偉い方々にお願ひしたいものだ。

最初にも述べたように、この僻地萩まで遠路態々、バスやその他のお乗物でお越しになられるお客さん、つまり観光地をみあきた程の御連中を如何に、この萩で処理をするかと言うことだ。即ち海の魚の通り道には網が張られるように、萩市にも資金を出し、網ならぬ観光施設を今のうちに急ぐべきではなかるうか。

歴代のお偉い？市長さん方は何時も、労働組合の大会スローガン張りに「萩市の発展」「観光



夏ダイダイと築地

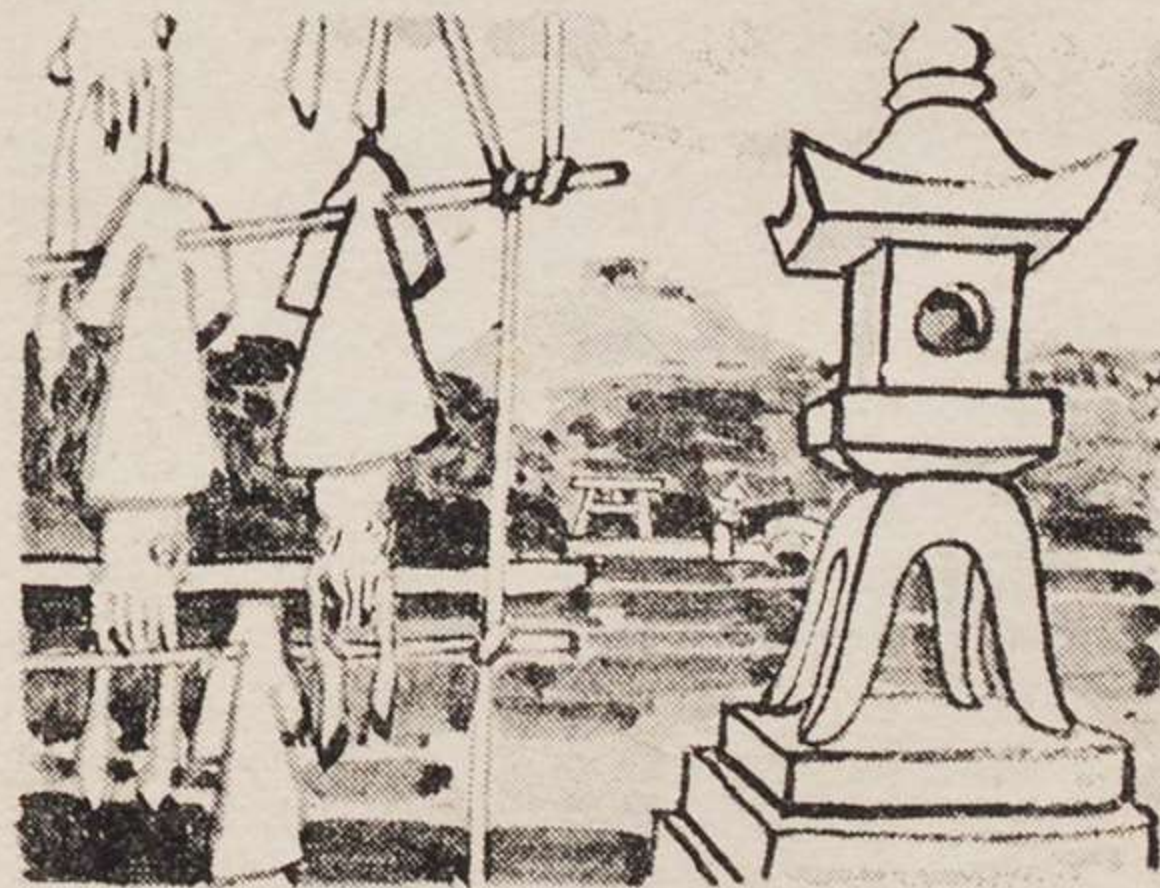
また工場誘致の件にしても、今まであった風呂屋を除いては萩市では御自慢のタネであった唯一つの日東製紙工場の煙突も遂に煙が出なくなってしまうたし、今更ら工場誘致でもあるまい。

考えてみると日東製紙工場なるものをツブしたのも、悪くいえば萩の御連中だったようにも思えないこともない。第一萩周辺の山の竹材の値段が九州は南部の人吉地方からワザワザ運んで来て、東萩駅渡しの値段と同額だったと言うから「オドロキ」である。従って元経済企画庁の藤山長官ならずとも閉鎖したくなるのは人情かもしれない。然もツブレルまでに政治的に解決出来なかつたものだろうか

言う疑問が、煙の出なくなった煙突と共に残ってしまった、一般の萩市民の者は「煙にまかれた」ような格好だ。然し今のところ、日東製紙のあとに大昭和製紙がお越し入れと決ったが、それにしてこの辺地の如き萩の地では輸送費がかさみ大きな利益もあがらないことだろうしと、シロウトながら心配にさえなってくる。またこの工場再開にしても、漁業補償の問題が何時も問題と

立市」とばかりの空念仏をお唱えになつて居られるようだが、一体今までに何がなされ、何が残されているかと言うことだ。それもその筈であつて、実際には、その予算面でみたところで、スローガンの唱い文句とは違つており、天井から目薬の如きものしか見積つてないのだから不思議であり、萩市民の皆さん方も黙つて居られるのだから変なものである。

一般の商店でも、三年もすれば、客集めに店舗を改装し、越ヶ浜は明神池（天然記念物）の魚でさえも、パンと言う「エサ」（魚もナカナカ文化的になつて来たようですナ、その内、魚も、ナイフやフォークを使つてお食事をなさるようになるかもしれませんぞ、ボヤボヤしていると大変だ）を与えない限り集つて来ないように観光萩市という看板に対しても、折角魚ならぬ観光客がお通りになるのだから、お小便だけをさせて、ホコリを頂戴させられるだけで帰らせると言う「手」はないと思われ。この場合、観光客を集めようと言うのではなく、ただ日帰りでお通りになるお客さん方に、お金を使わせるような施設をし、その上この次にも「どうぞお越しを」と言う



明神池風景

ように、ツバでもつけて「手」を打つべきではなからうかと言うことだ。

徳川家康さんの「鶴の一声」によつて開けたこの萩も既に栄えた面影もなく、「亡びる物の哀れさ」のみを売物にすることなく、少しは頭を働かせ、工場誘致なんて小細工はやめ、観光の施設化一本をはかり、山陽道や北九州あたりからの避暑地化か、または高級住宅地化か、それとも萩には「西之浜」（焼き場）も近くにあるのだから、堀内あたりを有料養老院化かを、計るようにする、萩市としての真の大計を立て、実行に移して行くべき時が既に来ているのではなからうか。その具体策については、萩市には観光課なるお役人様も居られることだし、観光協会なるものも現存し、その上商工会議所の会頭さんも居られるし、萩市の方向付けをなされる、市長さんも居られることだから、私の如き平市民が述べる場でもあるまい。

唯々どの「ミチ」にせよ、萩への道路だけは「キレイ」にされること、  
「花一ぱい」運動よりは先きのようだ。

この時代から取残され過ぎた、萩市の行く道を今更ら東照宮様にお伺いをしたところで「ヒツギ」の中で、徳川家康さんは、シャクツタ顔の中の鼻の先きにシワをよせて、御苦笑なされることだろう。

兎に角、一度の「陳情」「請願」もなく、今から三百六、七十年もの昔のこと、この萩市に僻



地指定の折紙をおつけになられた、徳川家康さんに、萩のお方は決して「足を向けて」は寝られ  
ませんぞよ、と最後に言いたい。

#### 追記

○伊藤博文旧宅——（指定史跡）松本椎原、草葺平屋建、三三平方メートル（二九坪）の小さい  
もので、もと萩藩の中間水井武兵衛（伊藤直右衛門と改名）所有の家であった。そして父林  
十蔵は伊藤家を継いだので、林姓を伊藤に改めた。

博文は十四才のときから、十三年間、ここに両親と住んだ。勉学の部屋、出世石など、伊藤  
俊輔といった時代の記念物がある。

○明神池——（指定天然記念物）笠山の熔岩と潮流の作用で、海が埋め残した、かん水湖であ  
る。大池、中ノ池、奥の池の三部分に分れ、面積約十アール、外海とは岩の隙間を通して海  
水が出入する。池には、マダイ、クロダイ、クロヤ、ボラなど約二十種の魚が生息してい  
る。餌を与えると湧く如くに集る魚のさまは、マコトに面白い。

### 「ビスケットを投げなかった」だけの巻

ある日曜日のこと、現在は博多に在住している、香港での、かつての友人が、突然に御来萩。  
本人とは久方振りのことだし、それに本人にとっては、この萩は始めての所なので、案内役を  
務めながら、萩市内を廻ったが、その途中で考えさせられた。と言うのは、松陰神社へ案内した  
折、本人は皆目、松陰先生についての概念さえなく、松陰先生の説明をして行く内に、本人イワ  
ク「するとその人（恐れ多くも松陰先生のこと）は時代の先覚者と言うことで、つまりは今の全  
学連の先祖のような方ですな」とトボケタ顔付き。これは説明しても無駄、と思ったので唯々市  
内をタクシーで千五百円分の残り程、ツツパシル。車の中ではその客ならぬ友人「実に景色がス  
バラシイ」「山の色がキレイだ」の連発である。そして最後に指月公園の入口で車を下り、散歩  
でもすることにした。ところがトタンに本人イワク「この公園らしくない、手入れのしていない処  
がまた実にイイ、君!!」と肩をたたかれた。そこに「君」が付くかい「人を馬鹿にするな」

と言いたくなかったが、よくよく考えてみれば、都会ズレしたこの友人にしてみれば、その通りかも知れないと思われた。それにしても此処（指月公園）も以前よりは多少は手入をされて、良くなっているのだから、と内々一人で安堵する。

城跡は大手門跡あたりから公園内の藤棚の下を抜け、左の松林の中の「花之江」茶亭へと行く。丁度日曜日で、お茶席びらきの日でもあったので、友人を誘ったが、その友人、茶亭入口の案内板をみてイワク「君、これは珍しい、カヤ葺の喫茶店シアないか」との言い分、「抹茶でものむかい」と話しかけると、その友人「冗談じやアない。今時洋服を着て、靴までもはいている時代に、靴までもぬいで、その上一杯五十円の金を出し、カシコマツテ、馬の小便でもあるまいが、お茶をニゴシタようなものよりは、同じ馬の小便に似ていても、泡のたつビールのオチャケの方ならネ」とオツシャルのだから仕方がない。

そこで茶亭の西側にある小高い掘端のベンチで、シバラク休むことにした。時は午後、お空は薄曇りで、丁度気持ちのよい気候である。

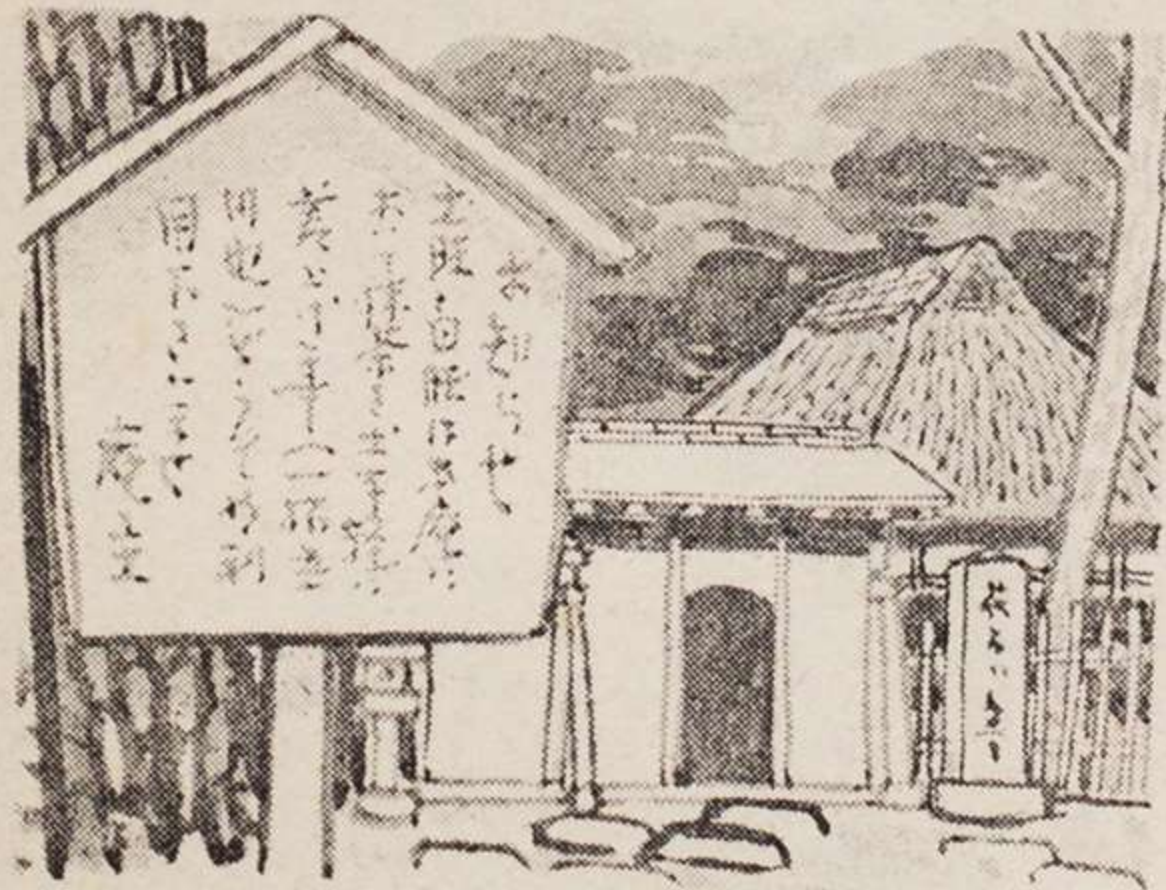
ところがそこえガイド嬢を先頭に、沢山な観光客が、ゾロゾロと金魚のフンのように続いて、やって来た。ヒヨイとみると「花の江」茶亭のお庭では四・五人のお茶人ガタ、野点（ノダテ）の真最中、観光客の皆さん方は、そのお庭の竹垣の外から「奇異？な目」をして、その野点の光

景を打揃って眺めてイラッシャル。野点の席では和服姿のオキレイなる御婦人ガタは、芝居気？を出して、お茶をニゴシテ、おのみの最中……。

小高いベンチから一緒に、これを眺めていた、例の友人、スズシイ顔をしてイワク「君、あれをみい！」「中でお茶をのんでいる御連中は、サクの中に居る動物園のオサルさんそっくりジヤアないか、ただ違っているところは、竹垣の外から眺めている観光客が、中のオサルさんならぬ、お茶人に、ビスケットを投げて居らないところだけだぜ」とオツシャル。

ヨクヨクみると全くその通りのようだ。

友人イワク「今日は本当に、参考になったネ」「萩と言う処はだネ、サクならぬ山々に三方を囲まれ、一方を海で区切られた自然動物園に飼われているオサルさんと同じだネ」と、また「そして、サシズメ萩の君達は、お気毒だけれども、時々観光客のオコボレで生活をしているオサルさんと言う処だネ」「それにしてもナントカしなくてはそのオコボレのアガリが少なからうて……」とオツシヤッタ。



茶之江茶亭

これで私のクダラない萩の説明以上のことを、この友人はイトモ簡単に、萩を知り尽したような顔をして、その日の夕刻、煙の出ない汽車に乗って帰ってしまった。  
アア、ナニオカ、イワンヤ、である。

追記

○茶室自在庵と花月楼——ともに藩主ゆかりの茶室で、園内にある。

自在庵——一名花の江亭。もと三の丸（堀内）常盤島対岸の藩主の別邸の茶室を移築したものであるが、当時藩主敬親は尊攘志士（ほとんど皆身分が低い士であった）と、ここで茶事に托して会見していたという、敬親にゆかりが深いので、今日でも敬親の命日の毎月十七日に茶会が開かれている。

花月楼——もと藩の重臣梨羽邸内にあつて、城中煤払いのとき、藩主は一時梨羽邸に避けて、この茶室で過したというもので、維新後ここに移築した。そのため一名煤払いの茶亭ともいうが、花月楼形式の茶室は全国的にも稀れて、建築上貴重な実例とされる。

「萩のお方は文化人がお好き」の巻

文芸春秋や、その他の週刊誌などに、時折、萩の記事が載るようになった。萩の者にとっては郷土のことが書かれているのだから、気持ちの悪いものでもないらしく、萩の名士の方々の間では、話題によくのぼっているようだ。それらの記事を読んでみて、その底を流れているものを汲み取ってみると、余り感心をするような理由ではなさそうだ。言うならば萩の町全体が、時代から取残されたと言う結果のものが都会の文化人の眼を引いたものと言うだけのことらしい。例えば中野先生の「モンカキ屋」にしても、また大宅先生の随筆にしたところで、もとはと言えば萩と言う町が時代に流されたのではなくて、ただ取残されたと言うだけの話で、「哀れな姿」を萩の町の中に見出されたと言うことになるようだ。

つまり萩が日本と言う時代の動きからかけ離れた「稀少価値」が認められただけのこと、  
「ホメラレル」理由ではないようだ。そんな「ホメラレナイ」理由が、この萩での話題になるの

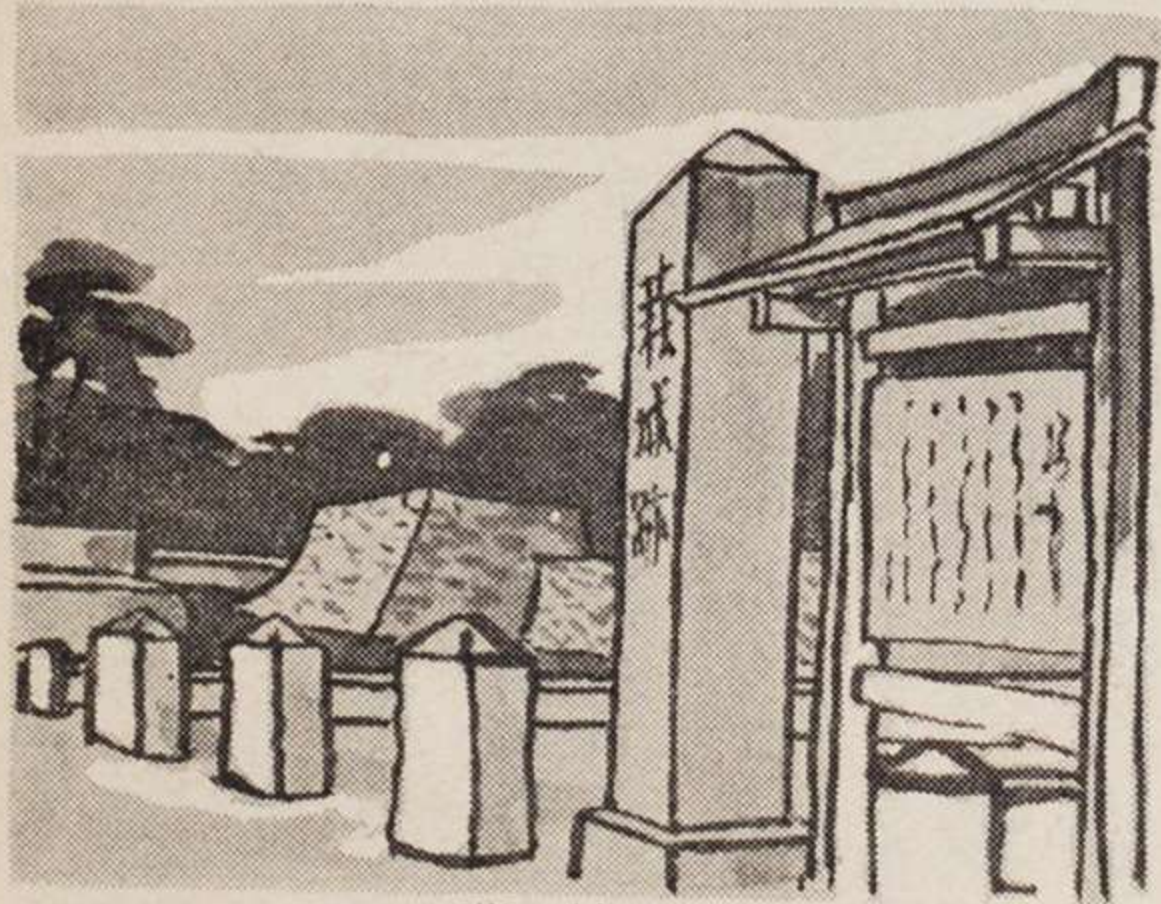
ら、坂本の九ちゃんの「上を向いて歩こう」ではなく、「上を向いてツバをはく」のタゲイであり、マスマス変な気がしてくる。

ところでそれらの文の一つに「偉人の出尽した町」と萩を評価されているものがあつた。その意味をそのまま受取るとすれば、今の萩のお方には、平凡な脳なしばかりと言うことになり、これ程人を馬鹿にされた言葉はないと思われるのに、その本が萩ではよく売れて、しかも廻し読みまでされている有様など、あまり「ホメラレタ」図ではなさそうだ。

そこで一つ昔をふりかえってみると、かつて毛利藩のお殿様の御在所としてのこの萩は、防長二州からの出稼的人物どもが相集まられ、萩と言う「チンタイ」した環境から、反抗的精神を自然に植付けられ、それらの方々は、江戸表からの眼の届かなくなった幕末の頃、藩公自ら萩へ見きりをつけられ、山口へと遷居された訳だが、その藩公に同道され、明治の御維新ともなれば、それらの御仁は、藩公のお膝元を離れられ、中央に向って相集まられたと言うことだけのことである。従ってそれらの出稼的人物の方々は、モトモト萩の方ではなくて、その上萩では遂げられなかつた野望に自ら花を咲かされたのが、明治維新の大業であつたと言えそうである。だから、一旗あげようなんて、した心のある方々が、一時萩へ御転入になつたような方々であり、その方々によって、天下の偉業がなされたと言うだけの話で、根からの萩の御住人には、明治の昔より

このかた、出世をするような「大それた」お方は、案外に少ないのではないかと言う気がしないこともない。また考え方によれば、偉人になれるような素質のあるお方は、モトモト萩には住めないと言うことだ。だから「偉人の出尽した町」と言う萩の観方は当ってはいないようだ。

考えてみると萩の指月神社や、その公園一体をふくめて、これを別名「遙拝所」とも呼ばれているようだが、これは恐らく「東方遙拝」でもしておられ、その名があるものと思つていた。ところが、そうではないからオモシロイ。即ちその昔、毛利のお殿様なるお方は、徳川家康ダンナからニラマレて、泣きの涙でこの萩へお引越になられ、そのついでに前御領地であつた、広島や岡山あたりの人達から、明年度分の税金までも御取立てになり、スズシイお顔をしておられた程の御家柄だし、それ程の「チャツカリ屋」のお家柄のお殿様が、この萩へお見切りをつけられて、山口へと、文久三年お越し遊ばされた訳だが、その折萩から御同道が出来なかつた「律義者」や「不平分子」どもの多くの方々が相集つて「チャツカリ屋」のお殿様え義理をたて、その御徳？を慕つて、山口へ向つて拝ん



萩城跡

だと言うところから、あの萩城跡のところを「ヨウハイシヨ」と呼ばれていたようであって、その意味からしてもお分りになって頂けるものと思われる。即ち萩にはモトモト、お偉い人物になれるような「不都合」な者は居られなかったと言う証明にもなりそうだ。

ところで戦後、お城の「復元ブーム」に乗って、この萩でも萩城復元の話が出たことがある。ところが萩の一部の文化人？と称せられている集りは、早速に「萩城復元反対」の声明が出されたが、その理由の一つに「郷土の先輩の意志を汲んで云々」と言う項目があったようだが、よく調べてみると、実際にはお殿様はこの萩から、文久三年には山口へ引越しておられ、山口にあつて、あき屋の萩城の維持に困られ、それにこのあき屋の萩城が、度々の「不平のヤカラ」の拠点に使われ、ホトホトとお困りになっておられたお殿様は、明治四年の「廃藩置県」で大義明分をたてられ、大阪商人へ安い値段（明治六年十二月萩城が公売に付され、当時天守閣は千十三円五十銭、櫓や門は七十銭から七、八円であった。）で売りはらい、明治六から七年にかけて解体され、明倫館も「萩の乱」で頭へ来た藩の御重役連中が、今の別院や、海潮寺さんなどへと分散解体され、萩の「不平分子」の拠点をことごとく、無くされたのが本来の理由のようである。従って萩の文化人が言われているような「先輩の意志」とは、一体どちら様の先輩の意志のものかと言ふ疑念が湧いてくる。

してみるとセイセイ不平分子の集りが、萩の町を形づくっていると云った方が確かなようだ。萩が発展しない理由の一つも案外そんな処にあるのかもしれない。従って大宅先生の言葉も「当」を得ているとは言えそうにない。

兎に角萩の名士や文化人と思って居られる方々には、大宅先生が「斯々云々」とか、〇〇大学教授に都市診断をして貰って「どうのこうの」とか、色々取沙汰されているようだが、考えてみると萩の本当の姿を知っている者は、萩で生れ、萩で育った者以外にはないと言うことなのだが、ナカナカ萩の文化人と言う方々には分って貰えないようだ。現に毎年度の萩の中学、高校の卒業生徒が、一体何割萩に残るかと言う現実の方が都会からの文化人の批評や随筆よりも、ヨホド切実である。

又観光の面にしたところで、時折の中央よりの文化人方の御来訪や、帰郷の郷土出身者名士方のお言葉のように、堀内あたりの「破れた土壁」が幾らよいから「ソットしておけ」とか「何時も変っていない」とか言われる無責任な理由が、どこに観光資源としての価値があるのか、と言いたくさえてくる。郷土御出身の名士こそ、御自身でこの萩を結果的には見捨てておきながら「時代から取残された」この萩を、よくも「能々とホメソヤシ」、また都会生活から、たまに逃れて来られた文化人方の、旅のツレツレなるお言葉を「キンカギョクジョウ」のように、言い

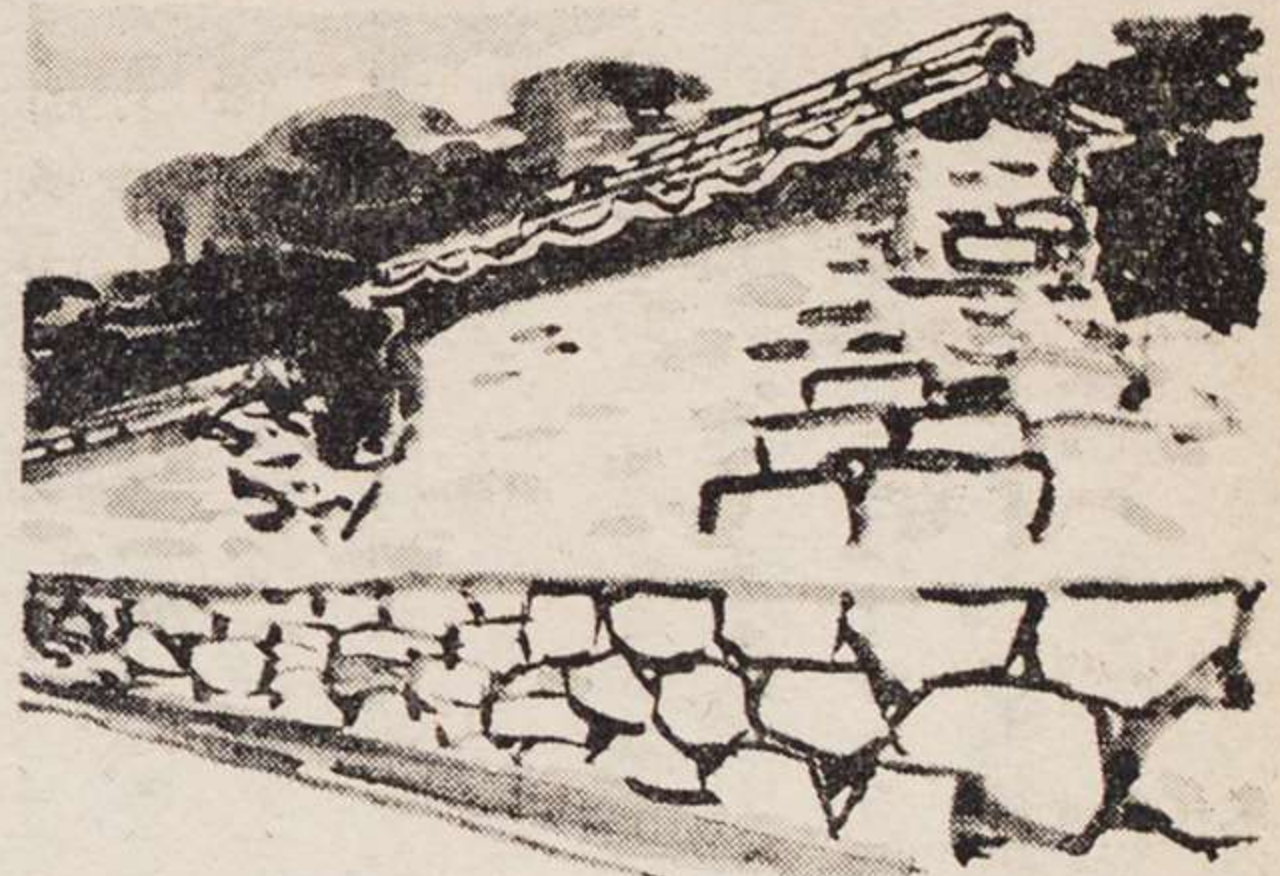
のでなければ、意味がないし、また「地についたもの」とは言えそうにない。ただ中央あたりの文化人や大学教授の方々の御意見も、勿論結構だが、それは何処までも一つの見方としての参考資料以外の何物でもないと言うことを悟るべきだ。

この際、中央の文化人方の御意見を聞いて楽しむような風潮は大いに慎しむべきことではなからうか。裏付けの実行をとまなわなような御意見ならば、寄席や講談のタグイではあるまいし、あえて「謝礼」や「茶、菓子」まで出して、態々聞かなくても、寝ていた方が腹もへらず、その方がはるかに「トク」と言うものだ。

文化とは「人類がもつともよく繁栄する状態を作り出すこと」であると言う意味を、萩の名士や、文化人と言われているような人は、大いに知るべきだ。中央あたりの文化人から「クササレテ」喜んで？いるのが、萩の人のとるべき「道」ではないと言いたい。

追記

○萩城跡——（国指定史跡）萩城跡は萩市の西北隅にあたる指月山の麓にある。城の名は一名指月城とも呼ばれて、平城と山城の利点を併せもつ「平山城」であり、本丸、二の丸、三の丸及び指月山頂に詰丸をもっていた。本丸には高さ一四・五メートルの五層の天守閣があった



崩れかけた築地

そやして居られる萩の人の底の「浅さ」が眼についてくる。

例えば堀内の土壁にかこまれた、萩市立病院の格好なども「フンイキ」を壊す役目にはなっても「古い町、観光の萩」などと言う、萩市の「キャッチフレーズ」とは程遠い空文句のような気さえしてくる。

萩の「オエライ？」方々も、たまには倉敷あたりの、あの昔の建築様式を取入れられた「オクラ作り」による一つの町の「フンイキ」をカモシ出している町の姿などを観られ、倉敷あたりの文化人の爪の「アカ」でもセンジてのんで貰いたいものだと言いたくなってくる。

御存知のように、明治の御維新にしても、伊藤公その他の郷土の御先輩の方々が、当時の古い制度や機構の改革をされたからこそ、進歩発展をしたものであって、昔の「哀れさをとどめる姿」が、この萩にある限り、萩の発展の姿はあり得ないと言うことを知るべきではなからうか。従って、どこまでも、萩の発展は萩に生れ、萩という環境の中に育った者だけが、考え作り出すも

が、今はその台座のみが残っている。周囲には土塁を築き、土塁上には塀を廻らし、要所には矢倉が建っていた。

萩城は近世の初頭に防長二国の領主毛利輝元が築造した。毛利氏は関ヶ原戦に西方に加って敗れた結果、これまでの八国領有から二国に減封され、徳川氏の江戸幕府からこの萩指月山麓に築城することを許されて、慶長九年（一六〇四）に建設に着工、四年後の慶長十三年に竣工をみたものである。以来代を重ねること十三代、敬親に至って幕末多端の国事を処理するに不便であることから、文久三年（一八六三）四月藩府を山口に移した。

明治六年（一八七三）に萩城払下令が下り、翌年すべてが解体払下げられて、今日では、土塁石垣と堀のほか、庭園の一部が残っているに過ぎないが、二の丸には銃眼を有する土塀も残存しているし、往時の広大な城郭の規模を知るに充分である。

この萩城跡は二五九年間防長二国の政治の中心であり、幕末には、討幕に大きな役割を果した萩藩の拠点であったもので、極めて意義深い史跡である。

## 萩の「かくされキリシタン」の巻

萩の「かくされキリシタン」の巻

関ヶ原の戦以後、毛利のお殿様は徳川家康さんの「鶴の一声」によって、泣き泣きお越しになられたのがこの萩で、いわゆる文化の僻地としての折紙をつけられたようなものである。従って徳川方の眼も届きかねる地域でもあり、そんな意味から案外毛利のお殿様は勿論のこと、そのシモシモの者達にとつても眼にみえない恩恵を浴していた面が、かなりあったようだし、町中にも色々な「ツヤ話」があったと思われるのに、明治維新を境として、チマタの「ツヤ話」などは一切取消されたものか、今では弘法寺境内にある「比翼塚」にまつわるお話以外のお話はトント見当らないようだ。然し萩の町を一步外に出て附近の部落に行くと、これはまた多くの民話があるのだから、三百年間もの長きにわたった萩の歴史の中で、民話の残っていないのが不思議な位である。つまり明治の維新は下級武士だけが天下を取ったようなものだから、これを機にして萩の町は「修身の教材都市」となったと言う外はないようだ。

兎に角、徳川家康さんから「ニラマレ」て僻地指定をうけたような町であるだけに、この萩の町には全国的にみられて、ゴク珍らしく萩の民話と共に「明治維新がくれ」をしたものの一つに「かくれキリシタン」がある。

大体キリスト教なるものは、天文十八年ポルトガル人フランシスコ・ザビエル様が鹿児島へ上陸され、初めてキリスト教なるものを伝え、それより同教は「燎原の火」の如く全国に伝導されて、近江の国は安土に、ザビエルの塔で既に御存知の周防の国の山口に、また豊後の府内、京都などには寺院、会堂、学校などが出来上り、全国の信徒は数十万と数えられたと言われている。ところがその後、豊臣秀吉は天正十五年にキリスト教を禁じ、教会堂を焼くなどの事件がアチラコチラで起ったが、世の中はまさに徳川方と豊臣方との二つに分かれてのイザコザの最中であり皮肉なことに、大阪の冬、夏両陣にはキリスト教徒が大坂方に加担した模様である。従って大阪方のキレモノ師、石田三成ダンナにナビカれておられた毛利のお殿様は、関ヶ原へと駒を進められたのだが、時すでに利あらず、それ以後徳川さん方から「ニラマレ」中国地方全域の領地をケズラレ、周防長門の国へと仕方なしにお引きこもりとられたのだから、毛利のお殿様つまり毛利輝元公が萩城築城をなされた当時には、大阪の陣の「附録」がついており、この萩藩士の内にも可成り多くのキリスト教信者があったのに違いないと考えられてくる。

その証拠にこの萩には「かくれキリシタン」に関係した「キリシタン燈籠」、「キリシタン信者の墓碑」、「キリシタン瓦」それに「キリシタンほころ」など可成りの数のものが現存しているのだから、この事実を広く天下に明らかにする必要があるのではなからうか、そうすることが新しい意味での萩の姿を観て貰うことにもなり、徳川末期まで文化の中心から離れ、その上山陰特有の環境としての萩だけに芽ばえ育つことの出来た、これらの事実を「かくれキリシタン」と言う「陰」にも通ずる生活をも意味し、ヒソカに信じ愛されていたと思われる「キリシタン燈籠」の姿にも、やるせない「萩オンナ」の心情にも似たものが浮んでくるようだ。

兎角「かくれキリシタン」と言うと、九州は長崎の離れ小島か、天草あたりの専売特許のように宣伝されて、しかも観光材料とまでにあいなっているのに、この萩では、この「かくれキリシタン」のことさえ知られていないようであるから変である。考えてみるとこの萩では「かくれキリシタン」なるものは「修身的教材用」物語ではないとの「ラク印」を押され、「かくされキリシタン」とあいなったように思われて



キリシタン燈籠 (上田家)



くる。

モトモトこの「キリシタン燈籠」なるものは、千利休の門下で、後には徳川將軍家の御師範役とまでなられた、かの古田織部タンナがデザインされた燈籠であって、一名「織部燈籠」とも言われるもので、この古田織部タンナは天正元年、キリシタンの洗礼をうけられ、教名をフランシスコと称された程の方である。従って織部タンナが手がけられた茶席、庭園などの中には、己が信念を表象し、宗教儀式に利用出来るように案出されていたものが可成りあったようで、その一例がこの「キリシタン燈籠」である。(三田元鐘著・切支丹伝承による)

然しこの「キリシタン燈籠」は全国的にも大変少ないものとされているが、この燈籠が現在萩に残存しているものは、善福寺門内、弘法寺庫裡前の庭、鶴江台観音堂前、享徳寺内、魚棚熊谷家、西田町上田陶器店の庭、江向津田等氏宅、それに蓮池院門内の八ヶ所もあり、この山陰の萩の田舎町にしては少し多すぎるようだ。

ところで善福寺のものは元萩城内宮崎八幡神社附近にあったものを、同所に在った観音堂と共に明治三十八年頃に、現在の所へ移されたものであると言われている。尚熊谷、上田両家のものは形がよく整っているようだ。これらのものがどのようにして、この萩に残されたのかという点とだが、思えば豊臣秀吉の禁止令に引き続いて、天草四郎による島原の乱でキリスト教なるもの

は姿を断ち、地にもぐり、ホソボソながら長崎あたりで信仰されていたと思われるのだが、実はこの萩の町でも徳川方の眼の届きかねる環境だけに、案外温存されてヒソカに信仰が続けられていたのではないかとも思われ、「キリシタン燈籠」なるものも、実はその証拠でもあるようだ。

またこの「キリシタン燈籠」の外、萩城址の詰丸、東門、南門址にてソレゾレ採拾された瓦の中にも多数の「十字架紋」の刻印を有する「キリシタン瓦」が沢山にあり、今では萩の博物館に展示してあるのだが、これらのことをもさきの「キリシタン燈籠」以上に萩のお方は御存知ないようだ。

つまり萩城築城に当って、一大事件であった、かの熊谷元直、天野元信両氏による「五郎太石事件」に端を発して、イザコザが起り、熊谷、天野一族十一名は刑をうけてはいるが、実はその理由は表面上キリスト教信徒であったからとも言われている。このように熊谷元直は築城の総宰をしていた者であり、この外にも同様キリシタン信徒の藩士も多数にいたものと思われる関係から、同教信徒であった当時の瓦師などが遠慮なく、自己の信念たる紋章を瓦に刻し得たことは想像に難くはない。

またこのほかで実に以外なことは、元禄年間に出来た毛利のお殿様のお菩提寺、つまり黄檗宗、

この外長寿寺の墓地には、それらしき墓碑の二基が現在もあり、目印のようにイチヨウの樹がソレゾレの側に植えてある。

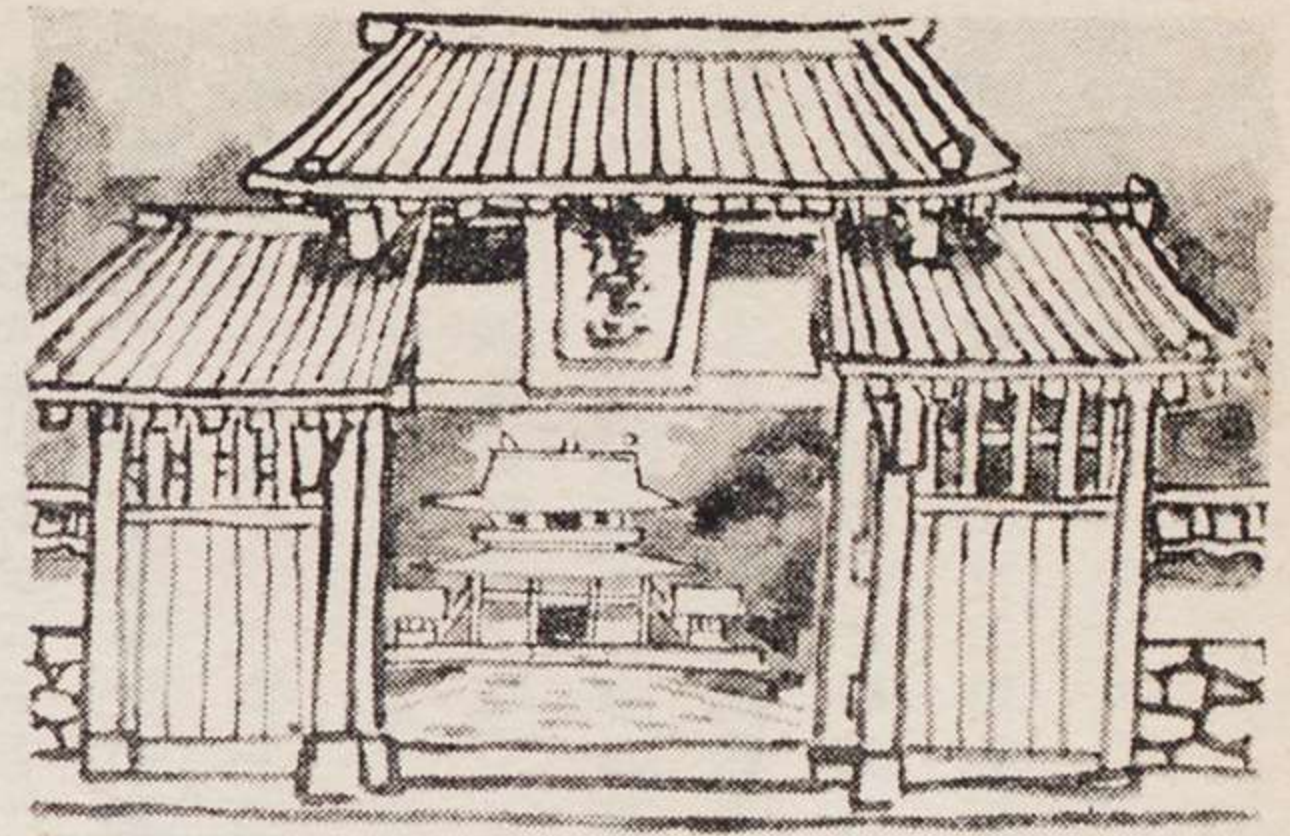
また堀内の堀本家の庭の隅にある「ホコラ」も石の扉を少し開けば、十字架になるようになっていたものなど、この萩には「かくれキリシタン」に関係していたものと思われるものが可成りあるようだ。考えてみると明治維新の頃まで、ヒソカニこの萩では比較的中流以上の社会で、日陰者の「オンナ」ではないが「キリシタン信者」が相当数居たものであるようだ。

最近中国地方総合開発の計画も進み、陰陽連絡の道路も着々と工事が進んでいるようだが、この際「維新がくれ」したと思われる「かくれキリシタン」のことにもあわせて「陽」の目をみせてやりたいものだ。

追記

○弘法寺の「比翼塚」伝説——この話は、萩のお城にまつわるもので、萩の話と言えば、維新の折の立役者だけの幕末の秘話が多いが、その中で恋の伝説が一つだけ伝わっており、これが「比翼塚」の伝説であり、一名「夫婦塚」とも言われている。

即ちある藩主の時、藩主の愛妾つまり側室さんが美男の小姓と恋に落ちたが、そのことが発



護国山東光寺総門

護国山、東光寺の三門（さんもん）と読み、文化十一年に竣工される（の屋根は西南にあたる「破風瓦」の中にも、ハッキリとキリスト教のラテン・クロスの紋章が入っていたと言ふことだ。考えてみると、この毛利のお殿様の菩提寺、東光寺なるものは、寺社奉行か、お殿様以外は手の届かなかった。言わば「治外法権」地域であり、方丈（ほうじょう）のもとに僧侶八十人を数えた程の大寺院であっただけに、案外その中に「キリシタン信者」がおり、ヒソカニ菩提寺の「ミノ」にかくれて信仰を続けていた者が居ったのではないかとも思われてくる。即ちこの三門の破風瓦の外に、東光寺墓地の中にあつた、大きな椋の木には一尺程の十字架が彫りつけてあり、当時（幕末の頃）「ヤソの木」として、チマタでは噂されていたようで、このことが明治維新後萩へ布教に来ていたピリヨン神父による「山口公教報」にも載っていると言ふことである。

その椋の木は明治の初期伐られ、東光寺の大雄宝殿、左側のシユミダンの腰板に使用され現在に至っていると言ふことだ。

覚し、そのためその小姓は萩沖の小島（今の大島であると言ふ説もある）へ流されたが、その側室さんはお城の本丸に幽閉されてしまった。ところが夜になると、その二人の者は共に灯でもって合図をし、語りあっていたのだが、ある夜のこと、島の灯が消えたので、悲しみのあまりその側室さんは海へと身を投げて死んでしまった。すると不思議にもその小姓と側室さんの二人は「へび」のように巻きついたまま、城外「苗ヶ浜」にうちあげられたので、この二人の霊を祠って、弘法寺境内に塚を立てたと言ふものだ。

### 死に「バナ」を咲かせたの巻

死に「バナ」を咲かせたの巻

萩での大先輩はと、人から聞かれると、萩の人は版を捺したように、それは「吉田松陰先生」ですと答えるのが常のようだ。それでは吉田松陰先生は、どんな事をなされたお方ですか、と問われると、これも前と同様、決ったように、松陰先生のお弟子さん方の「オチカラ」によって、明治維新の回天がなされたものだから、吉田松陰先生はお偉いのです、とオツシヤル。まア質問も大抵の場合、そんなあたりで止ってしまふものだから、問われる方もヤレヤレと言ふことで、ヒタイの汗を拭いて終るのだが、質問をする方でも、意地の悪い人ともなると、「それでは吉田松陰先生は、具体的にはどんな事をなされたのですか？」と問われると大変である。すると答える方でも別に考えることもなく「国の禁をおかして、伊豆の下田から外国艦に乗込もうとされた」と、これも小さい時から、学校で教わった通りに答えれば、義理が済んだような顔付きになられる。ところがこの事をよくよく考えてみると、幾ら外国事情を調査し外国文化を研究する

意味であったとしても、「国法をおかしたこと」が、それ程天下に威張れることなのだろうかと言ふことになる、チョット、オカシなものとなってくる。

大体松陰先生は最初の答のように、お弟子さん方の「オコナイ」によって逆に計算され、善意で先生の生涯が作られたようにも思われないフシもない。つまり松陰先生の幼少の頃のお話を聞いていると、「二宮尊徳」先生のお話と余りにも似ていると言ふことであり、ただ違っている点は「尊徳」先生の方は、「シバ」を背負って本を読んで居られるのに対して、松陰先生の方は「ダイガラ」でお米をつきながら読書をなされたと言ふ点だけが違っていると言ふだけであるようだ。即ちその後五十年ばかりの間に、松陰先生を祭りあげるために、修身の教科書の中における大先輩格の二宮尊徳先生をお手本にされ、脚色されて「吉田松陰伝」なるものが作成されたのではないかとさえ、考えられないこともない。然し明治維新の回天の業は実際には松陰先生御門下の方々によって行なわれたのだから、さしずめ松陰先生はよいお弟子さん方をお持ちになられたことは確かであって、松陰先生は毛利のお殿様より五十石ばかりの禄高を貰われ、北浦海岸視察の公用出張は一回限りで、その他はシタイホウタイ、イイタイホウタイ？で全国各地を遊歴され、見聞を広められ、萩へ帰られては先生御実家の杉家お預けの身となられた松陰先生は、三年たらずの間にお弟子さん方を教育され、松陰先生の「理想」を説かれてお弟子さん方を示唆、煽

動をされたのだから、今の世の中にあてはめてみれば、さしずめ大学生あたりで授業料や生活費までも親の「スネ」をカジリ、生活がある意味で保証されているものだから、政治に首をつっこみ、スキ、カッテをして、世の中の常識家から批判を受けている「全学連」の学生の皆さん方と大変その立場が似ており、これ等の点を考え合せてみると、ナントナク吉田松陰先生は、全学連の大先輩格と言ふことにもなりそうである。然も余り知られていないことだが、松陰先生は嘉永四年、許可なく東北遊歴に出発されたものだから、このことが時のお殿様のお耳に入り、松陰先生亡命の罪を以って士藩を削られ、実家にお預けとなられたことさえあり、今の学生さんが勉強に身が入らず、余りに政治に打込みすぎるものだから、親から送金がとだえると言つたタグイと大変に相似した点のあることもオモシロイ。

兎に角松陰先生をかくも修身の教科書から抜け出したようにまで脚色される「足ガカリ」となったのは、前にもふれたように、ナント言つてもお弟子さん方の功績であり、然もそのお弟子さん方をして、あれほどまでに「名声」を高められ



幼少の頃の二宮尊徳先生

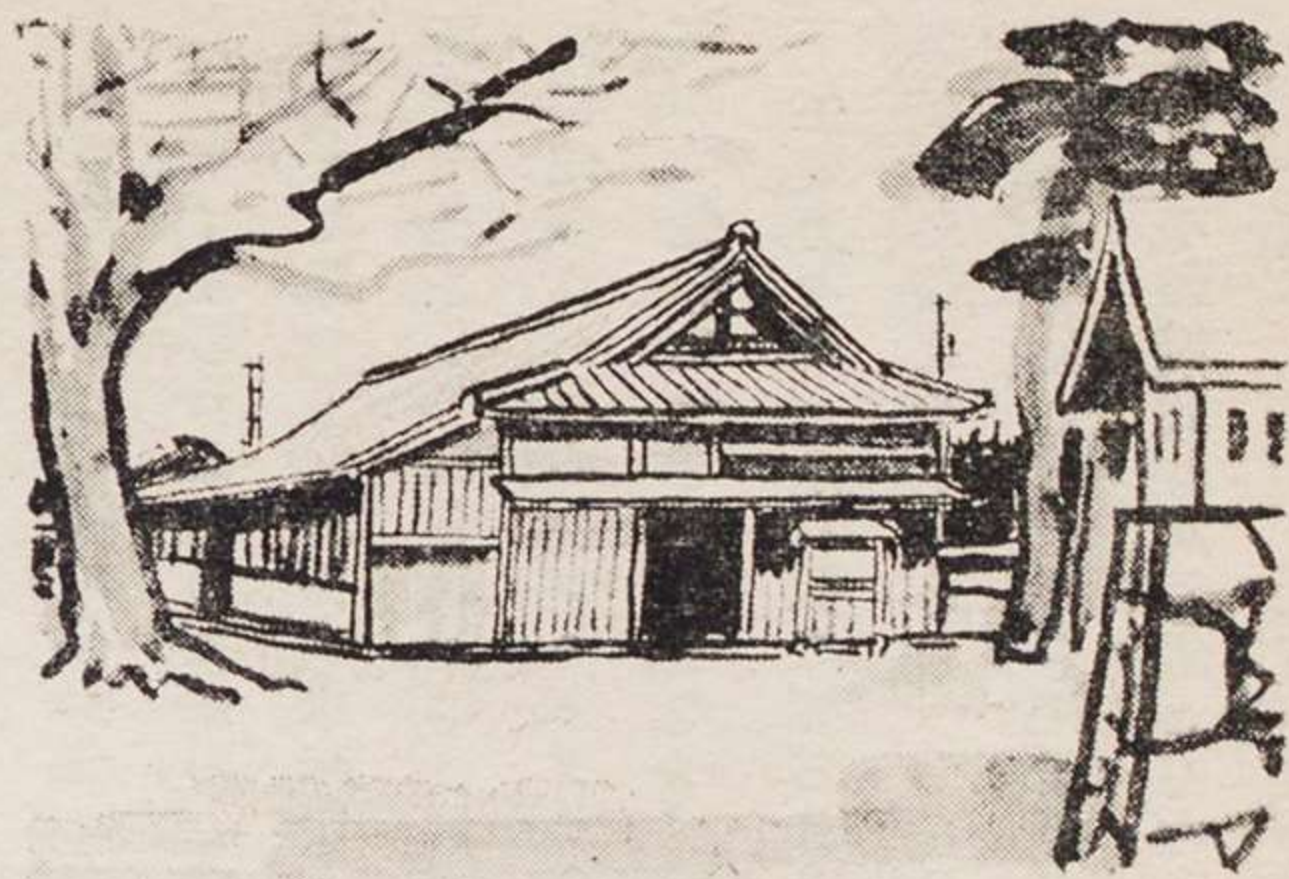
たのは実のところ、吉田松陰先生よりも、そのお弟子さんと言われている「高杉晋作」先生であつたのではなからうかと言ふような気がしてならない。即ち松陰先生は大変な御勉強家であり、理想家でもあつたように聞かされていた訳だし、松陰先生が手がけられた「万巻の書」をみても確かに学者であつたと言ふことは、誰しも認めているところではあるが、松陰先生の肖像画をみても分るように、とても三十才の若さで処刑されたお方とは、どうしても思われない。あの肖像画による松陰先生のお顔では、イイトコロ更年期障害的御年令のお方としか見受けられず、そのためとばかりは言えないが、兎に角松陰研究の御専門のお方のお話によつても、不器量な芸者の出番ではないが、一度も嫁ハンのお声が掛らなかつたと言ふほどだし、その上あれほど全国各地をお歩きになられて「ウイタ話」も一つもないとのことだから、松陰先生は世の中の「女にはトント御縁がなかつたと言ふことだ、勿論あの肖像画によるお顔ではモテそうではないかもしれぬが、若しそうであつたとするならば、女にさえモテなかつたお方が、なぜにあのお弟子さん方に、短かい三年たらずの然も正式にお殿様より御許可が出ての御教育はホンノ五ヶ月ばかりの間なのに、あれだけの感化力をお与えになられたのかと、不思議にさえなつて来る。

大体世の中の間人どもというものは、たとえ理屈では「スジ」が通つていたとしても、それだけではナカナカ承服出来るものではないのが「常」のようだし、女にもモテない程のお人が、男

同志とは言え、天下の大事業をなしうるほどの「チカラ」を植えつけることが出来るものかどうかと言ふことは大きな疑問であるようだ。

ところが松陰先生のお弟子さん方はどうかと言ふと、松陰先生とは正反対で、女にかけては「ツワモノ」ばかりであつたようにモレウケタマワつてゐるし、そのお弟子さんの中のお一人の伊藤春樹などは、後に公爵とまでなられたお方で、余りにも生前、女を「イツクシミ、オカワイガリ」すぎられたものだから、今はなきこのウツツヨでは、その「オトク？」をしたわれ、公の長すぎた鼻の下をかくす意味のものでもあるまいが、白いクチヒゲまでもたくわえられたお姿で新千円札として御登場遊ばされ、女の「キンチャク」の奥深くで温めて愛される、お立場とまでに相成られた程の「ゴキトク」な御仁の「ゴイトク」がウカガエルようである。大体今でもそうだが「優等生」と言ふものは、歩き方まで先生に似るものだと言われているのだが、松陰の御門下生の方々は、余り似て居られるようには思われなし、「ユウトウセイ」の字が違うのではないかとさえ言えそうである。

即ち松陰先生とお弟子さん方とでは可成りに、その性格が異ると言ふ疑問が生れてくるほどだ。その疑問を解く鍵ともなるのは、ナント言つても高杉晋作先生にあるのではないかと言ふような気がしてきて仕方がない。



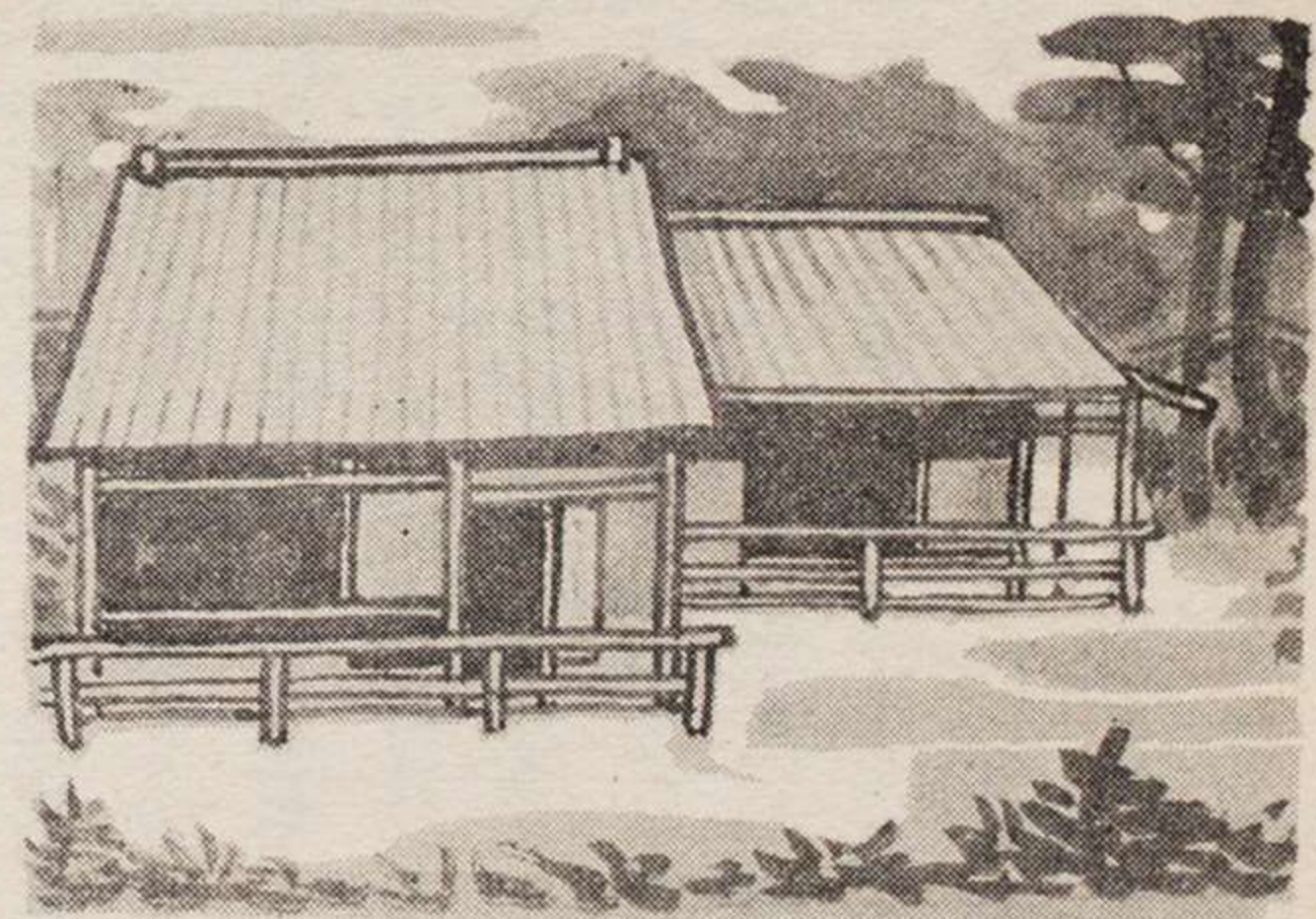
旧明倫館（有備館）

即ち高杉先生の家柄は、松陰先生のお宅の禄高の約五十石よりも遙かに多く、二百石もの高禄であり、然も高杉先生のお父さんの小忠太と言われる方は、毛利藩の撫育局、越荷方なるお役所の用務掛をして居られ、今で言えば、特別会計による銀行の責任者のような役で、財政の面では可成りの発言力をお持ちだったようである。その上高杉先生は松陰先生のお弟子さんとは言え、他の松陰門下生とは立場が異なり、高杉先生、オン年十九才の折、明倫館での居寮生の時、当時の明倫館の師範、山県半七、号を太華と称する先生、つまり現在での大学校級の教授にあたる先生の講議を一切うけられず、そのため明倫館を退学？いな現在で言う退校処分のような状態で、明倫館を辞され、それから志を同じくする勤皇派であった松下村塾に御入学なされたのが御縁のツナガリのようなだから、他の村塾でのお弟子さんとは、その立場が違っていたのではないかと言うような気がしてならない。

考えてみると、その御入学は安政四年の頃だから、全国的にみても明倫館の如き藩校なるもの

は、水戸と岡山、それにこの毛利藩の明倫館の三校のみなのだから、明治、大正の頃の帝国大学級以上の存在であったようだし、その明倫館なるものは、今から考えられているような、誰でもが入学出来るような学校ではなく、武士は武士でも、毛利のお殿様より拝領の禄高、つまり当時の俸給表によって、その入学資格が定められていたのだから、吾々平民どもが、今の明倫小学校へ入学するような積りでいたものなら、大変な間違いである。つまり当時としては、全国的にみて、その格調高き明倫館から、私立学校以下の寺子屋に毛の生えたような、御存知のオソマツな松下村塾に、高杉先生は御入学になったのだから、オドロキである。その当時、下級武士である足軽どもの子郎党は、お金持ちの御坊ちゃんに、少しでも「アヤカリ」利用してやろうなんて、お気持ちになられるのは、今も昔も同じことであつたらうと思われてくる。その上高杉坊ちゃんは、名の知れた「ジラモノ」と来ているのだから、高杉坊ちゃんのとについて歩けば、この萩の城下町をも「肩で風を切つて」歩けたと言うもので、当時の制度で押えつけられ続けて来た、足軽の子郎党どもにとつては、まさに高杉坊ちゃんこそは一つの大きな羨望のマトであつたと言えそうである。即ち松下村塾のお弟子さん方が明治維新の原動力となられた、その所以は松陰先生ではなくて、むしろ高杉坊ちゃんの影響によるものであるようだ、言いかえれば高杉坊ちゃん

の気位の高さが、そのお弟子さん方にまでも「連鎖反応」を起し、その時代が時代であつただけ



松下村塾

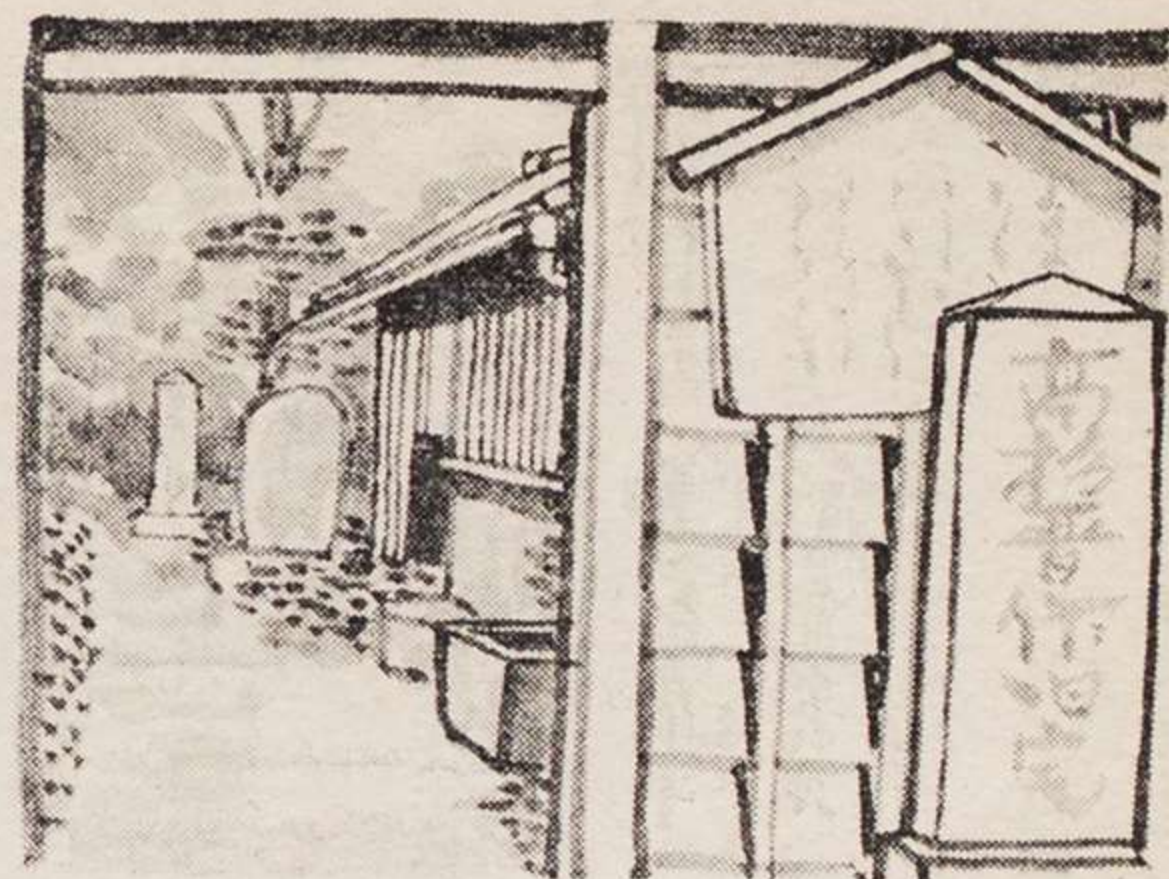
に、行きつく所まで行ってみると、明治維新と言う名の革命が行われてしまったと言うだけの話であるようだ。それが証拠に、前にものべたように、松下村塾のお弟子さん方のタイプは、吉田松陰先生バリのものではなくて人間クサイ高杉晋作先生バリのタイプであったと言うことをみてもそのことがハッキリとするのではなからうかと言うことだ。然しそれ等のお弟子さん方は、世が変わり、明治も以後ともなり、夫々に立身、御出世なされると、成り上り者の常として、なんとか各自の位置付けをしなくてはならなくなつたものだから、考えられたスエ、毛利のお殿様や御家老様方には「ヒガミ」はあつても義理はないしと言うことで、自分達の先生、つまり吉田松陰先生を祭りあげ、その結果が「二宮尊徳」先生バリの吉田松陰先生と相なられたのではなかつたかと言う疑問である。

即ち貧乏人のセクト主義的考え方が今の松陰先生を生んだとも言えそうである。してみると松陰先生もサゾヤあので御窮屈な思いをなさつて居られるような気がして来て、ナンダカお気毒

にさえ思われて来る。

ところで話の本筋に入るとして、明治維新の実際の原動力と相成られた高杉晋作先生は、天保十年八月二十日に萩の菊屋横丁の実家で誕生、亡くなられたのが慶応三年四月十四日のことだから、数え年の二十九才、つまり今のマッカーサー年令なるもので計算すると、二十七才と七カ月と言うことになるのだから、ナントお若いお年で亡くなられたものだと言うことになる。それにして、その短かい歳月の間なのに、高杉先生の行状たるや、普通の人間どもものすることとは問題にならない程の「波瀾万丈」<sup>ハッパン</sup>さであり、その行状は今更ら言う程のものでもないかも知れないが、案外萩のお方は松陰先生以上に、この高杉先生のことについての精しいことは御存知ないようだから、その行状を追ってみるとナカナ面白い。

即ち当時は、現代とは違った意味での変動期であつたことには違いないのだが、それにしてもあの当時、上海にまでも見聞を広められに行かれ、帰国されるや九回にも及んだ退藩脱走、そして全国各地に特殊潜航艇以上に潜行されて、至るところで「アソバレ？」て公金消費の御実績は分っているものだけでも、金四千両二分（今のお金に換算すれば約七千二百万円となる）にも及んで居るのだから愉快である。即ち高杉先生の御生涯は「テッポウ」と「オフネ」には特に御縁



高杉晋作旧宅

がおありのようであつて、かつて家老の長井雅楽による官武周旋、つまり幕府と朝廷の取持ち役に反対されるや、高杉先生の氣質をよく御存知の桂小五郎先生、早速に「手」をうたれ、高杉先生に外国の形勢でもみせて「アタマ」をヒヤシて来てはと言うことが、ソモソモ「テッポウ」と「オフネ」の御縁のハジマリのものである。考えてみると桂小五郎先生もナカナカ「ツミなお方」でもあつたようだ。

兎に角文久二年の正月二日、高杉先生オン年二十四才の折幕府使節のお供をして、上海行きと相なつた次第だが、上海での見聞から「舟」と「鉄砲」の必要性を感じられ、御自身の「テッポウ」の使い方も覚えられ、勇躍帰国されるや、長崎にて早速にオランダと、お殿様には無断で蒸汽船と言う名の「オフネ」の購入方を注文、ついで多数の「鉄砲」を購入され、同年八月二十七日には早速に藩邸を脱走、高杉先生その理由についてイワク、今のような御時勢では、お殿様の御小姓役ぐらゐで愚図愚図しては、御自身の「テッポウ」もサビて無駄になるとばかりに思われたのか、天下の素浪人と相成られたと言う

仕末。ところが文久三年の五月、馬関にて外国船打払いの攘夷の線にそつた、毛利藩の行為の報復手段に來た仏艦二隻は、六月五日に馬関を襲撃、毛利藩の発亥丸、庚申丸の二隻は撃沈馬関の砲台はベチャンコとされ、アワテタ毛利藩の御重役方は「フネとテッポウ」のことならば、先ずは高杉先生を、とばかりに、早速に時の藩邸山口へと、脱藩しておられた高杉先生を探しまわし、急に御用召と相なられ、無理矢理に馬関防禦の任につかせられる仕儀と相成つたのが高杉先生オン年二十五才である。ところで高杉先生早速に入江九一なる松陰門下生と相計られ、馬関の防備のために毛利の正兵（家老八家がこれを統轄）に対し、奇兵隊を新しく組織された訳だが、高杉先生モトモトシラウマの素質だつた精か、家老方による正兵方とはウマが合う訳もなく、士族による撰鋒隊と、最近の交通事故ではないが衝突し、奇兵隊は馬関より小郡の秋穂へと転陣させられ、高杉先生これまた政務役並に奇兵隊総督をクビになられたのだから、高杉先生の二十五才の青春は正に多難である。

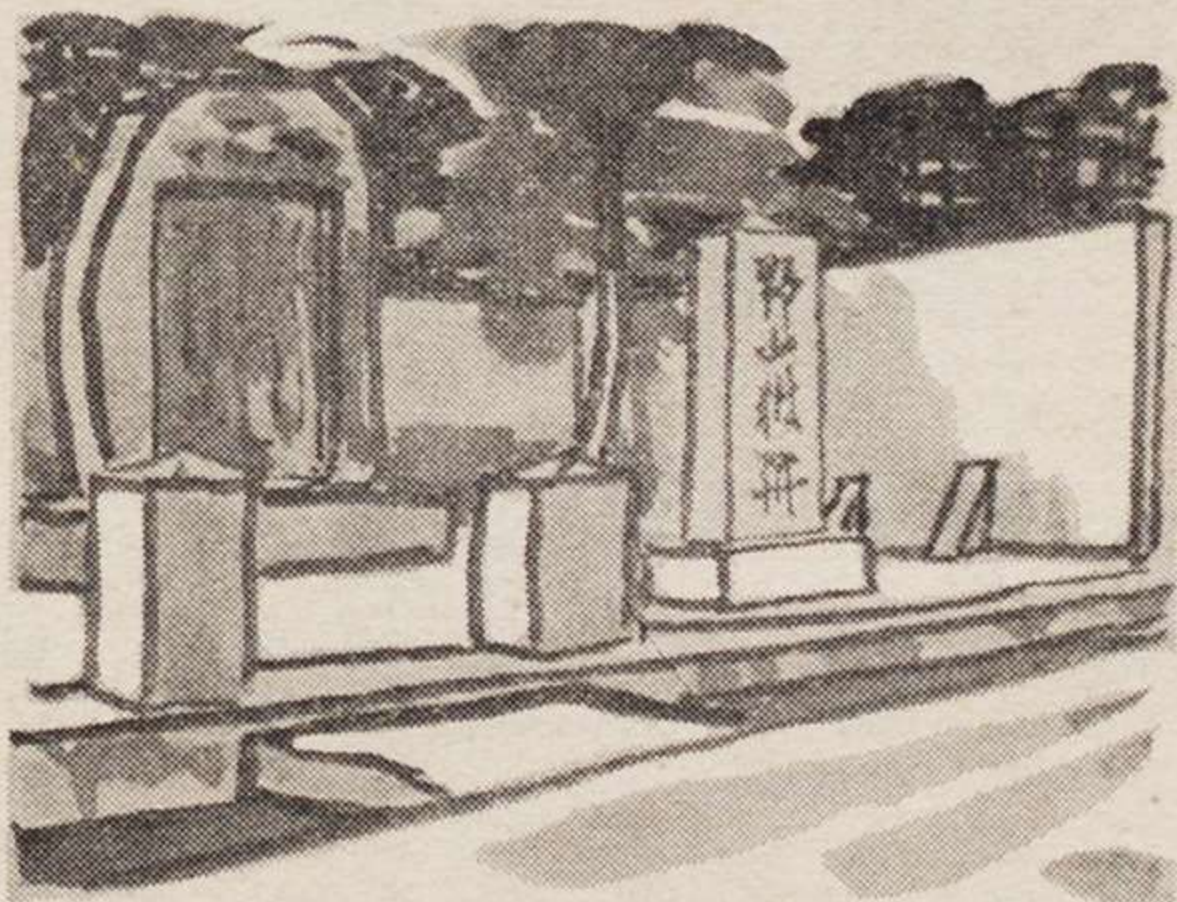
それから後も脱藩、「クビ」、そして急な「お召かかえ」の連続である。元治元年の正月早々などは、正兵遊撃隊の屯所である今の防府市宮市で来島某と会い、君命を伝えた末、激論となるや、来島某より「新知百六十石のために毛利のイヌとなつたのか」とナジラレて、高杉先生このことを腹にスエカネ、禄高百六十石を投出し早速に脱藩、富海から舟で大阪へと行かれた次第。



それから高杉先生を呼び出され、高杉先生をかこんで第三回会談と相成るのだが、その和議で、第一に五郷（三条実美ほかのオクゲさん）を九州五藩に引渡すこと。第二に山口城を破棄すること。第三は大膳父子を寺院に蟄居チャッキョさす、と言うことだけでケリ。考えてみると馬関を一時占領されながら、租借地ともならず、賠償金は時の幕府に押しつけられると言う好条件でケリとなったのも、高杉先生の偉さを物語っているものと思えない。若しもあの時、下関か彦島あたりが租借地にでもなっていたならば、日本の歴史も今とは変わっていたことだろうと思うと、背スジに汗さえにじむような思いである。

その後藩内は俗論派が漸く盛んとなるや、高杉先生は早速に「ニラマレ」、そのため先生は寝巻姿で尻をはしおり、自宅の便所の汚れた手拭きでホオカムリ、それに便所の尻切れ草履をはいてスタコラと、今の金谷天神あたりにあった藩の関所で「我れこそは高杉晋作なり」と大声で名乗り出られたものだから、関所のお役人、目を丸くして、今探し求めている本人が来る訳もあるまいし、先ずは気違いのタグイにちがいないとばかりに、関所を通したと言うことである。その後、山口の町では、神官のマネをされ刀の柄の先きに油壺をさげ、ふところ手をして、井上聞多を見舞い、ついで榎崎弥八郎を訪ねて共に脱藩を奨められたが、なにしろ高杉先生に比ぶれば、石頭の如き御仁ばかりで話にならず、高杉先生は結局一人で三田尻へと向われ、徳山を経て、時

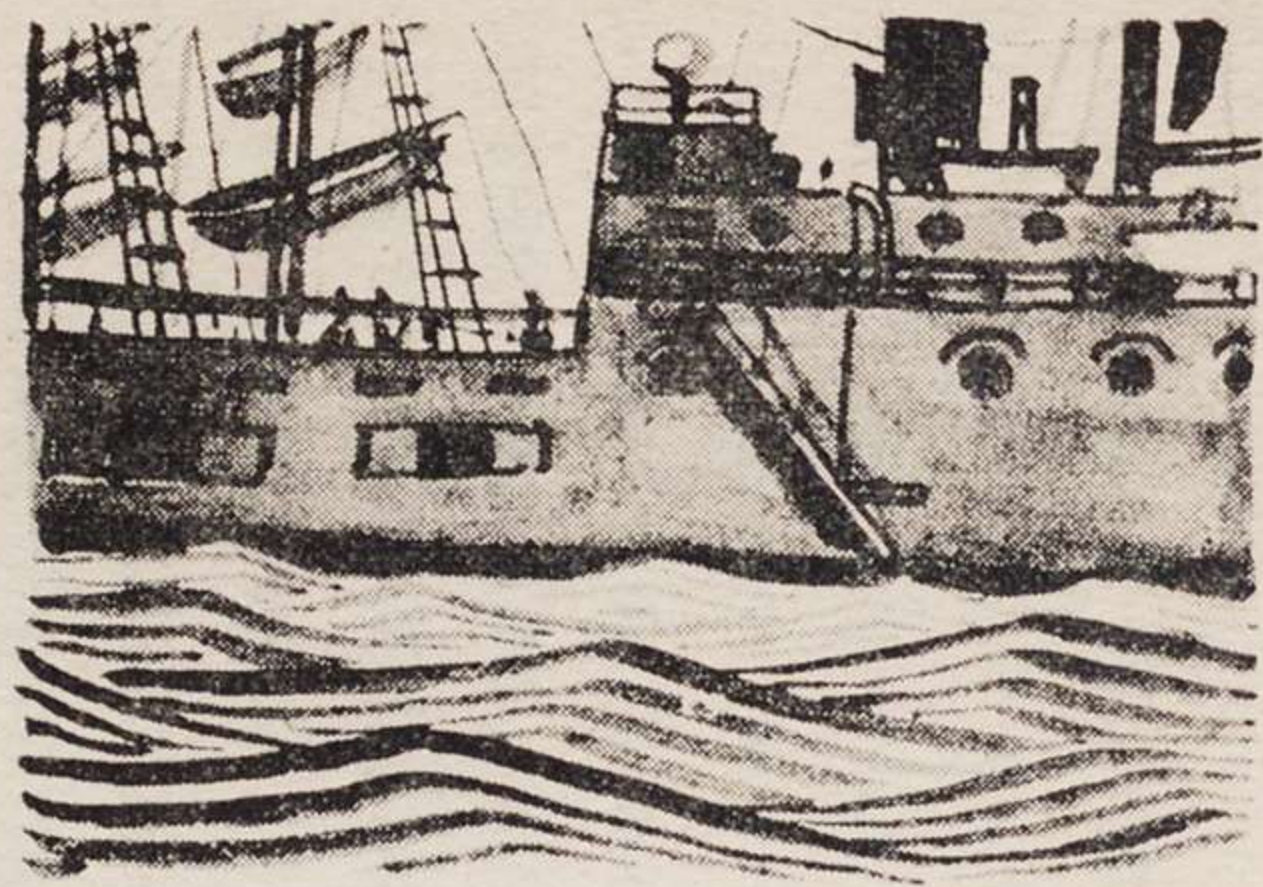
ところが三月二十九日、時の藩公より呼戻され、途中瀬戸内海の港々でアソビアルキ、おつきの者を困らせ、そのあげくのはては金二千両を使い果たし、帰国とともに野山獄に投獄される仕儀と相成られた程である。ところが同年七月、高杉先生にとっては丁度よいことに英、米、仏、蘭の四ヶ国聯合艦隊が馬関へ向けて横浜港を出帆したとの早馬の報が入るや、投獄中の高杉先生早速に山口へと御出頭方を命ぜられ、馬関で開戦となるや、和儀のため高杉先生、伊藤春樹や井上聞多を相引きつれ、全権使節として第一家老、穴戸ケイマの養子、穴戸刑馬ケイマと言うフレコミで、お宮の神主さんより借りた、シヨウゾク、シタタレ姿で第一回会談に御出席、その帰りの途中、今の船木町辺りで、藩の重役連中が高杉先生のお考えとは反対の意見を述べて居る由の話を耳にされ、高杉先生その他クモガグレ、そこであわてた藩公その他の御重役連中、仕方なしに頭を揃えて第二回会談とはなったのだが、聯合軍の方では第一回会談御出席の御仁はどうなされたのかとツメモヨラレ、和議はオナガラ。藩の御重役連中、目を皿の如くにして探し、ヤツトのことで井上聞多を見つけ、



野山獄跡

の奇兵隊長の山県狂介氏（のうちの山県有朋元帥）と会い、色々打合せをした上で、九州へと脱走され、野村望東尼のもとによられたアタリなど、その神出鬼没の程は大東亜戦争当時の特殊潜航艇以上のような。

そこで一時九州でアソバレ、時の至るを待っておられ、慶応元年高杉先生オン年二十七才の折馬関の帰り長府の屯所の友人に会い、兵を借りるように申し入れられたが拒否されたため、馬関へ逆もどり、米倉を焼き、物価の高騰を計算に入れ、一部の兵卒を引きつれて、長府の屯所を夜襲、それから奇兵諸隊をひっさげ、一応山口に本陣を置き、発亥丸を萩沖へ廻送、そして空砲を放ち、俗論党を威嚇され、藩公敬親公を山口へと迎えられ、防長二州の団結を計り、時の幕府に強硬政策をとるための言論を統一、ひそかに坂本竜馬を通じて薩長聯合への道を開き、幕府にそなえて、英国よりユニオン号（のちに乙丑号と改名）を購入、慶応二年英国と正式に三田尻沖で手を握られ、一応総ての準備が出来たものだから、その上で上海での「フネ」と「テッポウ」の味が忘れられず、英気を養う積りも加わって、再度の上海行きをクワダテ、その洋行費用の金一千五百両の金を藩の御重役方より頂き、それをふところに長崎へと行かれた訳だが、そこは長崎のこと、ツイ、ハメをはずされたかどうかは分らないが、兎に角芸者までも身受けされ、滞留が長すぎ、何時のまにか金一千五百両（今の金に換算して二千六百万円ばかりとなる）の金も費



黒船（オテントサマ号）

いはたし、その上英艦「オテントサマ号」（ナント高杉先生にとつては、うってつけの艦のお名前のような）までもダキコンで、三万九千二百五両二分の舟の代金までも藩公に支払らわせ、ついでに長崎で費った金の千五百両の方も棒引きとされたあたり、高杉先生のカケヒキのうまさ、実にミアゲタものだと言う外はないようだ。

ところがその年の六月、長州征伐ともなるや、高杉先生はマツテマシタとばかりに自ら、さきの「オテンキ屋」ならぬ「オテントサマ号」（のちに両庚丸と改名）と言う「オフネ」に乗り込み、幕艦四隻を大島郡は久賀の沖にて撃破されて面目をたてられ、上海ジコミのお「フネ」の操縦法？並に「テッポウ」？や「タイホウ」？の使い方の「コツ」のウマサなどを御披露になり、今までの御実績の程を証明されたようである。

ところが、同年も八月頃ともなると、上海その他での「テッポウ」の使いすぎがタタリ、それに当時は大正製薬なる会社もなく「サモン」なる薬もない折のことだから、心身過労がコトノホ

カにひどく、遂に馬関で寝つかれると言う結果となり、しばらく静養しておられたが、その後厚狭郡吉田村（現在下関市に合併）の恋人「おうの」さんの里に遷られ、大変美人のウワサの高い「おうの」さんの手厚い看護を受けられたが、そのカイもなく、慶応三年四月十四日のこと「ヨシダ」と言うヒトコトを最期に、二十七才と七ヶ月の御生涯をとじられたと言うことだ。

その後山県狂介、伊藤春樹の御両人は高杉先生の恋人「おうの」さんをネジフセ、病氣の後難を恐れられたかどうかは測り知る由もないが、無理矢理に黒髪をソリ落し、尼さんとし、「おうの」さんのお若い一生をして、生涯を高杉先生の墓守をさせられたと言う話だが、これらのことなどを思い合せると、高杉先生最期のヒトコト「ヨシダ」の意味はナカナカ意味慎重であって、吉田松陰先生の意味なのか、または恋人「おうの」さんの里の意味なのか、それとも高杉先生御自身の「テッポウ」を使いすぎ「フネ」のコギすぎがタタツテしまい、鼻がクエル前に肺病つまり胸の病いで死ねて「ヨシダ」と安心された意味なのかは、高杉先生以外の者には測り知ることが出来ないことだ。それにしてもサテサテ高杉先生は最期まで「アジナお方」であったと言うもので、考え方によれば高杉先生こそ、本当に「シニバナ」を咲かせたと言うことになりそうだ。（かつて高杉先生の命をうけ鉄砲の買いつけに長崎まで出向かれたことのある今はなき梅屋老の話によると、「先生は大変なシモの病いでノオ困っておられたデ」とのことであった）。

## 追記

○高杉晋作の生涯——高杉晋作、名は春風、字は暢夫、号は東行、萩藩士高杉春樹の男である。はじめ明倫館に入り、のち吉田松陰に師事し、久坂元瑞とともに松門の双壁と称されて、学識大いに進み、国事に挺身し衆を抜いた。すなわち長州藩攘夷派中の逸材として、藩命により上海に外国事情を視察し、文久三年の下関外国軍艦攻撃に際しては、わが国最初の庶民出身兵を採用した奇兵隊を組織し、藩命を受け隊長となった。翌元治元年、英、仏、米、蘭、四国艦隊来襲に際し、講和使となって和約締結に成功した。慶応元年、佐幕派による藩の危機にあたり、敢然けっ起してこれを倒して藩論を一定し、幕府軍を迎え撃って長藩を勝利に導くなど、優れた識見と神速果敢な政治的行動は、高く評価されている。慶応三年（一八六八）二十九才で下関に歿した。

なお晋作の父丹治、名は春樹、通称小忠太。藩主斉元、斉広、敬親に近侍として仕え、禄二百石を給されていた。

○高杉晋作旧宅——（市指定文化財）高杉晋作旧宅は南古萩町、通称菊屋横町にあつて、近くには木戸孝允（桂小五郎）の生家があり、萩城三の丸へ通ずる中の総門もほど遠からぬところにある。南北に通ずる菊屋横町の西側に、土塀を以つて仕切った敷地内に、庭園と二四坪の

旧宅がほぼ旧状のまま存している。旧宅は木造瓦葺平家建一棟の家屋で、座敷六畳とつぎの間六畳は、庭に面する東向きの室で、居間数室、立閑、台所などがその西に並んでいる。南側は椽がなく、窓を以って外光を採るようになっていたが、旧態はいくぶん異なったものであったようである。家屋の奥に近時建て増した建物がある。座敷に面する庭には屋敷神があり台所の入口前には井戸があつて、晋作産湯の井戸と称されている。庭内にある晋作の功業を讃える石碑四基は昭和年間の建造である。

○松下村塾——(国指定文化財) 松下村塾は木造瓦葺平家建一五・四坪の小屋で、当初からあつた八畳の一室と、のちに松陰が建築した四畳半一室、三畳二室、土間一坪、中二階付きの部分とがある。南側の土間入口に「松下村塾」の看板がかかっている。この建物はもと杉家地内の小舎であつたものを、松陰が叔父久保五郎右衛門と協力して修理して、八畳一室を松下村塾とし、門弟教育の場所にしたものである。はじめ松陰の伯父玉木文之進が、ここからほど遠くない自宅に松下村塾を開き、ついで久保五郎右衛門これを継承、さらに安政四年(一八五七)十一月五日、二十七才の松陰がこれを継ぎ、松下村塾を主宰することになった。安政五年三月に門人たちの労役によって十畳半増築して現在のような形になった。同年十一月二十六日再入獄されるまで門人の教育がなされた。

## 「税務署」 サマサマの巻

税務署へ足を向けては寝られないの巻

戦後強くなった「モノ」にナイロンの靴下と女があげられている。ところがモトモトこの萩では女は強かったようで、かの「男なら」の一件でもそうだが幕末の頃、男どもが海岸防禦のため馬関その他へ出払って留守ともなると、精力の余った萩の女方は菊ヶ浜一体に砂のドテを作ってお寺のツリガネをその上にならべ、沖を眺めて遙かにシノンダと言う程に強かったようだし、又その昔には、毛利藩財政立なおしの大御所、村田清翁でさえ、木綿の着物をお城の奥女中がたに着せたばかりに、その奥女中がたは木綿の着物ではゴワゴワして、今で言う「ムード」が出ず、「絹ズレのオト」が忘れられず、遂に三回にわたって、奥女中がたから清風翁は「ボイコット」され、城内から追出しを喰わされたと言う村田清風翁のアワレな話など、「ゴウな女」はこの萩の歴史の中には沢山にあるようだ。その萩の女がたの子孫が戦後、今まで以上に強くなったのだから、萩の男族はたまつたものではない。

ところが、戦後この萩には、その女以上に強くなられた方々が出来上ってしまったようだ。しかも当の御本人方にしてみれば、思いつておられ、それが当り前のように考えておられるのだから仕末が尚さら悪い、つまり養子を貰って頭にきている家付き娘御同様、手に追えないシロモノのようだ。テレビの番組ではないが「それは私です」と名乗り出られることは恐らくあるまいし、それは「誰でしょう」と言うことになるのだが、それはナント言っても萩の商店の「オヤジサン」と言うことになりそう。即ちこの萩の田舎町にも戦後脱税？の申し子のように、雨後の竹の子よろしく、商店は軒なみに、御存知のように株式会社になってしまった。ところが、その後次第に年期が入り「ハク」が付き、お客さんの前で店員さんならぬ社員から「社長さん」「専務さん」と「さん」呼ばわりされて「悦」に入っておられるのだから、お客さん方は家付き娘の前の養子さん御同様ミジメなものである。

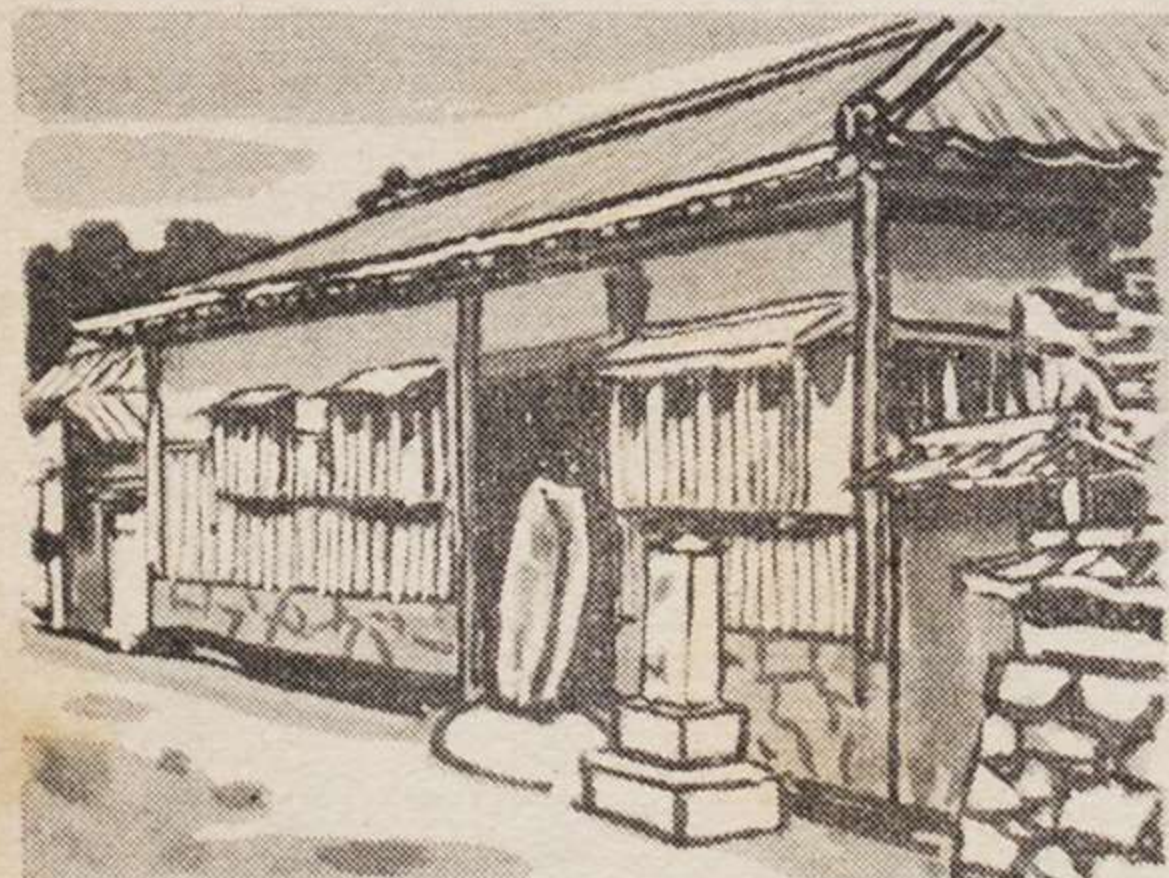
大体お店屋さんと言うものは、モトモトお客さんあつての存在である筈なのに、考えてみるとこちらが物を買わせて頂いているような錯覚さえ起してしまふそうだからタマラナイ。その上に「モウカル」のだから店の「オヤジさん」方にしてみれば「笑いが止まらない」ことだろう。

即ち株式会社の受付ならぬ「店サキ」でお客さん方を前にして社員ならぬ店員さん、大声で「社長さん」「専務さん」と威張って然も平気で呼ぶように御教育をされているのだから見上げた

ものである。然もお客さんがたの方も平気でおられるようだから、これも不思議である。その上上の社長さん、専務さんがたも平然たる態度なのだから、世の中と言うものはオモシロイものだ。もとはと言えばお店屋の主人であり、奥さんであり、またいわゆる番頭さんのタグイの方々ばかりである筈なのに、株式会社と言う御有難きお名前を税務署さん方より御指導の賜ものとして頂戴し、「オヤジさん族」から昇格されて「社長族」とはなられたのだから「頭」にきたものかもしれないようだ。田町筋あたりの「ミセヤ」ならぬ株式会社と言ったところで、タカが多くて十人ばかりの従業員による会社なのだから尚更ら面白い。

最近では頭が高いとの評判である「銀行マン」でさえ、窓口では行員の「さん」呼ばわりはしないのに、小さい「ミセヤ」では、お客さんの前で「社長さん」「専務さん」などと社員ならぬ店員さんがたに言わせ、品物を買わされて、しかも威張られるような御時勢なのだから、萩のお客さんがたも「オメデタイ」限りである。

考えてみると、これと言うのも戦後、税務署さんの暖か



村田清風旧宅

い御指導によるものだ。しかも第一に脱税？が出来、その上お客さんの前で威張られ、そして「モウカル」のだから、今の世にこれほどの「吾が世の春」をオオカ出来る者は、この萩の社長族の外にはおるまい。これが萩の「武士の商法」の現代版なのかもしれないが、「イイキ」なものだと言いたい程だ。

お店屋さんの社長さんを始め奥さんがたをふくめた御重役の方々は、税務署の「方ガク」へは足を向けては寝られませんが、と言いたい。

#### 追記

○村田清風——村田清風は天正三年（一七八三）に大津郡三隊に生れた。資性弘毅、俊爽、経綸の才に富んでいて、藩主毛利斉房より敬親までの五代にわたって歴史した。近侍より累進して樞機に参与し、天保の藩政大改革を推進断行して、文武の奨励（明倫館の移転）、兵制の拡張に尽力し、萩藩が明治維新に大活躍をするための基礎を築いたことはよく知られている。この村田清風の旧宅跡は旧萩城三の丸と外堀とを隔てた平安古満行寺筋にある。この宅を別宅というのは、三隅町にある本宅、いわゆる三隅山荘に対する呼称である。清風が藩政に携わった二五年間の旧宅跡で現在萩市の文化財の指定をうけている。

### 人は「アイマイ」なままでスタートするの巻

人は「アイマイ」なままでスタートするの巻

ある日のこと結婚式によばれて出席した。式はイトモ厳肅にとり行われ、お互いが「オメデタイ」の一色で式も終ってしまった。その式の間中、人の奥さんになれる美人をみている訳にもゆかず、手持ちぶさたなものだから天井を見ながら「結婚」とは一体どんな意味なのかと考えてみた。新婚の御本人同志にとっては初めての式のことなのだから、ウレシサがアタマ？にあがっているので別として、私などは既に三度目の式をあげた程のその道にかけての「ベテラン？」の筈なのに、この結婚と言う意味がナカナカ言葉になって来なかった。そこで早速家に帰り、国語解釈辞典なるものを引いてみた。すると「結婚」とは男女が法的に結ばれて夫婦になること、または婚姻することと言う意味である。考えてみると分ったような分らないような変な気持ちである。そこで次に「夫婦」なる字の意味を引いてみた。すると今度は男女が結婚した状態とあり、これもなんだか釈然としないものだから「婚姻」と言う字も引いてみた。ところが婚姻とは結婚

することと書いてあった。即ち結婚と言う意味は国語解釈事典の中では堂々メグリをしているだけの話で、ナンダカ、ハッキリして来ない。然し現にその結婚と言う意味が分らないままに、その過程を経て、既に子供まである状態にありながら、今日に及んでいると言うことも「オカシナ話」である。

そこで「字源」なる辞典で一字一字を引いてみた。すると「婚」なる字の意味は、モト中国の故事から来ており女が嫁に行くのに当って親方の家を出る折、夕方別れの式を挙げたと言うことで、女がたの家と言う意味であるらしい。また「姻」なる字は女によるところ、即ち夫の家と言う意味のようだ。それで思いあたることは、結婚式場の看板や、案内状の文句に〇〇家と〇〇家の結婚云々と言う意味が呑み込めるようだ。そこでその意味を押し進めてみると、家と家との結びつきのために、若き男女が一緒になるものが結婚式であるということになりそう、そうなることになり、本人同志の愛情と言う点になると第二義的になって、ナンダカ変になって来そうである。即ち悪く言えば愛情と言う点を認めないで、家の結びつきのためにイロケズイタ若い男女を一緒にすると言うことになり、その行為は「ワイセツコウイ」ともなりかねない。そのために友人その他の身のまわりの者達が一堂に会して、お祝いをすると言うことで、マスマス今までの家族制度についての「アイマイ」さがハナについてくる。大体結婚の橋渡し役の仲人の呼びかけからして変

である。即ち娘や息子の親に対し「お宅ではソロソロお年頃だし……」と言う。親は勿論のこと当の御本人までも赤い顔をしながらモジモジと「どうぞ適当なのがありましたならば何分トモニ宜しくお願い致します」と言う次第。言いかえれば「サカリ」の付いたことを、お互いに認め合うのだから「オメデタイ」限りである。そこで次に出て来る言葉がまた面白い。即ち「先方は家柄もよいし云々」と言うことだ。勿論気持ちの上では解らないことはないのだが、一体「家柄」なる言葉がこの世の中で通用していること自体が「アイマイ」である。

昔々のそのまた昔のこと、我が国には文字なるものが大陸から輸入されるまでは「カタリベ」なるモノがあつて、シモジモの者のことは別として「貴族」のことを代々口述によりその記録がなされ、その後文字が大陸より伝わり、使用されるに当って文章となったものであるらしい。そして家の系図なるものが出来、それが一般化したのは、ずっと時代も下った戦国時代の御世と言うことだ。然もその当時から「系図」作りを御商売とされる方があつたと言う話



結婚式風景

もある程だから変なものである。

一般的世評によると、この萩は古い町で、山口県内でも「家柄」のすじがよいとされているようだ。然し一体何が家柄で、何が家筋かと言いたくなる。即ち萩では武家政治の流れが現代に通用でもしているような考え方をしておられるのではないからとさえ思われてくる。然し毛利のお殿様は明治も前の文久三年には、この萩へ見切りをつけ山口へと引き越されているし、その上当時のお偉い顔をしておられた毛利の御重臣方も引きあげになり、山口へお供の出来なかった下ッ端の者たちの子孫たちが萩に残っているだけと言う話になり「家柄」なるもののみかたがアヤシクなってくる。

大体お武家さんの出現の時期と言うものについて考えてみると面白い。即ち武士というものは、考えてみると山賊共の頭目連中が、御出世なされ、当時の貴族の莊園の番犬化された姿がソモソモの始まりのようである。これ等の子分どもの御子孫方が引いては「士族」と相成られたものだと言うだけの話である。又考えてみると「武士は槍一すじに云々」と言う言葉もあるがこれも変な話である。即ち法の維持のためではなく、親分子分の情の維持のための御商売なのだからあまり威張られる御商売でも御身分とでも言えそうにない。ところがその後四百年も経った現在に於ても、そんな下らない「マボロシ」を喰物に、然も生きがいを感じているお方がおられ、そ

れによって自分自身の位置付けをしようなんてお方が吾々現代人のしかもこの萩の人の中に巣喰っているというのも本当に変なものである。

勿論昔からあるものがみんないけないと言うことではない。俗語に「嫁を貰う時は親をみてもらえ」ということがある。これは親が作ってくれた生活環境の中で子供が育ったものだから、親から受けた感化と言うものは、子供たちには自覚以前のものや身に植付けられているという証明にもなるようだ。したがってこれは一つの真理でもあるようだが、これは直接言われているような家柄とは関係はなさそうであり、その親だけの問題であると言えそうである。

また一方では昔から「庄屋は三代続かない」とも言われている。庄屋という程に財をなすお方は、それだけの素質や才能、それにそれだけの生活経験を自ら身につけてはおられるのだから当然のことだろうが、その子の代からは、その子に仮りにそれだけの素質はあったとしても、子供の頃より金持ちの「オトリマキ」連中によってチャホヤされ、折角の素質の目も摘みとられ、成人された暁には、能力や才能はなくなった「馬鹿息子」と言う存在にもなりかねないのが世の中の通例になっていることらしい。

これらの二つの俗語をみても直接「家柄」というものには余り関係はなさそうなものばかりである。

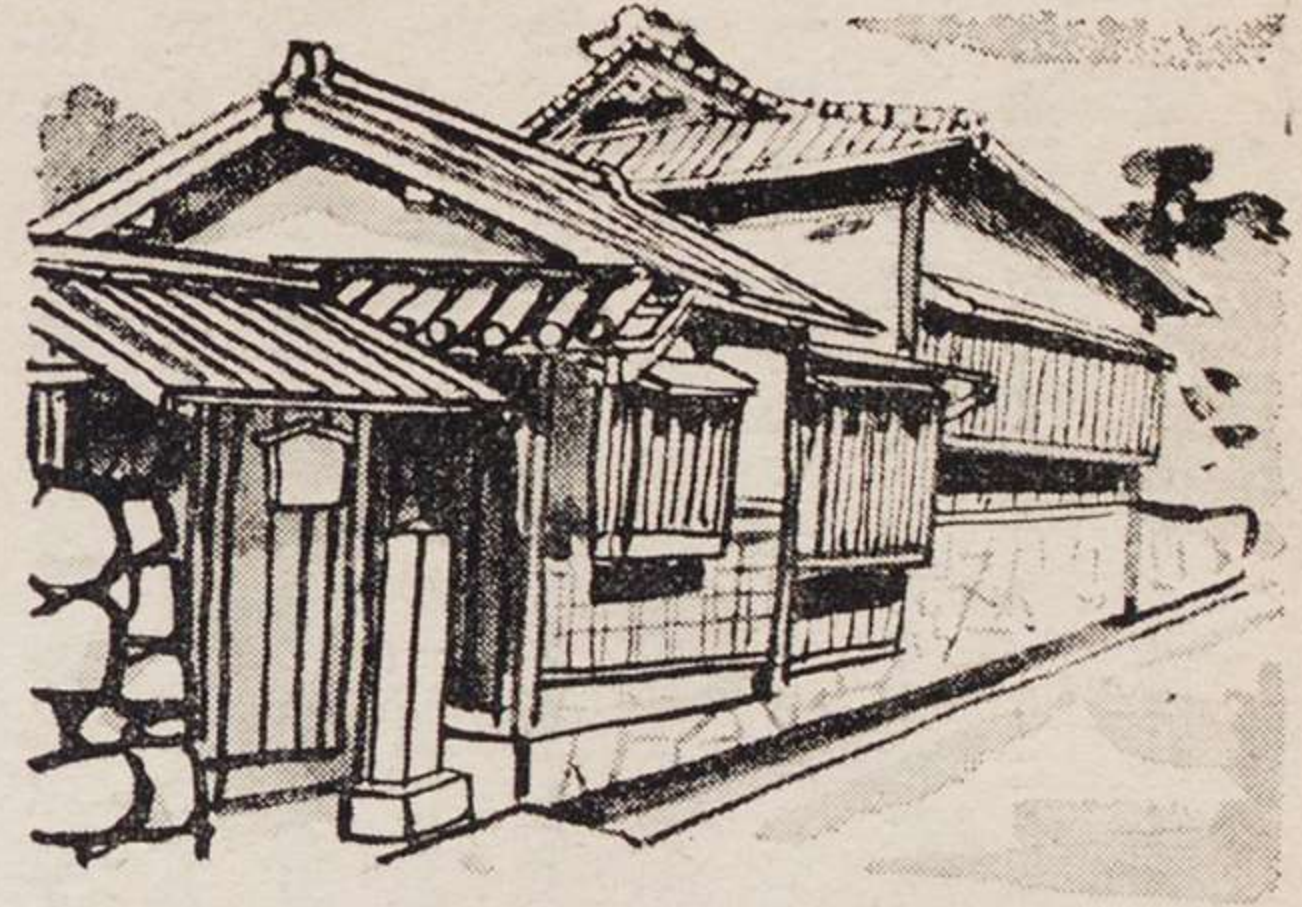


萩城復元という問題で萩市民の間で賛否両論に分かれ、末は美術協会までがその渦中に飛び込んで新聞やラジオにうまく利用されるような一幕があった。そこで萩市民のひとりとして冷静な立場で考えてみたい。

第一に疑問なのは、明治新政府にはいった折りに、なぜ萩城を率先してこわさなければならなかったかという点である。もちろん時の毛利敬親公の時代に対する英明なる改進黨のしからしむるものであるとは思われるが、よく考えてみればそれだけの理由でもなさそうだ。

即ち萩城開府十三代、毛利敬親公に至って幕末多端の国事を処理するのに、この萩城では不便との理由から、文久三年（一八六三）四月藩府を山口（前の山口県庁のある場所）へ移しておられ、それから明治にかけてはこの萩城は空屋同然の姿となり、廃藩置県が明治四年に実施され、毛利藩府山口に県庁の所在地が決り、聯隊区司令部が山口に出来るのは当然のことだと思われる

### 萩とお城とお家柄の巻



益田家老の旧宅の門長屋

そこで身近かな例を考えてみても解るように、明治維新の原動力となられた郷土の大先輩方にしても、殆んどの方が、伊藤公のように下賤の身から御出世なさった方々が多いようである。

すると俗にいう「家柄」という筋の者は出世する可能性は少なくなって来そうである。アア、それなのにそれなのに、その「マボロシ」がこの萩で通用しているということは、と言いたい。

以上のように色々と考えてみると、世の中は「アイマイ」な、そして「気休め」的なものの連続のような気がしてならないし、本当に身近かな「結婚」という言葉からして

「アイマイ」なままに結婚生活をスタートしているようであって、はたしてこれでよいものだろうかという疑問が湧いてくる。

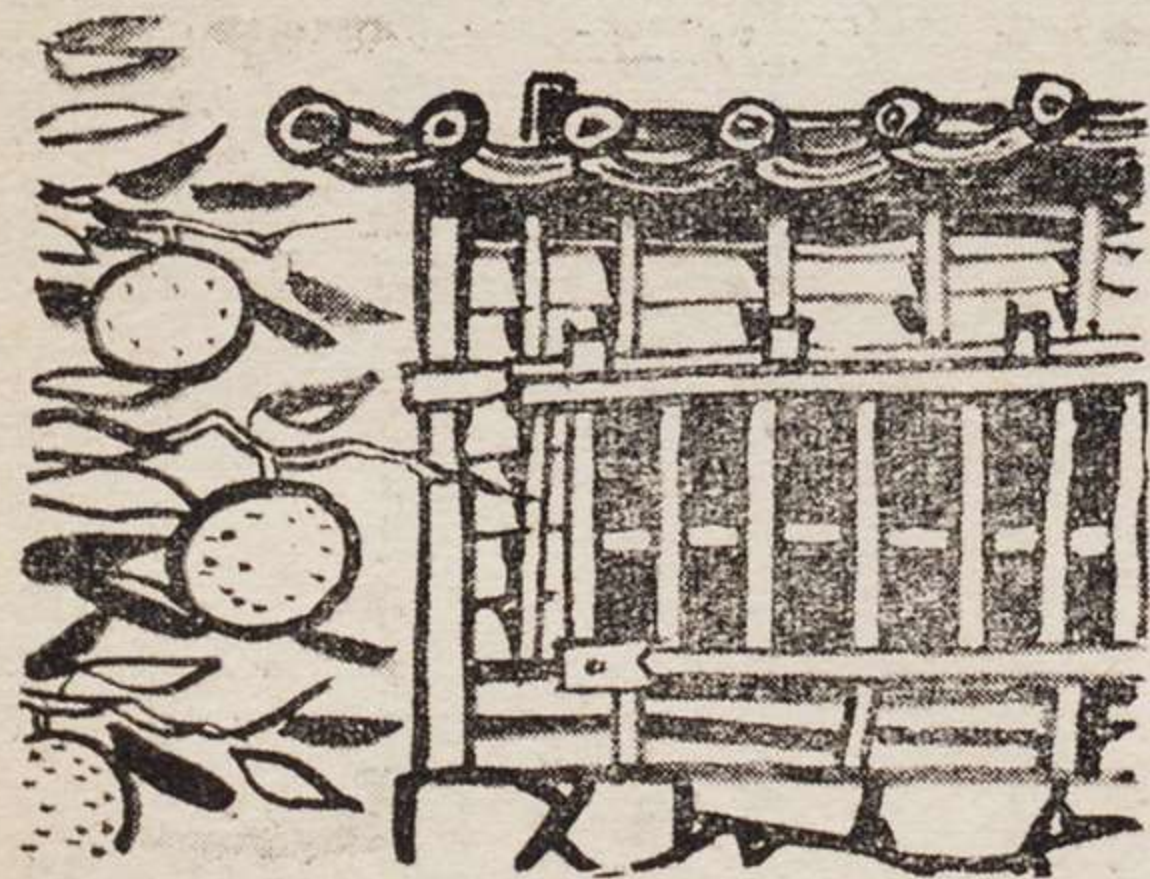
今後はお互いに、色々なことに「ゲンワク」されることなく「アイマイ」でない姿でスタートしたいものである。

る。ところが明治の六年十二月この萩城解体払下令が下り、翌年すべてが解体払下げとなったのが実状のようである。

従ってその解体の一つの理由として考えられることは、お城と言っても空屋同然の維持費を如何にするかと言う問題があり、廃藩置県による理由で払下げとなったものとは思われそうにないと言うことだ。もう一つの理由として考えられるのは、お城という存在は当時、武士の中でもくにクライの低かった足軽の出身であった伊藤公その他大勢の明治維新回天の事業をなされた郷土の方々にとっては、おそらくお城なんかという「シロモノ」は内面的には確かに威圧的な存在としての役割をはたしていたのではなからうかということだ。従って貧乏人からの成り上がり者たちにとっては、御自分の前身を隠すための一つの方法としてのお城の解体が考えられたということとはなかつたらうかと言うことだ、つまり「貧乏人のヒガミ」のような根性玉の犠牲となってお城がこわされたような気がしてならない。然もどうせ犠牲にしなければならぬものであるならば、この萩城だけが全国に率先して解体しなければならぬこともないし、また他のお城もこわされてしかるべき筈なのだが、そうもなってもおられないし、廃藩置県と解体との間には満二ヵ年間の開きがあり疑問が湧いてくるようだ。またこの解体にしてもお城だけではなく、なぜ天守閣の石がきも、内堀も、外堀も全部取りこわしてしまい、その跡が他の目的に利用できるように

しなかつたかという点である。

次に萩の美術協会による萩城復元反対の件であるが、その声明文の中に「萩の風致をこわし云々」とあったが、もともとお城があつたのに石がき以外のものだけをこわしたいわば中途半端なあわれな姿が風致を左右することの理由になるかどうかという点も疑問の一つである。またよく考えてみると、美術協会なるものの本質的な意義からして確立していないような気がしてならない。協会の皆さんが、会の規約に精通され、また人間的な常識から判断するならば、協会の目的ではおそらく「萩市における美術文化の発展と美術教育の向上を図る云々」ということであろうと思われる「美術文化」と中途半端なお城のこわれたあわれな姿とはあまりに関係はなさそうだし、また協会そのものが政治的団体でもないのだから常識あるお方であればおそらく反対声明文はでき上がらなかつたとも考えられる。即ち協会の一部の方々が萩市の美術的な面での指導的立場における「意識過剰」的間違った行為のあらわれであつたようにも受け取れてならない。



夏ダイダイと門長屋

第一のお城解体の疑問点といい、またこの協会のとった疑問点といい、時代や立場こそ変われ、物の考え方の中には「アイマイ」と言うか、「大きいものには巻かれる」と言うか、兎に角なにかの共通点があるような気がしてならない。

最後にもう一つの疑問に、家柄という問題がある。即ち萩ではいまだにこの家柄と言うことが生活の中でははばをきかせている点である。

中国地方全土を支配されていたが、関ヶ原の戦いで運悪く石田方になびかれたばかりに防長二州に閉じ込められた毛利のお殿様が萩に居を構えられて、ほぼ四百年、萩でいう「よそ者」ということばからすれば、毛利のお殿様こそ萩では「よそ者」の張本人ということになる。従ってその張本人の家来である御家老や足輕のかたがたが「家柄」だなんて通用する筋は毛頭ない筈である。しかもそれらの名のある人やその子孫のかたがたは、当時の江戸や東京あたりで一旗をあげておられるし、萩に残っている人々はいわば「カス」のような存在の方々と言うことになり、この家柄という点に関しては「アイマイ」そのものであるらしい。また古くは毛利のお殿様も五百年ばかり前には広島奥の吉田の山賊か豪族の類のような気さえしてくる。もともと武士と言うものは貴族の花園の番犬化した姿であり、あまりホメラれた出とは思われそうもないようだ。

ところで萩での文献に載っている一番古いお家柄と言え、現在もメンメンとその血統の続い

ている家は国守家のほかにはないようだ。即ち国守家の御先祖は今から数えて千三百年ばかりの昔のこと、奈良の東大寺建立のみぎり用材を白牛で運んで抜群の功績をあげられたかどで国守という姓をもらい、時の聖武帝より葵の姫をちょうだいされたと言うものである。言うならば当時庄屋のごとき地主の親方から徴用の割り当てを受けて、建立の御奉仕に引張られた牛飼いのオヤジさんが国守家の御先祖ということにもなりそうだ。

萩の観光のしおりに「古い町、観光の萩」とあるが、古いものは当時の主人たちの出払った屋敷の土壁とその家の門番どもの住んでいた古びた一部の下っ端どもの住まいだけであって、観光都市としての観光施設とは到底いえない。ただ毛利のお殿様が徳川幕府から生まれ、地理的条件のはなはだ悪い萩へと押し込まれたということが、現在に至るも立証され、時代や文化から取り残されて、しかたなく現在のようないまわねな姿となったということ以外には何物もないようだ。即ちこのような「井戸の中のカワズ」的萩と言う環境が最も大きな疑問点を生んだのではなからうかと言うことだ。

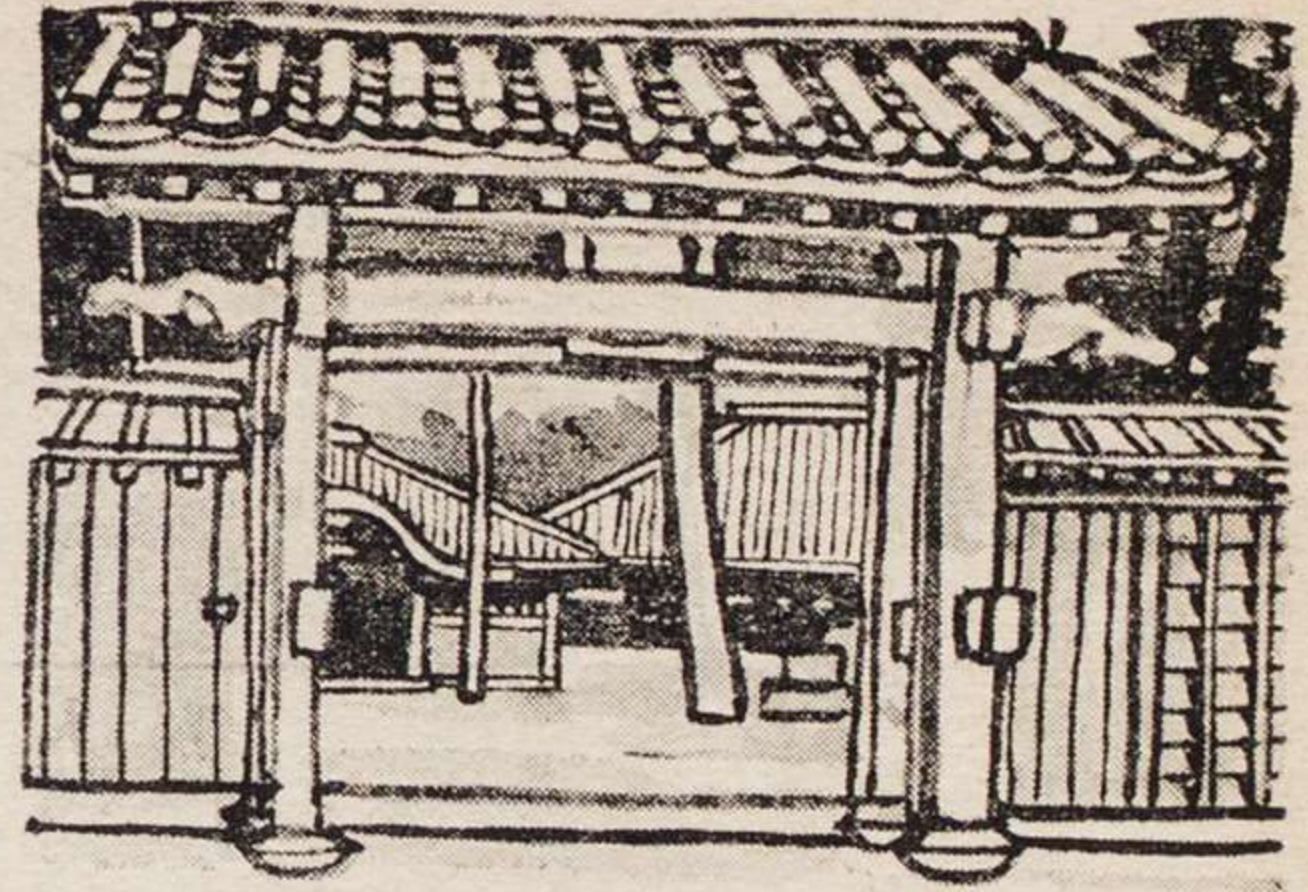
最初にもふれたように、萩城解体一つにしても全国に率先してこわされたことだけを自慢にし、その間の精しい史実をも調べずにおり、また明治維新回天の業が郷土の先輩がたによって行われたことのみをカサにきて自己満足におぼれて毎日を過し、時代にとり残されていることにも気づ

歌の文句のある日の午後ではなくて、ある日の「夜」のこと、とある用件で人を探して、夜の町のパチンコ屋を廻ったことがある。そこで驚いたことには、そのパチンコ屋の客の中の約三分の一が旅館のドテラを着た人種であったと言うことだ。

大体一般の観光客なる者は、日中は市内の名所旧跡の観光に時間を費し、夜ともなれば夕食をすませ、町へでもブラリと出掛けたいと言う心組みが人情の常のようだ。ところが萩の田町あたりの商店街はどうかと言うと、晴雨にはかかわらず、午後の七時ともなれば店を締められるので行く所のなくなった旅の方々は仕方なしに、吉田町あたりのネオンの光る「パチンコ屋」へと足を向けざるを得なくなる。してみると田町の商店街なるものは旅の人々には、きわめて不親切であって、夜ともなれば萩ではもっぱら浮気でもするようにと言うことにもなりそうだ。

そこで考えてみると、萩には旅館組合加入の旅館はおよそ四十五軒にもほり、その旅館の中

### 「パチンコ屋」のための商店街の巻



国守家の菩提寺、白牛山竜蔵寺

かず、あたかもこの田舎町の萩が「天下の萩」の如くにお考えの「気ぐらいのお高い」人が、この萩には今だにいられるのではないかと言うことだ。しかも美術協会ではないがそんな文化人と称せられておられる方の中にもおありのようだから不思議にさえなってくる。

年間五十万人にも及ぶ観光客の方々がこの萩にお越しになられると聞く、しかし施設としては六百人ものお客さんを収容することもできかねるといふ観光都市だし、年間のたくさんのお客さん方は、ただバスやタクシーで萩市内を駆け歩き、お泊まりは「マワシ」ではないが、山口の湯田温泉や長門の湯本温泉でどうぞというあまり感心した観光都市ではなさそうだ。言うなれば、萩の姿はバスやタクシーのおかげで「ホコリ高き観光の町」といえそうになり、これが一日も早く変な意味の気位を捨て、古い町萩市から真の「誇り高き」新しい観光都市になってもらいたいものだとは祈っている。

そこで田町のある店のお方に聞いてみると「この頃はどうも、労働基準法がウルサクテ」とオツシャル。労働基準法なるものは田町の商店街だけに適用されているものではなくて「パチンコ屋」にだけあってある筈なのにと言いたくなる。要するに田町の方々には余り「モウケ」なくてもよいと言う人が多いと言うことにもなりそう。

大体商売と言うものは「モウケル」ためのものであると思



田町通りの売出し風景

お方は、仮りに「奥さん」の目の届かなくなった所へ行つた積りにおなりになつて頂ければおよそ旅人のお気持ちはお分りになつて頂けるものだと思いますがネ。  
処が実際には旅人ばかりのことではなくて、萩の者でも殿方や御婦人の別なく、一応日中は家事や仕事に追われがちで、夕食をすませ一服やり仕事からの開放感を味わい、アマイお気持ちになつて、一つ子供のための買物でもと思いたくなるのは誰しものことだろう。アア、それなのに、それなのに、田町の店が午後の七時頃から締つていふと言ふことは……と言いたくなくなる。

ではいまだにお客がなくて、夜逃でもしたと言う話を聞かないのだから、少くともそれによつて家族の者が生活していると言ふことであり、一日平均どうしても四、五人のお客が泊つておられると言ふことになりそう。その計算からすれば、二、三百人のお客さんがこの萩市内に毎日泊りになるといふことになる。そうすると「パチンコ屋」の中にそれ等のお客の姿が見受けられるのが当然と考えられる。特に萩市は一応「観光都市」を表看板にしているし少くとも、萩市にお泊りのお客さん方の眼を楽しませる場所ぐらい提供するのが観光都市としての萩市民の人情のよりに思われてくる。

誰しも旅行をしてみると分るよ様に、その折は家からの開放感を持ち、下らない金を使い、浮気の一つもしてみたくなるのが人情の常のようであつて、常日頃、自分のところの町では目にも入らなかつた身の廻りの品などが目につくものであるようだ、特に恐妻家？ともなれば尚さらのこと、口どめ料の如く、奥さんのための高級化粧品などが殿方の目にも入るもののもうであつてそのあと気がふとくなるのが世の中の常人の殿方の心情のキビのようだ。そのほか子供の御土産品など、旅のつれづれに人が買う品物には「萩の御土産品」ばかりときめこむことは、人情のキビを知らない商売人であると言ふことにもなりそう。

つまりそこで自分一人が旅をした時のことを思い出してみることですな。そんな御経験のない

っていたのだが、田町の御商売の方々はナカナカそうでもなさそうである。

しかし若し「モウケル」ための商売ならばせめて午後の九時頃ぐらいまでは開店しておくぐらいのお心掛けが現代に於けるアキンドの人情のように思われる。

若し「モウケル」お積りがないのであれば、サツサと店を締め、田町の商店街から田舎の方にもお引越しになれる方がよいのではないですかね。

何にかの大売り出しの時だけ金をかけ、街の空に「ウスギタナイ」小旗をハリメグラスだけがアキンドの心掛けとは思えないし、もっと根本から考えなおしてみる必要があるのではないかとさえ思われてくる。

案外「パチンコ屋」の御主人方に見れば、田町あたりの商店街サマサマと言うことにもなりそうだ。これが萩での「武士の商法」と言うのかもしれないが、それでは観光萩市の「メンツ」が立つまいにと思われる。

新興宗教の教祖さんではないが「ユメワスルデナイゾヨ」と言いたい。

## 「煙にまかれる」の巻

「煙にまかれる」の巻

とかく世の中の「オエライ」方々というものは、実現性のない理想をかかげて人を「煙にまかれる」クセがおありのようだ。人間だから夢も必要だし、理想も持たなければ生活に張がないことは事実のようだが、そのために当座の人々に迷惑をかけるということは、大いに慎むべきことだと思われるのだが、ナカナカ世の中はそう旨くゆかないもののような。特に萩市は観光を表看板にしているのだから、萩市民は別として他からの観光客の方々の立場を考え、その立場を優先にしてその方々に御迷惑がかからないように心掛けることが観光都市、萩市民としての取るべき道だと思われるのに、萩市の御主人方の中には「気位」が高く遠大なる理想を掲げて、当座の観光客の迷惑には「ホホカムリ」をされている場がかなりにあるようだ。即ちその一つの例が萩駅の存在であるようだ。御存知のように萩駅と名が付いているばかりに、準急で来られたお客さんの中には奈古や長門市までもお乗り越しになられたり、観光客は萩駅が萩の本駅とばかりに萩駅

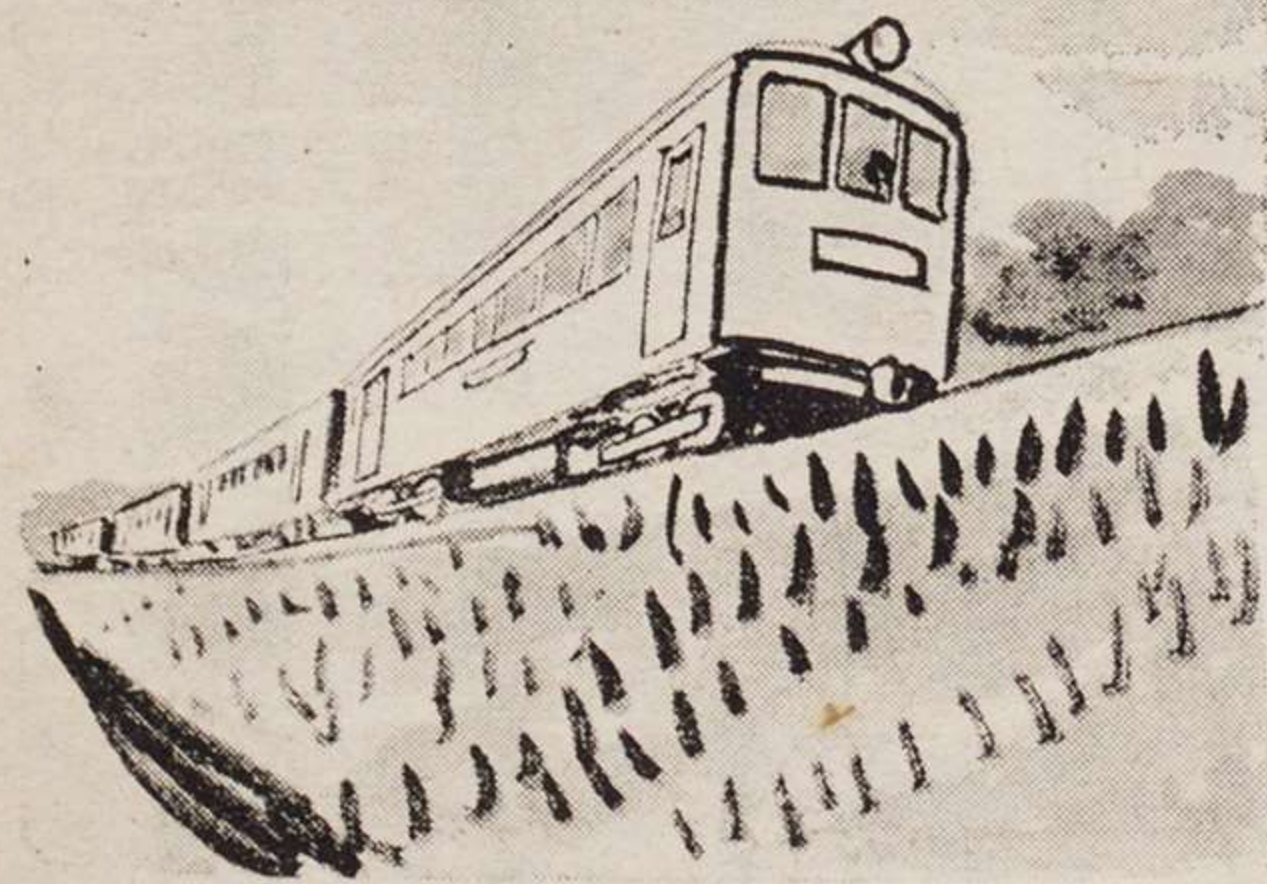
へハイヤーを飛ばして停車しない準急の姿を見送られたり、または山陽方面から中国山脈を越えてのバスのお客さん方はわざわざ萩駅前下車をされ、あげくのはてにトボトボと田町筋あたりまで歩いて来られたり、汽車の終便で御来駕され萩駅にて下車されて萩駅前の暗いヒンジャクな通りを眺められ、仕方なしに駅前の「キチン宿」でナキナキ、センベイブトンの中で一夜を明かさされたり、と言った笑えない話は耳に「タコ」が出来るほど度々聞かされている筈なのに「駅名変更」の件でも話題にしようなものなら「金がかかる」と言う合言葉で「オエライ」お方は一蹴され、それもそうだとばかりに言われた通りに引きこんでしまわれる「イクジナシ」の「コシヌケ」の御仁がこの萩には多いようだ。然し考えてみるとその「金」はかかっても国鉄さん方に金がかかるだけの話で、別に萩の市民には直接かかるものでもない筈なのに、兎角「金」と聞かされただけで、その内訳や理由も確めずに引き込んでしまわれるのが萩市民の「セイヘキ」のようだから萩のお方にはモトモト「煙にまかれ」やすい素質がおありなのかもしれないようだ。

ところがお隣りの正門市駅はイトモ簡単に長門市と駅名を変更されたようだが、萩市には長門市ほどの政治性というか、市民の熱意というか、何にか長門市に比べて一つも二つも抜けているものがあるようにしか思えない。

「大萩一駅」主義の理想実現は確かによい話だが、その実現まで辛抱をあえてさせられたとこ

ろで自分の腹は痛まないからという考え方もかもしれないが、それでは観光都市の表看板に「キズ」がつくし、萩市民としてプライドにもかかわる筈だがと思われる。第一遠路わざわざ田舎町の萩までもお越しになられる今のお客さん方に御迷惑をかけていて、素知らぬ振りをしているようでは、その内大萩駅が出来た頃にはお客さん方は、この萩市を見捨てられて来られなくなるのではないかとさえ心配になってくる。またこんな人口六万が切れるような田舎の城下町萩のカシラに「大」の字をつけることからして「ズレ」ているような気がしてならない。

ところがその理想家の構想では鉄道を萩市内を直線につけてかえて山陰線のスピードアップを言う点もあるようだが、この萩付近で十五分ばかりの短縮してみたところで山陰本線は相当に長いのでスピードアップの見地から考えれば根本から路線を引きかえなければ解決出来る問題ではなさそう。又計算の上では萩市周辺の鉄道用地の買収は迂回の路線の方が面積の上では確かに多いのだから、単価の点ではかなりの開きがあることだろう。その上人口六万たらず



ディーゼル機関車

昔のこと、学校の地理の時間に先生イワク「貿易港というものは後背地があって、その後背地の産物積出しのために、商港が栄えるものだ」と、こう教わったように記憶している。皆さん方も恐らく御同様だろうと思われる。

ところでこの産業不振と山口県でも折紙付きのこの萩にも、いよいよ商港がああ「男なら」であまりにも有名な菊ヶ浜に相まみえるようであって、その起工式が菊ヶ浜で行われ、盛大に餅まきがなされたと言うことだ。萩市民にしてみれば、国の補助金が下って工事が行われるのだから、よいようなもの、地元の負担金もある訳だし、あまり「ウレシイ」ことではないが、それにしては金が地元で動くのだから「マンザラ」でもあるまい。然しその港が本当に価値のあるものかどうかと言うことが、今後に残される問題ではないかと思われる。

そこで考えてみると、始めにもふれたように、第一にあげなければならないことは、萩の後背

### 港ができると「オンボウ屋」がもうけるの巻

の都市だし、仮りにバスによる実績観光人口を全部国鉄利用者に切换えられたところでそんな乗降人口ではそのための工事費や権利金を加えると、何年かかっても黒字になる可能性は乏しいとさえ考えられる点などを思い合せると国鉄総裁ならずとも、そうすぐには採算度外視してまでは「フミキリ」は出来そうにもないようだ。

してみると先ずは今の東萩駅を萩駅に、また今の萩駅を南萩駅なり、椿駅（萩はもともと椿の郷と言われ、その椿のツがつまってバキとなり後にハギとなったと言われているほどだから、歴史的観点からしても椿駅が至当のようだ）ぐらいにしたほうがよいのではなからうか。そうすることによって、観光客の皆さん方を暖かい気持ちで迎えることができ、そのことが引いては萩市大一駅の構想にも通じて行くことだろう。然しその頃はお互いに「メイド」に行ったあとの話になることだろうし、「近い橋」から先ず渡ることが先決のようだと思われる。

この頃の汽車は既に煙を出さなくなったのだから、お互いに「煙にまかれる」ことのないように考えてもよいではないかとさえ言いたい。





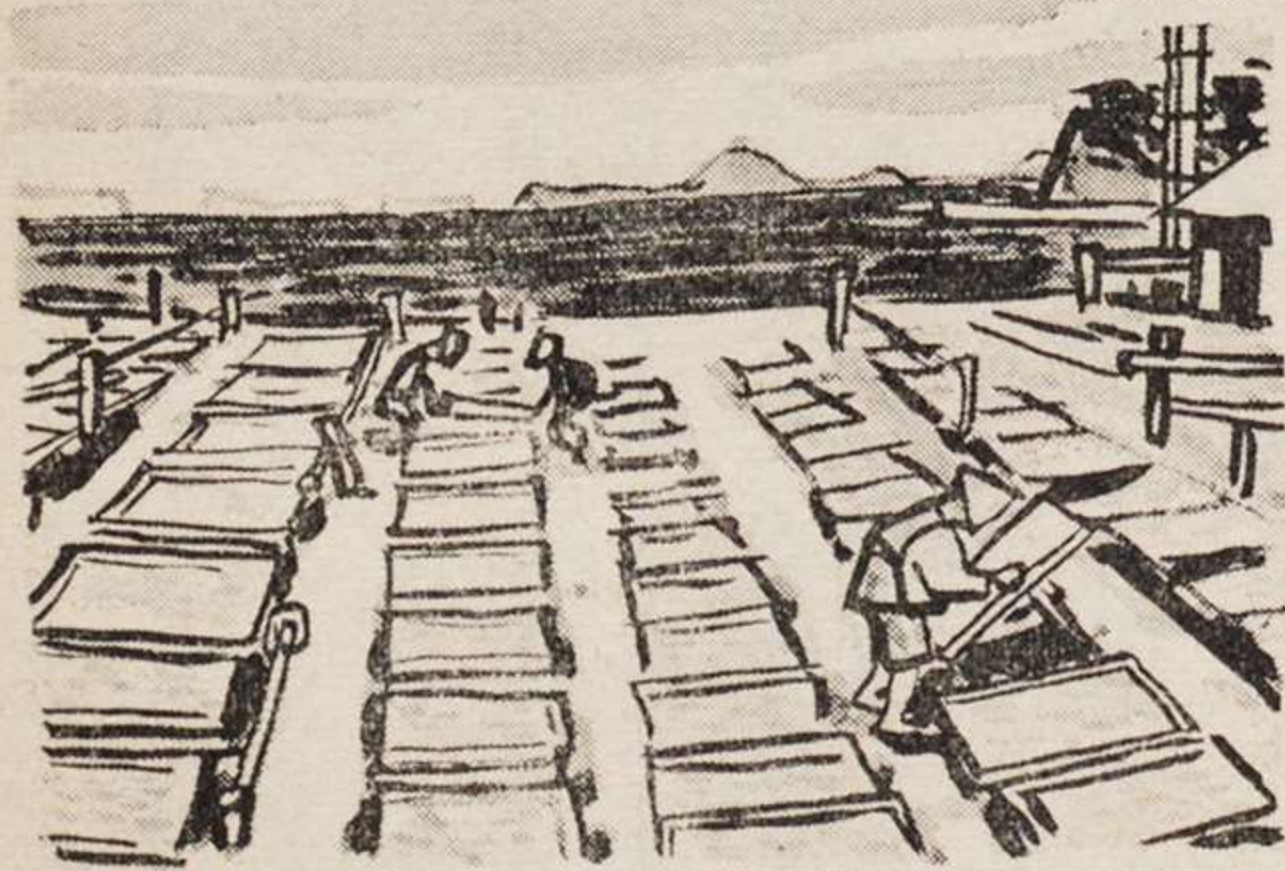
地なるものが一体どうかという点である。大体この萩なる土地柄は、大國主の命の頃より、大陸からの密航ルートの特産物も無く、山陰と言う字が示すように、貿易にしても正式貿易には向かないで、「陰」の貿易、即ち密貿易に属するものしか出来ない土地柄とも言えそうである。またこの附近の天候は、萩の測候所長の話によると十年間の平均天気の様子をみても分るよう、快晴なる日数は三六五日の中、ただの五七日だけで、雨の方は三日に一度は降る計算になるようであって、そんな気候の萩ではセイセイ、スッパイ「夏だいたい」か、それとも「カビ」ぐらいしか生産は出来そうにもなく、そんなものでは船に積み込むほどのものではないとも言えそうである。

またこの萩を歴史的に観ても分るよう、今から三百六、七十年前のこと、徳川家康さんから僻地指定をうけ、毛利のお殿様がナキナキ御来駕なされたような土地柄だし、今更、チョウチヨウと取上げなければならぬほどの「モノ」もないようである。従ってまあ強いて言うならばこの萩は長門峡より流れ出る清流阿武川のデルタであると言うことだけで、この阿武川も大した「トリエ」のある川でもなさそう。言うならば、この川の附近の山に竹林があると言うだけの話である。ところが大体この萩の竹も既に日東製紙からも見離され、今のところひとえに「竹スタレ」に望みをかけておられるような現状ではあるが、これとてもビニール系のものに喰

われて、その衰微の道をタドル運命にあるとの見通しが強く、萩からの産物としてのものは、一向に見あたらないようだ。

してみると萩から産出する「モノ」は、今のところ田町あたりの商店街も夕方になれば締められて、買物でさえもさせては貰えない程であって、夜ともなれば夜にだけ生産される金のかからない？人的資源の生産だけと言うことにもなりそうだが、この「モノ」は人買い船でもあるまいし、舟積みにする程のこともあるまい。足がついているものだから御自身で歩いて出かけられるから船の心配は先ずはなさそうである。

以上のように考えてみると、後背地をもたない萩の商港とは中央と大陸との輸送の拠点でもあるかと言うと、そうでもなく、ゴトゴトと曲りくねった「トンネル」だらけの山陰線では、どうにもなるまい。それでは自動車で山陽路へでも出るとしたならば「コスト高」と言うことで幾ら姉妹都市としての「チギリ」を結んだからとて「ウルサン」の市長さんだって態々萩を経由してまで高い金を出し、御取引きをな



イリコほし場風景

されるほどの御馬鹿さんでもあるまい。また考えてみると、国から幾ら補助金があるからと言っても、地元の負担金までも出し、あの風光明媚なる菊ヶ浜の海岸を埋立てるよりも、今の処、萩市役所前の蓮田でも埋立てた方が、萩市役所の体面でも良からうにとさえ思われる。

真面目に考えてみて、港が出来て菊ヶ浜が広くなり「イリコ」のほし場が出来、本当にもうけて「エビス顔」になられる者はさしずめ「オンボウ屋」さんだけと言うことにもなりそうだ。

ところで港が役にたつものならば別として、あの菊ヶ浜を埋立てたのでは、幕末の頃、男どもが出払い精力のあまった？カヨワキ細腕の「萩オンナ」の心意気を「男なら」の歌とともに天に示された萩美人の御先輩がたが、菊ヶ浜は「女台場」の松の木の下で「シクシク」とお泣き遊ばされることだろう。

戦後時代は変わったのだから、案外港が出来ると船が出入するのかも知れないが、それにしてもその折は「萩美人」を育てた阿武川の水でも吸んで積み出すことですか？。

注（この萩では「イリコ屋」さんのことを、どういう意味かは知らないが「オンボウ屋」さんと呼んでいるようである。）

## 機関車？は線路上だけしか走れないの巻

一般に文化人と言う人の中には何か一言、いわないと義理がすまないように思っておられる方が多いようだ。何にか一つの事があるとそれには色々と批判もあり得ることだとは思われるが、矢張り良いと思われることには、幾ら批判があつたとしても責任のある地位の方々は強行されるべきだと思われるような問題はこの世の中には沢山にあるようだ。

この萩の中のことにしても同様だが、萩がかつての昔から徳川家康ダンナから文化の僻地指定を受けたほどの特種な環境だけに、この土地柄を生かす方策が一つや二つはあってもよさそうだと思う。

ところがお隣の長門市では青海島への大橋の工事が着々と進み、それに附ずいする観光施設、国民宿舎など、実に「ウラヤマシイ」ほどの盛沢山なものができようで、海上アルプスを自称する天然自然の青海島を喰いものに観光路線は着々と進んでいるようだ。ところが一方、この萩

市ではどうかと言うことになるのだが、「オハズカシイ」ことながら長門市よりは威張られるようなプランとてなく、長門市の「爪のアカ」でもセンジで飲ませたいものだときええそうである。「ホロビルの哀れさ」のみを喰いものにするような観光路線なんてものでは曲りくねったトンネルだらけの山陰本線以上の「シロモノ」としか言えそうにない。

今のところ萩のキャッチフレーズは「観光城下町」で一応通ってはいる。長門市が青海島で行くならば、この萩市では「城下町」を打ち出すことを目標に路線を敷くべきだと言う気がしてくるのだが、そこで浮び上って来るのが萩城復元と言う「フミキリ」である。これが保線区長ならぬ萩市の責任者のとられる一つの目標のような気がして来てならない。

ところがこの萩城復元策なるものが、萩の特定の先輩によって提唱されるや、萩の文化人がたはマッテマシタとばかりに一斉に？、文化団体名までを利用され、反対声明文なるものを発表し新聞やラジオのよき「エサ」とされてしまい、萩の観光路線も「オサキ、マックラ」のトンネルに入ったような結果と相なったような気がしてくる。

あの萩城復元案なるものが、若しもあの特定の先輩ならぬ他の方だったならば、はたしてあれだけの反対がなされたらどうかと言う疑問が起らないでもないのだが、それにしても萩市の方向付けに対する考え方は、人に上下のヘダテはあっても、そう変らないものだと思われるのだが、

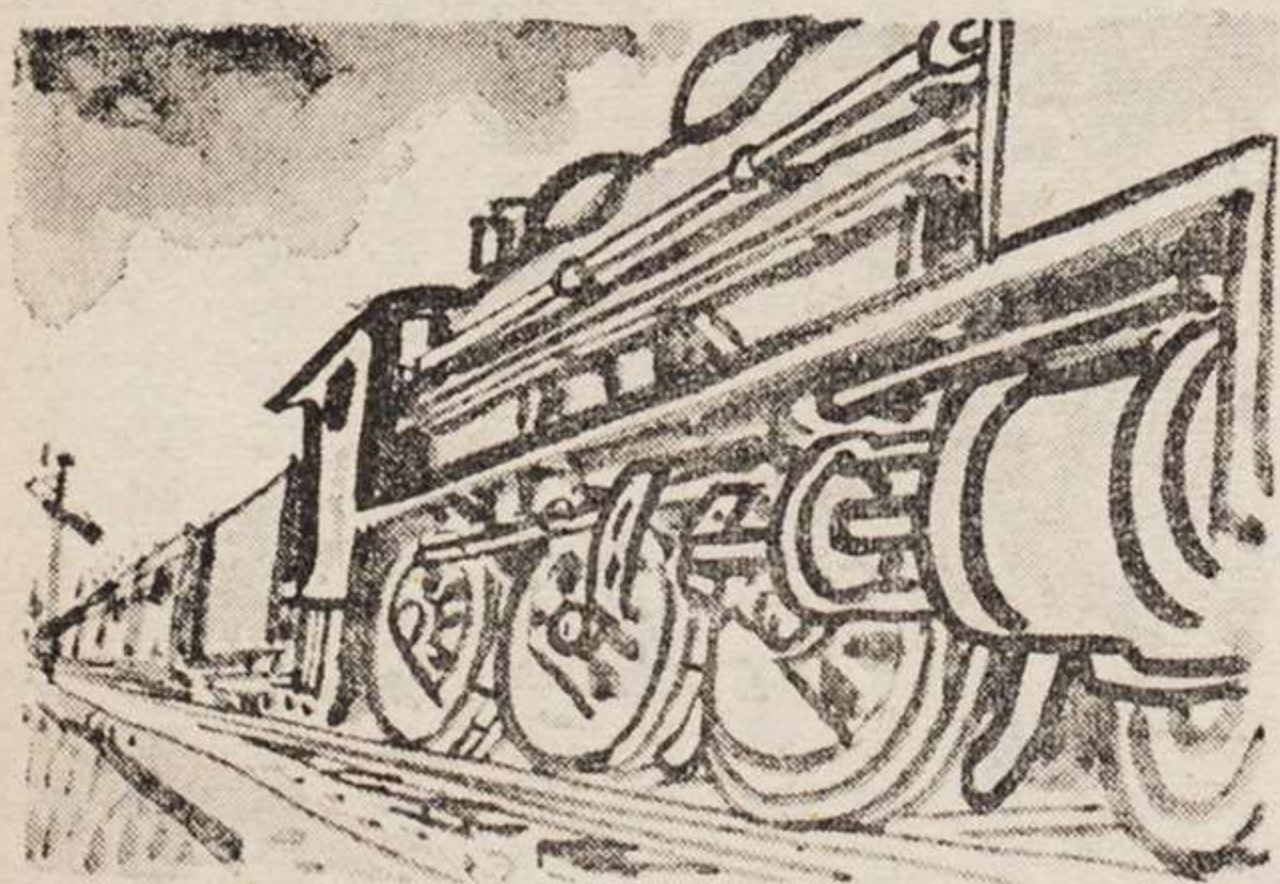
ナカナカうまくまとまらないのが、萩の「オエライ」方々の「ツネ」であるらしい。

考えてみると、今までの経験からしてこの萩では好むと好まざるとに係わらず、萩橋にしる、山銀にしる、はたまた今後の郵便局の行方にしる、大きなものは知らず知らずのうちに、この特定の路線に乗せられて走った機関車同様に引張られていることだけは確かなような気がしてきて仕方がない。

それが萩市の発展策であるかどうかと言う点だが、今後に残された問題であって、若しその方向が同じものであればお互いに話し合い、歩みより、観光都市としての面目が立つようによすべきものだと考えられてくる。

そこでこれからの萩市の方向付けに就いて考えてみると、どうせ「哀れ」を喰いものにするにしても、それを象徴するもの即ち萩城復元こそ「船の出入りしそうにもない萩の商港」よりも先ずは必要だろと思われる。

即ち萩城復元こそ、歴史的にみても最も正しい行き方であろうだし、城下町萩を象徴する一つの真の姿とも言えそうであ



機 関 車

る。

大体毛利のお殿様なる御方は、御自身では山口へ居城をお移りになり、空家同様の萩城を維持なさるのに困って「ボロヤ」ならぬ「大阪商人」へ売飛ばし、藩籍奉還なんでもので大義名分をおたてになろうなんてお考えに、義理を感ずるのが萩の文化人としての真の姿でもあるまいし、この際歴史上のお殿様に対し、はたまた中央集権化への萩の反骨精神を「ヒレキ」するのも一つの手だし、お殿様の山口への御転居にお供が許されなかったかつての不平分子の先輩方への「罪ホロボシ」にもなるとも言えそうである。またあの指月公園の眺めにしたところで、御城の上の部分を除いた下の石垣の部分だけが風致上宜しいと言うのも変な話であって、モトモトお城なるものは上下揃っていたものだし、これを女の人に例えれば、首から上を除いた下の方だけの眺めがよろしいと言うことにも似て、風致ならぬ「風紀」問題でもあるようだ。

兎に角、お隣の長門市に先を越されたくないものである。人間だれしも感情のもつれもあることだろうが感情だけに「オボレル」ことなく、萩市としての方向付けをされ、所詮萩市民という貨車は機関車に引張られて、線路の上しか走れないのだから、どうか「オエライ」方々はお互いが気持ちよく、スピードアップが出来、萩市本来の目的の駅に向って邁進出来るよう、線路を敷いて貰いたいものですナ。

## 「オメデタイ」の巻

お正月や結婚と言うことになる「オメデトウ」と言わなければならないのが人間の義理のようである。そこで人なみに「オメデタイ」お話はないかと考えてみた。

その「オメデタイ」お話の一つに「イナバの白兎」の話がある。即ちこの話は小さい時から耳にタコが出来るほどに聞かされたものだ。そのお話と言うのは大国主の命とイナバの白兎の一件だが、最初はだました積りでいた「サメ」たちに最後は露見してイカッタ「サメ」（ナンダか男を意味しているようですナ）たちは白い皮をはいでしまい、皮をはがれたカヨワキ白兎（昔から白兎は女にたとえられたものであるらしい）は大国主の命によって助けられ、命はガマの穂で白兎の患部をナデラレてメデタシ、メデタシと言うことになるのだが、この「ガマの穂」なるものには昔から毛が生えていたようであって、ハタシテ如何なる「ガマの穂」であったかは「タカマガハラ」の昔よりの話だから吾々シモジモの者にとっては知る由もないお話なのだが考えてみる

とナンダカ、オカシナものである。

しかもこれが今日、出雲大社の守護神となられ、縁結びの神様であって、サカリのついた新婚御兩人がたの「メツカ」であり、その上「オマモリ札」がとぶように売れて神主さんの「笑いがとまらない」と言う話だから考えてみると本当に「オメデタイ」次第である。

次にこの「オメデタイ」という俗語にもう一つの別な意味がある。即ちあまり「オカシコクナイ」という意味でもあると言うことだ。

ある夏のこと、とある要件で大阪へ出向いたが、その折のこと、ある萩の御出身のおエライお方のお宅へお伺いしたのだが、そのお家の玄関横にそのおエライお方とは余りにも御縁のなさそうな、一見雑種と思われる小さい「メイ犬」が一匹つないであってチョコナンと座っていた。みるとその「メイ犬」のすぐ側に喰い残りを入れてある犬の食器をみて先ずは驚いた。なんと上等なと思われる萩焼茶碗である。

そこで「メイ犬」はとみると余り人相のよくない始めての客である筈なのに、私の顔をみながらシッポをピリピリとお振りになっておられるので、これはさいわいとチョイとその茶碗ならぬ犬の食器を手にとり、茶碗のオシリならぬ高台はとみると、ナントそこには〇〇山〇〇と萩だけではなく、天下にその名の知れ渡っている萩のある陶芸作家様の刻印が捺してあった。

家に通された折のこと、その件についてお尋ねすると、その御主人スズシイ顔をされてイワク「余り萩焼には趣味がなくてネ……」ということであった。

考えてみるとそれもそうだなと言う気がしないでもないようだ。第一あの「ゲテモノ」的なあの萩焼茶碗の味が、そう簡単に世の中の万人の者に分る筈のものでもあるまいし、それかと言ってあんなと言っては失礼だが、茶碗二個のお値段が千の位ではなくて、万の位でお取り引きがなされる御時世のことだから、変な思いがするのが当然かもしれない。考えてみると茶碗の良さによって評価される筈のものなのに、値段によって中の茶碗が評価されているのが世の中のツネのようだからオカシナものである。

「オメデタイ」の巻

恐らくあの「メイ犬」の食器になり下ったあの萩焼茶碗にしても、萩の誰からか送られ、御趣味のない御主人様はそのやり場に困られた上でのことだろう。それにしても相手の御趣味さえも見きわめもしないで、相手が「オエライお方」ともなると、自分でも萩焼茶碗の良さがよくも分ら



出雲の大国主の命

ない「クセ」をして、何んでもかでも萩焼のいや萩の「ヨサ」を他人へ押し売りをしようなんて  
アマイお考えのお方が、この萩の方々の中にはおられると言うことで、その萩の者の根性の「浅  
さ」を示しているような気がしてくる。

話によると、その昔徳川のあるお殿様が大変な大好きであり、余りにお犬様を御可愛いがりに  
なられたと言う話であるが、その話とは立場こそ異ってはいるが、この現代版お犬様のお話は、  
考えてみると変な話で、この相手の趣味をも調べずに萩焼茶碗を送った萩の人こそ本当に「オメ  
デタイ」という話の一つになりそうだ。メデタシ、メデタシである。

### 利休さんが「クシャミ」をされるの巻

私はお茶を楽しんではいるが、今のところお茶道なんていわれるものには、ふれてみようとは思  
わない。と言うのは今頃のお茶をやっておられる人々からお茶というものを感じたところでは  
なんだか千の利休さんがお墓の中で「クシャミ」をしておられるような気がするからだ。  
考えてみると科学の進歩は既にこの吾々の地球から、宇宙の世界へと進んでいる今日、お茶の  
道だけは逆コースをたどっているようにしか思われない。

お茶をやっている人々はよく利休さんはこうされたとか、利休さん好みであるとか、また近く  
は〇〇宗匠好みとか言われており、すべてが他動的な然も責任感をもたないですむ、型式だけを  
身に付けようとされているとしか感じられないから厭やな感じがするのは私一人だけではあるま  
い。勿論科学が進歩し宇宙の世界を論じて、人間としての追求はより深く、極められるべきだ  
と思うが、それはどこまでも内面的なものであって、形式的なものの中には人間的な進歩はない

と思われる。

大体人間が生れてから科学と言う問題が極められ、同時に人の道が開けた筈であり、人の道が発展して、お茶の道が生まれたものと考えられる。だからお茶の道を創ろうとして茶人が生まれたのではなく、日常の生活に余裕を持ち、心の憩い場として自然に生活の中にお茶の道が生まれたものだろう。従って千の利休さんがお茶の道を開かれたとしても、本当にはお茶の道が利久と言う人物の存在を確立したものであるともいえそうである。

確かにお茶は絵画のように表現する対称は持たないけれども、一つの芸術であって、文化の四つの目標の中の一つである用（生活）の場から出ており、それに加えて、日本と言う生活の特色から、人間の視覚、聴覚、知覚の三つの感覚と空間、時間とそれに運動を加えた総合的表現をなす芸術の極地がお茶の道であると思いたい。

ところがお茶の世界ではよく「ワビ」とか「サビ」とか余韻だとか言われる、所謂アイマイな言葉がよく使われて、そのお茶の真の芸術としての意味が追求されることをむしろさまたげて、凡人と言われる一般大衆には理解に苦しむように、茶人といわれる人達はよく、そのアイマイな言葉によって「煙にまいてしまわれる」ようだけれども、考えてみるとかえって、その道の人々にこそお茶の真の良さは分らないのではないかとさえ思われるような気さえしてくるほどである。

る。

利休さんの時代からすれば、時代や制度は確かに遷っており、利休さんは螢光灯も御存知なければ、新しい建築材料も御存知ない筈であって、それに衣服にしても洋服なんてものは想像もつかなかったものだろう、考えてみるとあの当時、茶羽織、茶バカマまでも自分好みのものを作っておられたほどの利久さんにしてみれば確かに進歩的なお考えのお方であり、若しも現在におられたならばお茶の道も大いに改まったものとなっていることだろうと思われる。

それなのに今のお茶人はどうかというと、招待されるお茶会には、利休さんの御存知ない文明の利器である自動車なんか「シャレコミ」会場につくと、とたんに「ワラジ」をはき、露地傘を手にし、原始的な生活水準としか思われない暗い茶室に通されて、お茶をニゴして「悦」に入っておられるお茶人の顔がみたくらいである。

若し仮りに、利久さんが現代におられたとするならば、



千利久さんの肖像

この萩市では年に一度か二度ばかり商店街の休日とそれに合せた停電（この日を利用してよく電気工事がなされて停電となる）と休日とが重なる日があるようだ。そこで丁度その日に出くわしたことを思い出しながら綴ってみることにする。

それは久しぶりのお天気で、その上萩市内で県下の運動の試合会場引受けで萩市の旅館は超満員のホクホク顔。しかも日曜日ときているので、柳井市、山口市、北九州市、それに博多からの団体貸切りバスの群がゾクゾクと御来駕。所がこの萩ではどうです？馬鹿の一つ覚えでもあるまいが、労働基準監督署の御命令かどうかは知る由もないが、兎に角それを「カサ」にきて、萩の商店街は「一斉休業」。従って御来駕のお客さん方は買物は勿論のこと、お店が閉っていて煙草さえも買えないと言う仕末。そのためと言う訳のものでもあるまいが、指月公園だけは超満員と言った具合。そこでそのお客さん方の一部のグループは時間ツブシと「シャレコンデ」フオーク

### 「社長さんはお金がお嫌い」の巻

より安い新建材か、またはベニヤ板などを使われ、螢光灯などによる間接照明で快的なお茶を楽しむことの出来る茶室を作っておられることだろう。

お茶だけが古典の形式を追うと言うことは、むしろお茶の道はずれ、自らの墓穴を掘ることに等しい結果になるのではないかというようにも思われてくる。お茶を楽しんでいる者の一人として、現代の茶人に今一度考えて貰いたいものだと言いたい。勿論これはお茶だけによらず、すべての場合にだって言えることなのだが、お互いに気をつけ、大いに生活を楽しみたいものである。さもないと利休さんがお墓の下で「クシヤミ」をされることにもなりそうだ。



またこの外に吾々の税金によって萩市を「オタカイ」所からみおろして御運営遊ばされる市のお役所の中には、商工観光課なる「オエライ」その道の御専門の方々もおられることだし、萩市最高の「ハン」をお垂れになれる市長さんもおられるのにと、今更らながら「タメイキ」が出そうである。

「観光萩市」をキャッチフーズとした、この萩市で、上



一斉休業の商店街

商売人は、観光萩市の市民としても「ズレ」しており、商売人の風かみにもおけないほどにと言いたくさえなってくる。

この萩市にも、商店街の主流をなしているものと思われる専門店会たるものがあり、別に萩の商工会議所なる機関も現存しており、この二つの団体からでも、そんな日にはなんとか休日が変わるようになるよう、係の労働基準監督署へカケアウぐらいの熱意はないものか、それとも監督署は「石アタマ」の御連中ばかりと言う訳でもあるまいが、兎に角オカシナものであるようだ。

ダンスと御予定急変、ところがドッコイ、これも駄目。なにしろ念の入った御親切なる中国電力会社の「オハカライ」で停電中ときているものだから、持参のテープレコーダーも使えず「オデシ」でなく「オジャン」と言う始末。

考えてみると、観光立市という大乗的見地から、遠来のお客さん方に「ムダ」なお金は使わせないようにとの親心なのかもしれないが、それにしても「観光萩市」の看板が泣くというものはあるまいか。

ところが指月公園内での例の喫茶店の先祖「花之江茶亭」（余り聞かれない石州流茶室）ではこれも例によって日曜日だからオキレイな御婦人方による「一ぱい五十円也」の御抹茶の「ゴセツタイ」中であつた。ところで今どき「オカシコミ」までして「キュウクツ」な思いで「クツ」をぬぎ、お茶室にあがつて、お抹茶を「イタダコウ」なんて「ゴキトク」なお客さん方は少なかったようである。当然のことでしょうナ？然しサクならぬ竹垣の外から遠まきにながら、中の現代離れのしたお茶人方を眺めておられたと言う話だから、これも当然のことだろうと思われ

る。

兎に角、月に二回の九の日の休日がいけないと言うのではないが、若しその日が日曜日とかさなった日ぐらい、一日プラスか、または繰上げるぐらいの頭の「ヒラメキ」が出来ないような御

から下までこのようであつてはと黙って税金を「シボラレル」市民にとっては立つ瀬がないと言  
うものだ。

これと言うのも、一重に田町あたりの商店街のお店の御主人連中が、脱税?のために株式会社  
となり、奥さんまでをもふくめての「オテモリ」御重役と御出世なされ、はてはお客さん方の人  
前で、社員ならぬ店員さん方から「社長さん」呼ばわりをされて「ゴキゲン」そのもの、その上  
に「モウカッテ」仕方がない?からとも言ふことになり、ひいては九の日と日曜日とが重なつて  
も一斉休業と相成る始末となるようで、考えてみると案外お店屋さんの御重役の方々は「お金が  
余程にお嫌い」と言うことからではないかとも言えそうである。

最後に「観光菘市」の看板が泣くことのないように、菘市のオエライ御連中の方々は、大処高  
処より手をお打ちになられ口先きだけの「観光立市」にならないようにと、「トク」と言いたい  
ものである。

## 「男なら」を裸で踊れ!の巻

ある時、といつてもつい最近のこと、湯田の街へ行った折のこと、「男なら」の歌が聞えて来  
た、これは湯田の温泉組合から発行している「山口県民謡集」の中に「男なら」がのっているの  
だから、湯の街で「男なら」の歌の一つや二つぐらひは聞こえてくるのが当然のことだろう。  
ところがこの「男なら」の由来たるや、誠に漠然としていて、如何にも山口か湯田あたり、ま  
たは下関あたりの民謡のような感を受けざるを得ないのだから気になつてくる。

大体この「男なら」と言う歌や踊を、私は音痴ときていたので、こう言うものの鑑賞能力がカ  
ラッキシないのかもしれないが、それにしても「男なら」は菘の中で産れたものであるだけに、  
このことぐらひは大いに誇りたい気持ちだけは持っている積りである。

ところでこの菘の「男なら」の踊と歌を観、または聞いた感じでは、本当のところ、当時(幕  
末の頃)のものからは大分離れているのではないかという気がして来てならない。即ちその当時



の萩では武士は勿論のことその他の一般の若者達は「奇兵隊」に入隊して、海岸防禦の任にあたり、従って萩の男族どもは今の下関即ち馬関あたりへ出払い、残った者は婦女子と老人ばかりであった処え、この萩の沖をロシアの軍艦が通り、この萩に外国軍艦からの砲撃があるらしいとのことであって、恐らくこの萩では「上を下への大騒ぎ」の最中のことであつたようだ。そこで男族どもの留守中に、精力の余っていた御婦人連中は「オンド」をとり、テミイやモッコを担ぎ、あの一・五キロにもおよぶ菊ヶ浜一帯の砂浜に、あれだけの大きな砂の「ドテ」を築き、大砲よろしく大小、モロモロの町中のお寺の「ツリガネ」を担ぎ出し、その「ドテ」の上に乗せ、お手をかざして沖を眺め、遙かにしのべれたと言うほどの、萩オンナの心ニクイまでの心意気を天下に示されたのが、この「男なら」の根元の筈のものだから、今のあのウタやオドリによるものは、どうも上品すぎるようであつて、とても精力の余った女の「シグサ」や「テンポ」ではなさそうである。その道の専門家の話によると、今のように機械化された土木作業でも到底あの大きな砂の「ドテ」は一ヶ月や二ヶ月では出来る「シロモノ」ではなさそうであるから、あの当時、御婦人方を主体とした「人海作戦」であつて、あの砂の「ドテ」を作るのには、もつと「セイキ」あふれた「テンポ」の作業振りであつたと思われてくる。つまり当時のそんな「ムード」が、あの今の「男なら」をみると感じられないし、どうも不思議にさえ思われてくる。

ところがあの「男なら」の民謡については、萩の名士の言葉によると昭和二年頃に今のような「男なら」が正式に産声をあげた模様だから、あのような「マノビタ」スタイルと相なったものかもしれないが、まアその点は仕方がないとしても、折角萩で生まれたこの史上に類例のない女の壮挙「男なら」を今後その精神を生かし、これからの時代に合った、然も皆んなから愛されるものに育てて行くべきではないかと願うのは恐らく私一人ではあるまい。

最近の観光ブームと相まってこの萩の「男なら」がラジオに、テレビに出るようだが、萩を知つて貰う一つの方法としては誠によい機会であつて、そのためと言う訳のものでもあるまいが、「男なら」の保存会なるものが出来ていると言うことだが、これもまた誠に結構なることだと言ふはかはない。その保存にあつては、昔からあつたと称せられる正調「男なら」と言うものに余りこだわる必要はないのではなからうかという疑問さえ湧いてくる。

ところで歌や踊りというものは一つのリズムやテンポでもって構成されている芸術の一分野であり、これが矢張り誰からも愛される一つの基盤をなすものだろうから特定の者にしか歌えなかつたり、踊れなかつたりするものであるならば、それは民謡としての価値はなさそうに思われる。その意味からすると、今の「男なら」なるものの本質が疑われて来そうであり、また一考を要するのではないかとも言えそうである。

そこで踊についてであるが、これは吾々素人には全然歯が立たないのだが、踊を鑑賞する側からの理屈をのべると、踊なるものは視覚、聴覚、知覚の三つの感覚に空間と時間に運動を加えたものを総合的に処理された一つの芸術であって、これが観る者をして、心の中になにかを打つものがなければ、一つの芸術的民謡とは言えそうにないようだ。

だから幾ら一人よがりにも他人を引張ろうとしたところで、興味のあるものは別として、興味を持たない一般の人までも引ずりこもうとする何物かがなくては、真の芸術的民謡とは言えそうにないような気がしてくる。即ち誰しもが口ずさみ、誰しもが踊りたくなるようにさせるためには「男なら」のリズムやテンポがもつと人間の心の中にある琴線にふれる「何か」をそのものが持っているかどうかということによってきまるようで、そのためにはもつともつと色々な立場から「男なら」が批判されハグクマレ、育てられて行くことが、これからの「男なら」に残された大きな課題になるようだ。

ところで踊や歌の本質はさておき、具体的にはこの「男なら」の民謡を運営するにはどのような要素がふくまれているかということ、素人の一人として、この際考えてみる必要があるようだ。即ち「男なら」の場合一応「ジカク」と「踊の者」とに分けて十五名の構成として考えた場合、ジカクの者は一応蔭のチカラだから、それ程ではなくとも踊る者ともなると「キレイドコ

ロ」の集りであることが第一条件のようだ。一般には御綺麗な御婦人をみただけで、踊はどうでも「タメイキ」を出されると言う御仁の多い世の中のことだから、先ずはその人選が問題である然もこの人選が金ではどうにもならないほどの「シロモノ」のようだ。第一人間の顔なんでもは親からのスジが通っている、オイソレとは勝手に付けかえられるものではないのだから甚だ面倒である。

然し一応の人選が済んだとしても次には揃いの衣装と言う難問が控えている。この踊の衣装なるものは普段に着て歩けるようなものではないので、個人負担という訳にも行かないし、会として作るにしても五万や十万ぐらいの金額ではどうにもならないものだから、考えただけでも大変なものになる。

ところでどうしても必要な物としては、先ずはそのための足袋代（三百円から八百円位）から始まって上は頭の髪の毛のセット代（約三百円）、顔の化粧品（ドーランなど普通の化粧品とは違うようだ）そして揃いの衣装と合せてジュパンのスソ合せ（キレ代約四百円）その上着付け料などを計算してみると一人当りの負担額は最低でザット千五百円から二千円を越してくる。それに衣装や顔の手前、気張ってタクシーにも乗りたくなくなるのは人情と言う訳で、ザット見積っても二万円を遙かにオーバーと言うことになるのだから、一回の出演の謝礼として五千円や一万円ぐらい

の金を貰ったとしてもそれは「天井からの目薬か」「焼石に水」の諺のタケイのものであって、実際には、日当のことなどを考え合せてみると、失対労務者以下ということにもなりそうだが、ところがこの実費なるものはモトモトお弟子さん方の負担であり、それぞれの師匠さん方は、そのお弟子さんの犠牲の上に立ってこそ、よい顔が出来るということにもなりそうである。即ちお弟子さんあつての師匠であり、その師匠さんがPRの会のためにチョイチョイお稽古をお留守にしていたのでは、他のお弟子さん方はつかなくなり、しまいにはオマンマの喰いあげということにもなりかねない。

計算してみると千や二千のはした金を貰って出演しているよりも、稽古を休まない方が遙かに実いりがよいと言うことになりそうだが。

ところでお弟子さん方というのは所謂「オトシゴロ」という御年令であつて、目の前にお嫁さんという座が待っており、御父兄の方も品物よろしく、買手のつくのをお待ちになっておられるようなもので、言わば踊るものもそのための商品価値を高める「レットル」のようなものであるらしい、だから進んでPRの会などに娘さんを出演させたくないのが御父兄の御心情のようであつて、芸で身を立てようなんて「ゴキトク」なお考えの娘さんは今どきそうザラにはなさそうだが。従つて一応うまくなつたお弟子さんはサッサと師匠の手を離れて涼しい顔をしてお嫁さ

んの座におつきになるのだから何処へ出してもハツカシクナイというお弟子さんは数が少いと言ふ訳になる。その上顔の問題が加わってくるのだからマスマス面倒になつてくる。

このようなそれぞれの事情を考えてみると簡単には踊れるものではなく「ガン」のかかるものであるようだ。

ところが市の責任者や、町の名士の方々はイトモ簡単に萩市のためにだとか、または色々な美名にかこつけて、御利用をなさろうとされているようだが、考えてみると失対人夫以下の「裸でオドラサレ」ているのが今の芸能家協会の「スガタ」ということになりそうだが。責任者の方々は案外、裸でオドル「男なら」を御希望の向きが多いのかもしれないが、と言うことになりそう

#### 追記

○菊ヶ浜御台場(女台場)——北古萩。菊ヶ浜の東部に高さ三メートル、巾十二メートル余りの砂堤(松林になっている)が、五十メートルにわたって残存している。幕末、外国軍艦が長州沿岸をうかがっていたころ、藩が士民の協力をえて造った台場跡である。婦人が多く出役したといひ伝えられ、「女台場」の別名があり、民謡「男なら」が生れたところである。

○男なら——江戸時代末期には、討幕と攘夷決行の気運は、萩藩を防備に狂奔させる。文久三年（一八六三）、外艦来攻に備えて、菊ヶ浜に台場（防禦陣地）が築かれた。下関に出動した武士の留守をまもる萩の老若男女は、こぞって台場造りに参加した。この「男なら」は、この作業の際に唄われたもので、作者は不明である。

“男なら、お槍かついでお仲間となつて、ついて行きたや下ノ関、お国の大事と聞くからは女ながらも武士の妻、まさかの時にはしめだすき、神功皇后さんの三韓退治が、鏡じゃないかいなオオシヤリシヤリ”

## あとがき

この年令になつて始めて気がついたことは、分家が本家をたてたくなるような「人情のキビ」から善意に考えられ、この郷土萩の歴史も脚色され、悪い面は明治維新がくれをし、良い面だけを打出し、綺麗に作られすぎ、かえつて凡人には魅力がなくなり、たとえ人から聞かされ、話されたとしても、すぐに忘れてしまいたくさえるような点があるのではないかと言うことだ。人聞誰しも、上の階級のことに対しては、一部の者を除いては目を向けたがらないが、下の方のものには無暗と同情したくなるのが世の常のように、上手に出来すぎた欠点のないものよりも、欠点だらけのものに親しみを感ずるものの方がよい。したがって前文の中でもふれたように、たしか萩城はかつて廃藩置県の折全国にさがけて解体されたものだと言われると、ナンダカお城の解体に美しい意義が感じられるようだ、然しよく調べてみると萩城の解体と廃藩置県とは直接的には余り関係はなさそうだし、廃藩置県が明治の四年、萩城の解体が明治六年の十二月から七年に

かけて天守閣をふくむ二十四にもおよぶ矢倉や砦が、その当時のお金で二千二百十三円五十銭で入札され、はては大阪商人へと売却されたものであると聞かされると、一体その理由はどうだったものだろうかとか、またはその当時の金額と今の金額とではどのくらいの開きがあったものだろうかとか、いろいろと疑問が頭に浮んできたりして、かえって「美しく脚色されすぎたと思われる歴史」よりも反対に魅力をそそる材料ともなるようだ。然も考えてみると、この萩城は文久三年には既に毛利のお殿様である敬親公は、幕末政情御多端を理由に、居城を山口へと遷しておられるし、明治四年の廃藩置県から二年も経ち、その上山口の居城を解体されたのならば話は別なのだが、当時空家同然の萩城を解体されて、一体廃藩置県とどんな関係があったものだろうかと言う疑問が湧いてくる。またそのように考えれば考えるほど、次から次へと次第に疑問を呼び、そのことが現存しているものにふれさせる原因ともなり、そのことがかえって、その当時の時代と現代とを比較させると言うことにもなりそうだ。つまりそのことが時代と言う歴史にかえって親しみを感じさせ引いてはこの郷土萩にも忘れられない愛着をいだけ結果ともなるのではないかとも言えそうである。

またこれと同じように、萩城の周辺の三の丸解体についても、大きな疑問ばかりである。つまりお城の外堀からお城によった、今の堀内全域は藩府のお役所と御家老職その他の藩の重臣の御

一統方のお住いであり、可成りのお屋敷があったことは明治維新前の萩の古地図をみても言えることだ。

ところが、これらのお住いは一名「下屋敷」とも言われるもので、毛利の御重臣方は夫々の禄高による御領地を拝領されておられたのだから、その御領地の方に本宅があった訳で、この萩の堀内にあった「下屋敷」とは、さしずめ現在で言う「妾宅」のタゲイであり、その妾宅が「イタケダカ」に堀内の全域にコレミヨガンにそびえ立っていたのだから、堀内あたりは「妾宅街」と言った方が「ピッター」といいたいところである。従って堀内の三の丸は、いわば戦前の将校集会所とも言えそうである。だからそのような考え方を押しすすめて行くと、この堀内は「将校集会所」兼「高級将校専用慰安婦街」とも言えそうになり、引いては萩での「お家柄」のほどもその根拠が甚だアヤシクさえなってくるようだ。

従って大平洋戦争の終戦ならぬ明治御維新（つまり足軽どもの軽輩の子郎党が天下を取られたのだから一種の改命とも思われる）ともなると、今まで萩の城下町で大いに威張っていた将校級の毛利の御重臣方は、ワレガチニと城下の三の丸の妾宅を離れ、本妻のおられる御領地の本宅へとお帰りになられたのは当然のようにも思えてくる。だからそのあと、その「主人方」を失った妾宅街と言うものは成立つ訳のものでもなく、堀内あたりが哀れなる道をたどったのも当然のよ

うにさえ考えられてくる。

兎に角この堀内には今も一部に残る築地（ドベイ）や門長屋（門番どもの住んでいた屋敷）をみても分ることだが、その「下屋敷」の本屋やその他の付属の御座敷なるものは、萩城が解体された明治七年頃から二、三年もたたないうちに、その全部が無くなってしまったと言ふ不思議な現象？である。即ち文献によるとこの堀内一体のお屋敷跡に、小幡高政なる方の指導によって当時の失業の士族救済のために萩の特産夏みかんの木が植えられたのが明治九年のことだから、その折には既に堀内の高級住宅はなくなっていたことになる。考えてみると、大平洋戦争の終戦当時、軍の糧秣廠や被服廠あたりの将校連中が「雲がくれ」され、一般民衆がその軍需物資を次々に「リャクダツ」した事件と同じようなことが、当時この堀内全域においても行われ、萩の町民から瓦ははぎとられ、家は倒され、柱は持ちさられると言った始末で、明治九年頃には一応その跡方もなくなっており、そのため仕方なしに夏みかんの木が植えつけられたように考えられてくる。従って夏みかんの木を植えるために態々高級住宅がこわされたとはどうしても考えられそうにもないようだ。以上のような事情からその当時行くところのなかった、下っ端の門番などの人たちが住んでいた門長屋の家だけは残され、そのほかのあとの妾宅なる大邸宅は殆んど壊されて了ったと考えてよいのではないかと思われる。然もこのことは歴史の上でも新しいことなのに、その間の事情に

ついでには一向にその史実さえ残されてはいないのだから、不思議という外はないようである。

考えてみるとこの萩の身近かなことさえそうなのだから、遠く離れたことや、古いことなどは勿論のこと、ただ人の受け売りにすぎないし、その受け売りの善意がかえって「アダ」となり聞かされる者をして魅力を失なわせて了うものではないかとも言えそうである。

どうか吾々の郷土であるこの萩がそのようにならないようにと祈り乍ら、この拙文によって一人でも二人でも多くの方々がこの郷土萩に新しい別な立場からの見方がなされ、そうすることに よって萩に魅力を感じられるようになり、ひいては愛着をいだかれるような結果ともなることを願い、また一方では他都市からの観光のお客さん方に萩を観て頂くための手だすけにでもなれば幸せるものと、そのみを念じている。

本書中の巻末にのせた追記はそれぞれ「萩市の文化財」（萩市教育委員会編集発行）並に「萩観光ガイドブック」（萩市郷土博物館編集発行）の解説文を借用し、本文を読まれるお方の便をはかりました。誌して感謝の意を表します。

どうかこの本書が、萩の自然環境と歴史をたずねられるための「足がかり」ともなるように祈り、また短時日の間に仕上げた関係もあり意外な不備誤謬もあることと思われませんが、御叱正を賜われれば幸甚です。



12	11	10	9	8	7	6
平安時代			奈良時代	大和時代 (飛鳥時代)		
一一八五			七五二	六四五		
寿永四年			天平勝宝四年	大化元年		
南明寺の聖観音像(重要文化財)千手観音像はこのころつくられたものらしい。 平家が壇ノ浦で滅亡した。この頃に平家の残党が阿武川流域に定住したものらしい。			このころ見島に古墳がつくられたものらしい。 東大寺が建立された。(国守家が伝説にのる) このころ大井や中津江に大きな寺が造られた。	大化改新	大井が阿武地方の中心地として栄え、古墳が作られた。このころ朝鮮から仏教が伝わったらしい。	

5	4	3	2	1	世紀	年 表
大和時代 (古墳時代)		弥生式文化			時代	
					西 暦	
					年 号	
朝鮮からすぐれた文化を持った人々がたくさん帰化しはじめた。		大和朝廷によって日本がほぼ統一された。			北九州の豪族と中国(漢)との交易が行なわれた	
					稲作はじまる 青銅器が大陸より伝わる	
					項	

18					17				
江戸時代									
一七五八	一七五〇	一七三二	一七一八	一七一七	一七〇九	一六九一	一六八七	一六七七	一六六〇
宝暦八年	寛延三年	十七年	三年	享保二年	宝永六年	元禄四年	貞享四年	延宝三年	万治三年
<p>毛利綱広が万治制法を制定した。幕府の要請に応じ河村瑞賢、北前船の西廻り航路の下見をする。この頃から北前船が越ヶ浜に寄港するようになったものと思われる。萩藩では始めて藩札を発行した。</p> <p>新堀川がつくられた。</p> <p>黄檗宗護国山東光寺の建造に着手された。</p> <p>吉田町に救米蔵が建てられた。</p> <p>藍場川がつくられた。</p> <p>旧明倫館がつくられた(堀内三の丸)</p> <p>周防長門大飢饉(全国的な大飢饉であった)</p> <p>大照院が再建(現存)された。</p> <p>栗山孝庵が萩で死体の解剖を行った(日本で二番目)</p> <p>ヨーロッパの学問が少しづつはいつてきた。</p>									

17			16		15	14	13
江戸時代			山代 桃山 土安 室町時代		鎌倉時代		
一六〇〇	一六〇四	一六一八	一五五七	一五五〇	一五四九	一五〇四	一三五八
慶長五年	九年	元和四年	弘治三年	十九年	天文十八年	永正年間	正平十三年
<p>関ヶ原の戦(毛利輝元、周防長門国二国の領主となる)</p> <p>毛利輝元が萩城築造に着手した。(慶長十三年完成)</p> <p>五郎太石事件(熊谷元直の処刑)</p> <p>雲谷等顔死す。</p> <p>常念寺門(重要文化財、元聚楽第裏門)寄進さる</p> <p>島原の乱おこる。</p> <p>幕府が鎖国令を出した。</p>			<p>萩の名がはじめて古文書に表われた。</p> <p>長門国が毛利元就の領地となった。</p> <p>文禄の役(第一次朝鮮征伐)李敬・李勺光、陶工として広島吉田に入国する。(坂窯の開祖)</p> <p>慶長の役(第二)</p>		<p>この頃見島の豪族が朝鮮と交易した。</p> <p>大和国三輪村の陶工が萩で窯を起した(人間文化財三輪休雪氏説で信頼がおけない)</p> <p>フランシスコ・ザビエル日本に来航</p>		<p>志都岐神社の光房、延吉の刀(重要文化財)はこの頃つくられた。大照院の赤童子像(重要文化財)はこの頃つくられたらしい。</p> <p>長門国が大内氏の領地となった。</p>

江戸時代

一八四一	一八四三	一八四四	一八四八
天保十一年	十四年	弘化元年	嘉永二年

黄檗宗護国山東光寺の三門が出来た。(この建物にキリシタン瓦があった)  
 吉田松陰生る。  
 村田清風江戸仕組掛となられる。  
 毛利敬親公大砲の演習を先小畑にみられる。  
 越ヶ浜に撫育局越荷方なる役所のあることが文書にのっている。  
 高杉晋作生る。  
 毛利敬親公、文武の師を城中に召される。  
 山鹿流兵家吉田矩方(十一才)武教全書を講ぜられる。  
 村田清風、藩士妻女の衣裳を男に準じて綿服とする。  
 村田清風、講武上書す。  
 明倫館生の怠慢なるものを退館させられる。  
 羽賀台関兵 総人数三四、九〇六人、総馬数一、三三五匹と誇称されている。  
 青木周弼に南苑西洋学所を会業させられる。  
 萩沖の大島、相島に望楼を建て、黒船の警護にあたらされる。  
 新明倫館がつくられた。  
 萩に種痘が移入された。  
 吉田松陰九州遊学の途に上られる。  
 明倫館生皆勤者を賞せられる。

江戸時代

一八五〇	一八五一	一八五四	一八五五	一八五六	一八五九	一八六一
嘉永四年	五年	安政元年	二年	三年	四年	文久元年

吉田松陰孫子を公前に講ぜられる。  
 十二月松陰藩は許可なく東北遊歴に上られる。  
 松陰亡命の罪により土藩を削られる。  
 三月松陰、重輔と共に下田港にて米艦に乗ぜんとして失敗、自首される。  
 十月二十四日野山獄に入られる。  
 姥倉運河がつくられた。  
 村田清風没せられる。  
 吉田松陰杉家にあづけられる。  
 台場が各所に構築される。  
 吉田松陰が松下村塾で教育を行われた。  
 反射炉がつくられた。  
 松陰正式に家学教授を許される(七月)  
 松陰野山獄に下られる(十二月)  
 松陰処刑される。  
 高杉晋作に上海行を許可される(一月に出発され八月に帰られる)

20	19
現	代
一九五五	一八八九
一九三二	一八七六
一九二七	一八七五
一九二五	一八七三
一九一〇	一八七一
明治四十三年	明治四年
大正十四年	明治六年
昭和二年	明治八年
昭和七年	明治九年
三十年	二十二年
市村合併された。	萩町となった。
市制施行された。	前原一誠の乱(萩の乱)
萩が開港となった。	萩に電灯が設置された。
萩に鉄道が敷かれた。	萩に電灯が設置された。
萩が開港となった。	萩に電灯が設置された。
市制施行された。	萩に電灯が設置された。
市村合併された。	萩に電灯が設置された。

19	
現代	江戸時代
一八六八	一八六三
明治元年	文久三年
越ヶ浜に山口県ではじめての水道が設けられた。 戊辰の戦役	萩ヶ浜に女台場がつくられた。 藩庁が萩から山口へ移された。 高杉晋作剃髪東行と号せられる。 毛利藩下関にて外国船を砲撃する 卒族の明倫館へ入学を許される
	蛤御門の変。
	英、仏、米、蘭四ヶ国聯合艦下関を侵す。
	第一次長州征伐、高杉晋作藩を脱走される。
	薩長連合なる(一月)高杉晋作挙兵される。
	第二次長州征伐大島郡開戦幕艦四隻撃沈兵数百戦死(六月十九日)
	高杉晋作没せらる(四月十四)野村望康尼三田尻にて没せらる(六月)

国指定

1 重要文化財

種別	名称	員数	指定年月日	所在地
建造物	常念寺表門	一棟	昭和25・8・9	常念寺
彫刻	木造聖観音立像	一牀	"	南明寺
"	木造千手観音立像	"	"	"
"	木造赤童子立像	"	"	大照院
刀剣	太刀銘延吉	一口	"	志都岐山神社
"	太刀銘延吉	"	"	"
繪画	絹本着色春冬山水図 載文進筆	二幅	昭和31・6・28	菊屋嘉十郎

2 史跡

史跡	名称	員数	指定年月日	所在地
萩城跡	萩城跡		昭和26・6・9	堀内
松下村塾	松下村塾		大正11・10・12	椿東
吉田松陰幽囚旧宅	吉田松陰幽囚旧宅		大正11・10・12	椿東

3 天然記念物

天然記念物	名称	員数	指定年月日	所在地
伊藤博文旧宅	伊藤博文旧宅		昭和7・3・25	呉服町
木戸孝允旧宅	木戸孝允旧宅		"	"
明倫館水練池付明倫館碑 及び有備館	明倫館水練池付明倫館碑 及び有備館		昭和4・12・17	江向
旧萩藩御船倉	旧萩藩御船倉		昭和11・12・19	東浜崎
萩反射炉	萩反射炉		大正13・12・9	椿東

4 記録作製等の措置を講ずべき無形文化財

天然記念物	名称	員数	指定年月日	所在地
明神池	明神池		大正13・12・9	椿東
笠山のコウライイタチバナ 自生地	笠山のコウライイタチバナ 自生地		大正15・2・24	"
木部の大せんだん	木部の大せんだん		昭和13・12・14	椿
見島ウシ産地	見島ウシ産地		昭和3・9・20	見島
見島亀生息地	見島亀生息地		"	"

萩焼保持者

輪邦

広

昭和32・3・30

椿東

山口県指定文化財

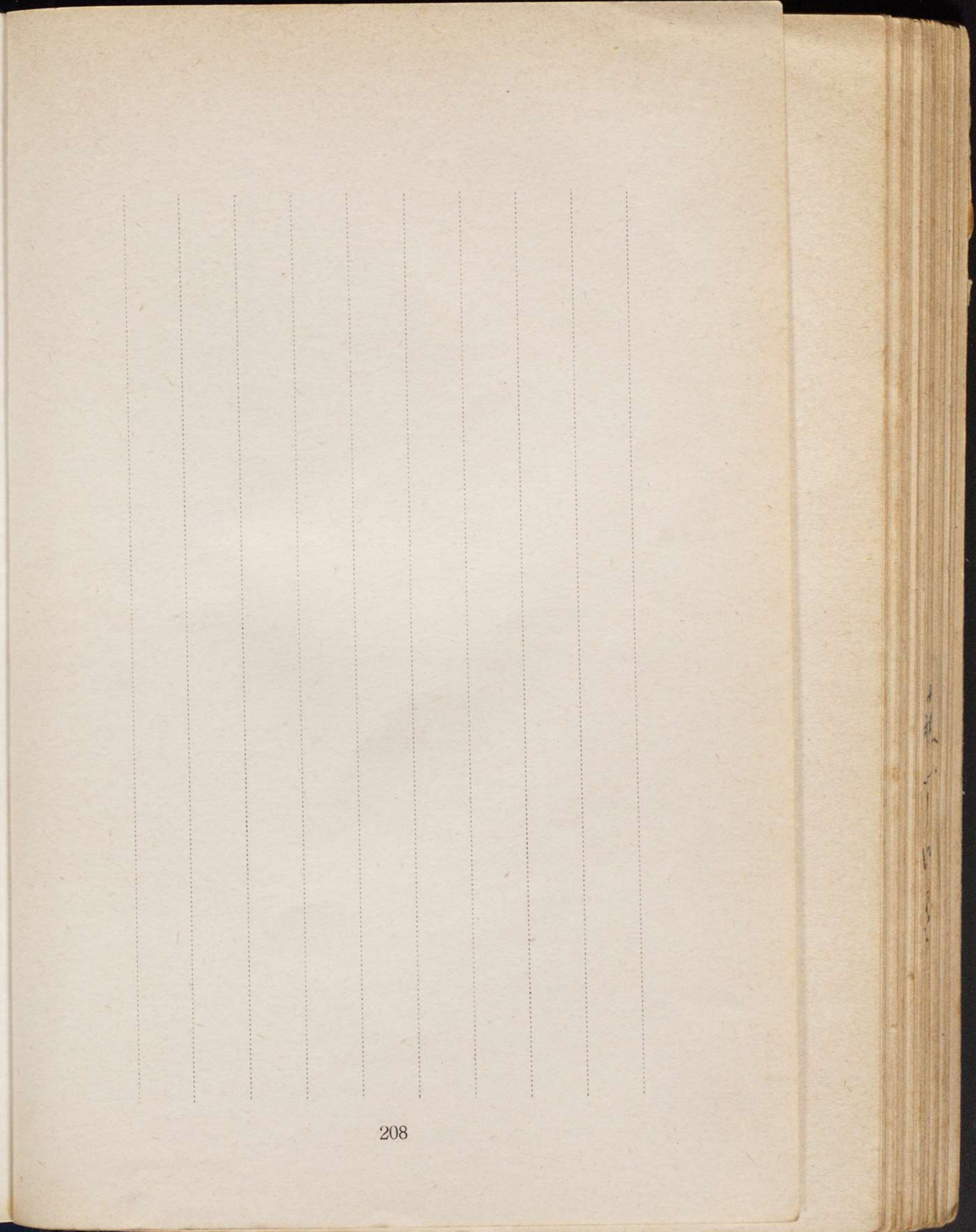
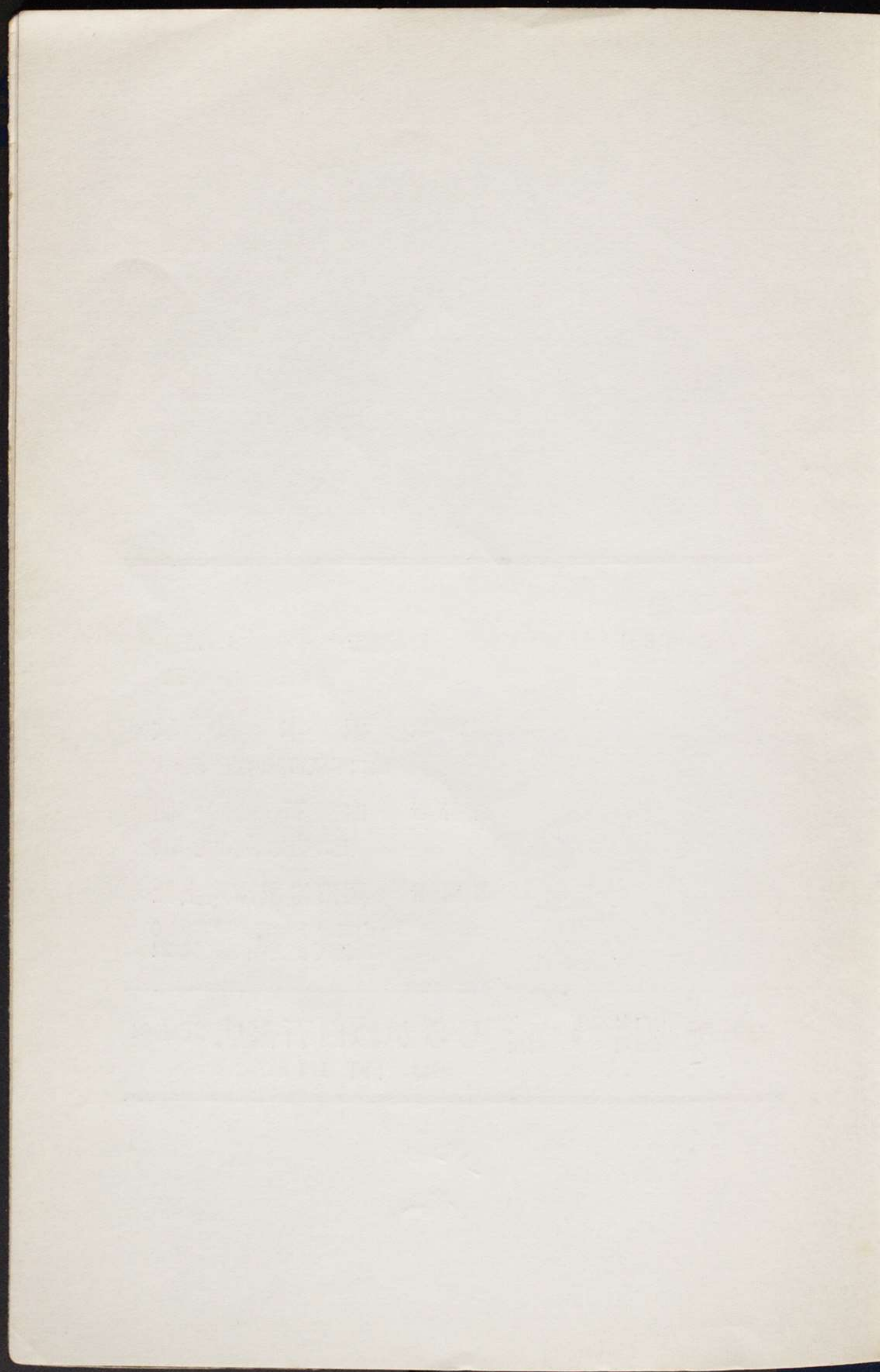
彫刻	木造釈迦如来座像	昭和35・4・26	椿	大照院
"	木造不動明王立像	"	北古萩	
天然記念物	河内の大棕	"	河内	長寿寺
無形文化財	萩焼保持者	昭和31・8・25	椿	
工芸技術	三輪休雪十代		椿	
無形文化財	住吉神社「お船謡」	昭和33・5・9	浜崎	

萩市指定文化財

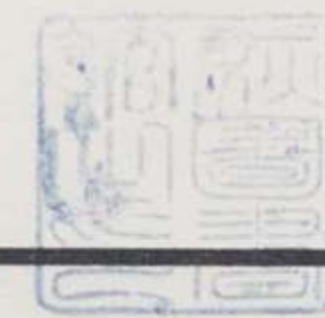
天然記念物	指月山の樹叢	昭和37・1・11	堀	
"	大照院の大藤	"	椿	
史跡	指月山のミカドアゲハ	"	堀	
"	村田清風別宅跡	昭和37・12・24	平安	
建造物	萩城下街割原標石	昭和37・11	江向	
"	東光寺総門	昭和37・3・26	椿	
"	東光寺三門	"	東	

建造物	東光寺大雄宝殿	昭和37・1・11	堀	
"	東光寺鐘楼	"	"	
"	口羽良通氏宅門	昭和37・12・24	"	
"	旧周布家門長屋	"	"	
"	問田益田氏旧宅土塀	昭和37・11	"	
"	平安安橋	昭和37・12・24	平安	
無形文化財	玉江浦「天狗拍子」	昭和37・12・24	玉江浦	
"	木間「神代の舞」	"	木間	

(メモ) 時代から取残されたこの萩が、かえって現代人に「古い静かなる町」と言う印象を与え、この本を読んで頂く奇縁ともなった訳ですが、これを御縁にこの本を読まれてからの萩の印象をこの欄にメモして頂き、今後いつの日にか、この萩の町の姿が如何に変わって行ったかと言うための参考にして頂ければ幸甚です。







---

萩随記

昭和40年8月

初版発行 ￥.300

送料 70

著並に絵 沢本良秋

山口県萩市堀内菊ヶ浜481

発行者 白石明

山口県萩市東田町58



印刷者 岡田印刷株式会社

山口県下松市東豊井916  
電話(下松)代表④2424

---

発行所 山口県萩市 株式会社  
東田町58

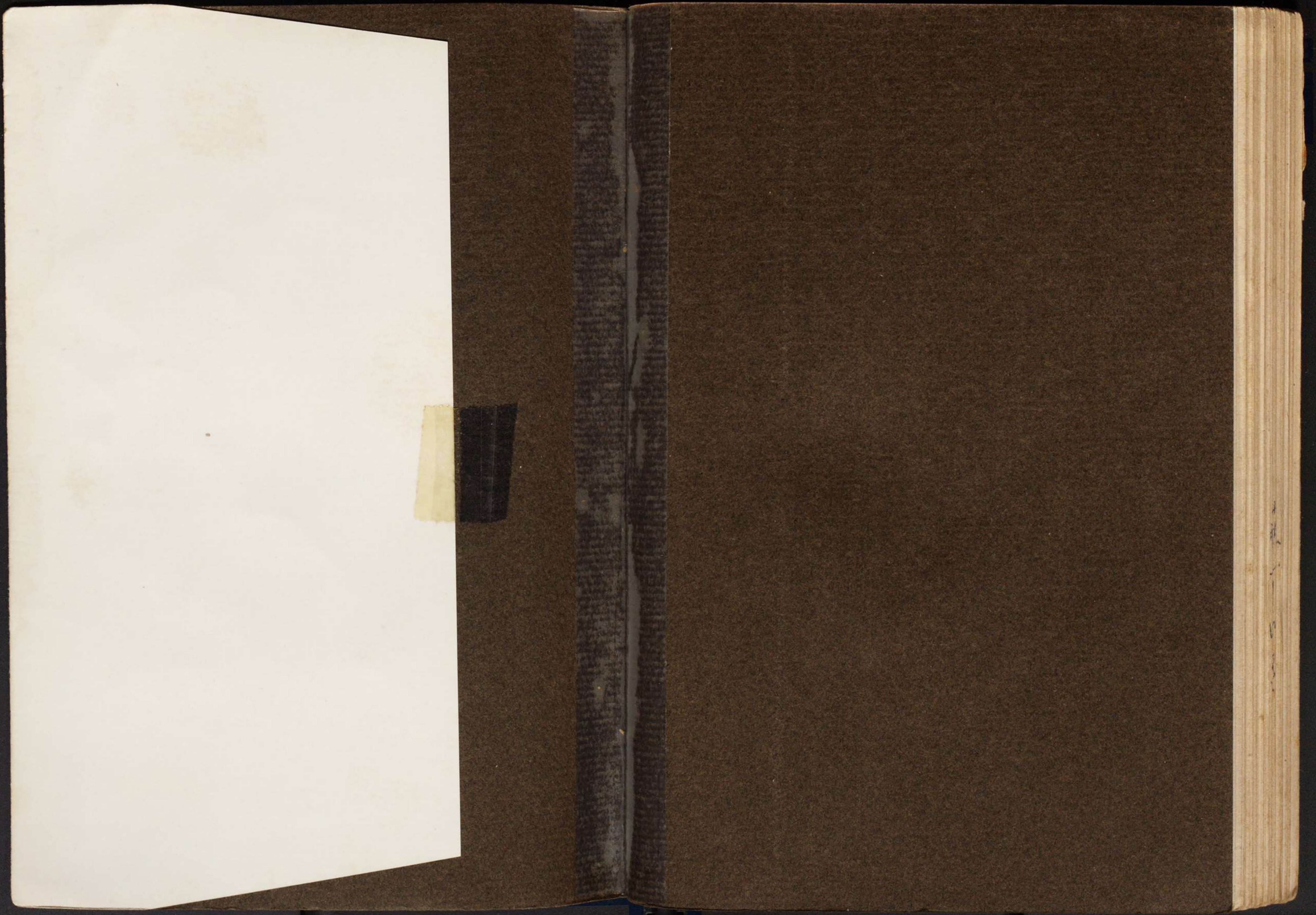
しらがね白石書店電(萩)84

振替 下関 14870

---

2/2p

19cm





萩市立図書館



111352225

沢本良秋